国語史学

近古の国語

土井忠生

國語科學講座

—V—

國語史學

近古の國語

土井忠生

株式會社
明治書院

國語科學講座

— V —

國語史學

近古の國語

土井忠生

株式會社

明治書院

目次

近古の國語

土井忠生

第一章　序　說

國語史に於て言ふ所の近古は、院政・鎌倉・室町の三時代に亘る約五百年間を指してゐるものと解せられる。國語史の上で、院政時代を平安朝から切離して、鎌倉時代と一にすべきことを論じたものは、山田孝雄博士の奈良朝文法史の序論に見える說が早いであらう。卽ち、山田博士は、古代より近世への變遷は、院政時代に萌して鎌倉時代へと進んでゐるので、この兩期を一にし、今昔物語集はその變遷の徵を示した最初のものとして、これが出現を以て、この時期の初を劃されたのである。

實に、源氏物語によつて代表せられる中古の物語小說の用語は、女性の言葉であり、宮廷を中心とする貴族階級の言葉である。これに對して、今昔物語集の用語は、僧侶や儒者の言葉であり、武士を中心とする庶民階級の言葉である。而して、源氏と今昔とのかゝる用語上の相違はそのまゝ全部を時代的推移に歸するわけには行かない。夫々に異なつた社會の言語を反映してゐるが爲ではあるが、然し又、從來京都語の圏外にあつたが、京都の地にあつても下層

に潛流してゐて、文獻上に記載せられる機會も與へられなかつた武士言葉や庶民語が、この時に及んで文學的作品にまで登錄せられるに至つたのである。卽ち、新時代を生み出し、新時代を支配した者の言語が著しくその地位を高め勢力を增したのである。この事は旣に京都語に於ける注意すべき變化である。故に、語彙語法等に新時代色を見せてゐる今昔物語集の現れた院政期の初頭を以て、國語史の時期を劃することは充分の理由を持つてゐる。

次に、然らば近古の終は何時を以て限つたらよいのであるか。春日政治教授は、桃山時代の言語は現代國語の基調が出來上つた歸着點であるといふ意味に於て、桃山時代が一紀元を劃してゐると觀られた(「國語史上の一劃期」)。織田信長の上洛以後、京都の語はある變化を受けたやうであるから、かゝる見解は當を得てゐるかも知れない。

然しながら、院政時代以後江戶時代の初に至る間は、中古語から近世語へと移りゆく過渡期である。更に又、院政時代は平安朝と鎌倉時代との間、安土桃山時代は室町時代と江戶時代との間に挾まれた小過渡期である。さうして安土桃山時代は鎌倉室町時代に於ける過渡的な特徵をも保存してゐるのであるから、過渡的狀態を以て全體の特色となす近古の中に、安土桃山時代を含める事も許されるであらう。院政時代は中古語から近世語への過渡狀態に入つた時であり、安土桃山時代はその狀態を脫しつゝあつた時であつて、近世語が出來上るのには、江戶時代に入つて尙百年近い期間を要したのである。

かくして、白河上皇の院政を始められた寬治元(西紀一〇八七)年から家康の將軍に任ぜられた慶長八(一六〇三)年に至る五百十數年間を以て近古としてよいのであるが、この長期間を通覽するに、初と終とでは可なり著しい變化が認められる。その差異を重要視して院政鎌倉時代と室町時代とを對立せしめ、夫々に平安朝や江戶時代と同列に置かう

とする說も出て來るけれども、前後との變化に比較するならば、院政鎌倉時代と室町時代との間の變化はやゝ少い。故に、普通にはこれを以て近古の中の小區分としてゐる。それにしても、主として資料の不足の爲に、その兩時代を截然と分つべき時期に就いての研究がまだ行き屆いてゐないので、こゝには、近古全體を一括して說くより外なかつた。たゞ個々の事柄については、その間の變遷を述べるやうに力めた。

近古語の研究資料は量の上から言つて決して少くはない。且又、當時の原本の今日に傳存してゐるものも稀ではない。然し、かゝる第一資料を彼是と探索涉獵する事は私の能くし得ない所であるから、多くは諸先輩が根本資料に就いて調査研究せられた結果を拜借して筆を進め、その間多少私自身で新に加へ得たに過ぎない。又、近古五百餘年間に於ける口語の變遷を大觀すべきであるにも係らず、或は重要な事項を全く逸したり、或は些細な事項を詳述したりしてゐるのは、畢竟、近古語全般にわたる智識が整つてゐないからである。吉利支丹側の資料に據る所が多かつたので、室町末期が特に委しくなつたのもやむを得ない。すべて、私自身としては、諸先輩の研究を纏めて、私自身の研究を進めて行く上の假りの目標を立てゝ見たに過ぎないのである。さうして、紙面が限られてゐるので、語彙には及び得なかつた。音韻語法に關しても亦全體の組織を整へるよりは簡單に纏めるのに便宜な體裁を採つたものであることを特に斷つて置きたい。次に、參考に用ゐ資料を仰いだ主要な文獻を擧げておかう。

平家物語の語法　山田孝雄　大正三年刊。現存の平家物語諸本中で鎌倉時代の面影を傳へてゐると推定せられた延慶本(延慶年中紀州根來寺にて書寫の奥書を有するもの)を用ゐてなされた忠實精細な語法研究である。鎌倉時代の語法を研究するのに基礎となるべきものである。當時の口語は平家物語の會話の中に窺はれると思ふが、本書では地の

文も會話の文も區別しないで取扱つてあるので、口語のみに就いて知らうとするには注意を要する。

室町時代の言語研究　湯澤幸吉郎　昭和四年刊。抄物にあらはれた語法を綿密に研究してある。その材料にとられた抄物は、勅規桃源鈔(寛正三年抄畢、永正六年寫)、論語鈔(天隱龍澤? 文明七年跋、民友社覆刻)、史記抄(桃源瑞仙、文明九年抄、寛永三年板)、古文眞寶之抄(笑雲清三、大永五年奥書、刊)、四河入海(笑雲清三、天文三年抄、刊)、蒙求抄(清原常忠の孫某、享祿年間抄、寛永十五年板)、三體詩絶句鈔(季昌新注、元和六年跋、刊)、中華若木詩抄(如月壽印、寛永十年板)の八種である。年代の明確なもののみを選ばれた爲に後の刊本が多いのは致し方ない。抄物の用語を室町時代に於ける一般の口語と見做してよいかといふ事には疑問があるが、當代の口語法研究には不可缺の參考書である。

文祿元年天草版 吉利支丹教義の研究　橋本進吉　昭和三年刊。一五九二(文祿元)年、天草學林版吉利支丹教義 Doctrina Christan の羅馬字綴なのを國字に改め、その用語に就いて精緻な研究を盡されたものである。原本が文語で書かれてゐるので、語法研究に寄與する點はさほど多くないが、發音に關しての研究は音韻史に貢獻する所最も大である。

天草本平家物語の語法　湯澤幸吉郎　「教育」第五百三十九號(昭和三年一月)所載。一五九二(文祿元)年、天草學林版平家物語(委しくは「日本の言葉とイストリヤを習ひ知らんと欲する人の爲に世話に和げたる平家の物語」)を國字に飜字した龜井高孝氏の天草本平家物語(昭和二年刊)に基づいて語法的研究を加へられたものである。

天草本平家物語四卷は、禪坊主落ちのイルマン不干ハビャンの口譯に係り、灌頂卷を別に立てない系統の百二十句本に據つてゐるが、たゞ第一卷及び第二卷最初の一章「祇王淸盛に愛せられた事」等は、私の照合した百二十句本(京都府立圖書館藏)とは一致しないで、別系統の流布本の本文に近い。流布本の何れと一致するかは未だ確かめてゐない。

何れにしても、原本の文語文と天草本の口譯文とを比較することによつて、近古に於ける中期頃と末期との相違變遷を可成りに明かにし得る。

國語史上の一劃期―文祿伊曾保を中心とした語法― 春日政治 新潮社版日本文學講座所收 初版第十四卷第十八卷 昭和三年刊。一五九三(文祿二)年、天草學林版伊曾保物語 Esopono Fabulas を中心とし、前記の平家物語その他の吉利支丹物語等をも資料として、桃山時代の音韻語法の注意すべき點に關して考察してある。伊曾保は新村出博士の文祿舊譯伊曾保物語(明治四十四年刊)なる飜字本と共に原羅馬字本をも參照してある。新村博士の飜字本は昭和三年に改訂版が出た。

日葡辭書 Vocabulario da lingoa de Japam. 本篇一六〇三(慶長八)年補遺一六〇四年長崎學林刊。古今雅俗の日本語約三萬を集錄して、葡語で說明した當代辭書の隨一である。日本耶蘇會士の共編になるが、その主宰者は少くとも、次に述べるロドリゲスではなかつたと考へられるので、音韻語法方面に關しても、ロドリゲスの文典と併せ見るべき價値を持つてゐる。

ロドリゲス著日本文典 Arte da lingoa de Japam. 一六〇四―一六〇八(慶長九―十三)年長崎學林刊。葡萄牙生れの宣教師ジョアン・ロドリゲス João Rodriguez がアルヴレスの拉丁文典に倣つて日本文法を組織立てたものである。耶蘇會士の四十年間にわたる研究に基づき、日本人の所說をも廣く參考し、加ふるに彼の該博な學識と卓拔な見解を以て集大成した大著である。當時の日本の言語文字を大觀して詳細に記述說明したものである。主として標準語たるべき口語を對象としてゐるが、又方言に及び文語にも觸れてゐる。發音を委しく說いてゐる事は本文典の國語史料

として最も價値多い所以である。故に、この稿では能ふ限り利用することに努めた。單に大文典と標して引用するのは本文典を指してゐる。引例の口語文で何々物語又は何々の舞と記したものや、何等出典を記さない語句はすべて本文典所引のものである。

ロドリゲス著日本小文典　Arte breve da lingoa Japoa. 一六二〇(元和六)年媽港學林刊。同著者の長崎版大文典を簡約にしたものであつて、大文典は事實を詳細に載錄してゐるのに、小文典では規範的態度が著しく濃厚に現れてゐる。前著に改訂を施した點も尠くなく、大文典を見る者は必ず參照すべきである。この小文典の佛譯 Elémens de la Grammaire japonaise (一八二五、文政八年巴里刊)は不完全な寫本に據つてなされたので、日本語に關して誤謬が少くないのみならず、發音の章などを新に書き改めて、飜譯當時の日本語學習の便を圖らうとした爲に、國語史料として持つ原本の價値をば減じてゐる。

コリャード編日本文典　Arte de lengua Japona. 西班牙文寫本(大英博物館藏)、Ars Grammaticae Japonicae Linguae. 羅馬一六三二(寛永九)年刊。大體に於てロドリゲスの大文典を簡略にしたものではあるが、著者ディエゴ・コリャド Diego Collado 自身の觀察も加へてゐるので參考となる。コリャドは西班牙生れでドミンゴ門派に屬してゐた爲に、宗派上の對抗意識から殊更にロドリゲスに對して異を樹てようとした所もある。西文寫本は原稿本の傳寫本かと考へられ、拉文版本と相補ふべき所が多い。

以上の外に參考し引用したものは夫々に註して置いた。國字本からの引用は出來るだけ原本に隨ひ、句讀點濁點は讀み易からしめる爲に私に施した。羅馬字綴は大抵吉利支丹の用ゐたそのまゝである。

母　音

【エ】 エは室町時代の末に單一母音のeでなく、漸强重母音のyeに發音せられてゐたもの丶やうである。羅馬字書きにした吉利支丹本では、エをすべてyeと寫してゐて、eと寫したものを見ない。ロドリゲスの大文典(五六丁表、一七六丁表、一七九丁表)に、羅馬字で五十音圖を示してゐるものにも、ア行のアイウには、A I (Y) V (Uと同音價)をあてながら、エにはYeをあて丶ゐる。小文典(七丁裏)では、五十音圖を平假名と羅馬字とを以て示してゐる。それでは、ア行とワ行とに「ゑ」、ヤ行に「𛀁」を書き、平假名は同じくないけれども、羅馬字は皆Yeとしてあるので、何れもほゞ同一の發音であつたと推測せられる。慶長三年耶蘇會版落葉集は字音引にした落葉集の部も訓引にした色葉字集の部も發音的假名遣によつて排列したものであつて、「ゑ」の部にすべてを收めてゐる。日本側の文獻では、寛永板韻鏡の卷頭に掲げた五音五位之次第がアヤワ三行の何れにもヱをあて丶ゐる。溯つては長錄元十二の日附を有する連歌懷紙の裏を用ゐた讀經口傳明鏡集(和田英松博士藏)にもさうなつてゐる(「音圖及手習詞歌考五十音圖證本」に據る)。

上古には一般にア行の衣(e)とヤ行の江(ye)とを區別して居り、中古に入つて天暦以後區別を失つたのであつて、ヤ行の江も頭音がなくなつてeとなつたのであると說かれてゐる。然し又、中古以來yeが消失したのではなくして、却て語中語尾に於てyeが勢力を得て、室町時代には語頭に於てもyeとのみ發音せられるやうになつたのではないかとも想像せられる。この點は文獻的調査を進めて一層の考究を要する。今日、東北や九州地方に、標準語でeに發音す

る場合をyə卽ち〔je〕に代へてゐるのは、古い發音を傳へてゐるものであらう。

【オ】 オも室町の末にはoでなく、ワ行のヲと同じい漸强重母音のwoであつた。吉利支丹はオをすべてvo uoと寫して、oとは寫さなかた。そのvo uoの文字はwoの發音を示してゐる。ロドリゲスの小文典に擧げてゐる五十音圖では、ア行に「を」、ワ行に「た」の假名を置いて、何れもVoと發音を註してゐる（七丁裏）。落葉集に於ては、字音假名遣や歷史的假名遣で「お」「を」に始まる語は皆「を」の門に收めてゐる。これらの事實からして、母音のoが單獨に發音せられる事はなかつたと觀てよいであらう。

近古に入つて、ア行のオとワ行のヲとの混同は、假名遣の上にも著しくなり、定家假名遣にもこの事を第一に說いてゐるのであるが、これはヲがオと同じくoと發音せられるに至つたからであるとせられてゐる。然るに、室町時代の末には却てヲの本來の發音であるwoによつて統一せられてゐるのは、果して一旦消滅した音節がある期間を經て復活したのであらうか。今後に殘された硏究問題である。

【鼻母音】 ロドリゲスは「D Dz Gの前のあらゆる母音は、常に、半分のtilあるもの、又は、鼻の中でつくられ、tilにいくらか近い sonsoneteの如く發音せられる」とて、mãda（未だ） mídŏ（御堂） mádoi（惑ひ） nãdete（撫でて） mĩdzu（先づ） ãgiuai（味ひ） águru（上ぐる） Cága（加賀） fanafáda（甚だ） fágama（刄鏇）等の例をあげてゐる（大文典一七七丁裏）。吉利支丹が羅馬字で寫した音節でD Dz Gにはじまるものは、ダ行ガ行の音及びその拗音である。それらの音の前にある母音は鼻音化したことを述べてゐるのであるが、tilとは葡萄牙語に於て鼻音化を示す符號の～を呼ぶ名であり、sonsoneteとは、反語的な言ひ方をする際の特殊な調子である。ロドリゲスはまた小文典に於ても、

半分のチルを持つてゐるかのやうな一種のソンソネテを以て、鼻に氣息を通ずるのであつて、葡語で、Fado(運命) Geada(霜) Imagino(我想像す)を發音する場合のやうに明瞭なチルをもつて發音すべきものではないと說いてゐる(一二丁裏)。大文典の例語の上に加へた符號の一ノは、他に四聲の平聲上聲の例を示して Chã(茶) Yán(椀)としてゐるので(一七三丁表)、アクセントの高低とともに鼻音化してゐることを示したのであつて、〜を施せば葡語のチルと同一視せられるからであらう。かくの如く、日本語の鼻母音はさほど著しくなかつたのであるが、南蠻人はこれを強めて明瞭なチルを置いて發音し勝ちであつた。彼等の殘した書翰その他の記錄文書に、「信長」を Nobunanga 「淀」をYondo の如くnを加へて書いたものが多く、「長崎」は殆ど常に Nangasaqi と書かれてゐた。ロドリゲスの大文典にも、南蠻人が日本語を發音する際に陷り易い誤謬として、「科」をトンガ、「我等が」をワレランガといふやうな例を擧げてゐる(一七二丁裏)。

耶蘇會士が早く歐洲に送つた手紙の中に、「山伏」を Yamanbuxi と寫した例が往々見られる。ロドリゲス大文典にも、Mairi sorofaba (參り候はゞ)といふ時のBの前の母音が往々鼻音化するが、これは一般に適用せられる規則とはなつてゐないと述べてゐる (一七八丁表)。ダ行ガ行の前では規則的に鼻音化してもバ行の前では特定の場合にしか鼻音化しなかつたものゝやうである。然るにコリャドは、その文典を始として西日辭書(自筆原稿本、ヴチカン文庫藏)・拉西日辭書(一六三二年羅馬刊)・懺悔錄(一六三二年羅馬刊)に於てDGBの前の母音には常にチルの符號を施してゐる。拉文日本文典でもNほど強い音でなく敏速に發音せられる柔かい音であると說いてゐるのみで、如何なる場合に鼻音化するかといふ事には言及してゐない(四頁)。

現在の方言では、東北方言がＤＧＢの前で鼻母音を用ゐ(小倉進平博士「仙臺方言音韻考」二六頁以下)、高知方言はＤＧの前でのみ鼻音化し、Ｂの前の母音が鼻音となる事はないと言はれてゐる(服部四郎氏「高知方言の發音について」音聲學協會々報第二十三號七頁)。九州方言に鼻母音の存在するとの報告は見ないやうであるが、九州以外の地を知らなかつた筈のコリャドが、ＤＧの前のみでなくＢの前でも規則的に鼻音化の記號を加へてゐるのを見れば、當時の九州では、今日の東北方言と同じく鼻音化が著しかつたのでもあらうか。然し又、彼は實地の觀察に基づかないで概念的にさう定めて書いてゐるのでないとも保し難い。

何れにしても、かゝる鼻母音はＤＧＢの破障音の前に現れるのであるが、ロドリゲス小文典では、ＤＧの前に於ては必ず鼻音化するが、ＪＺ即ちジャ行ザ行音の前でも時に鼻母音となると書いてゐる(一二丁裏)。土佐の東部地方ではバ行音のみならずザ行ジャ行音の前でも鼻母音が聞かれるとも言ふ。果して然らば、ロドリゲスの記述は根據ないものでもあるまい。

鼻音化の條件並に鼻母音の性質は地方によつて多少の相違もあつたであらうが、室町時代の末には廣く一般に行はれた發音なのである。たゞ備前國では全然鼻音化しないので有名であつたと、ロドリゲス大文典方言の章には記されてゐる(一七〇丁裏)。

たゞに室町末期ばかりでなく、古くから國語には鼻母音が存したのではないかと、橋本進吉教授は觀てゐられる。即ち、中古以後「行かで」などいふ場合の打消の「で」も、その前の母音に鼻音化があつたとすれば、もと、そこに打消の助動詞「な」「に」「ぬ」「ね」などに存するn音を含むものがあつたことを想定するに都合がよく、更に又、平曲の

語り方にタヾイマ(唯今)をタンダイマと發音し、フダン(不斷)をフンダンと發音することがあるのも、ダの前の母音が鼻音化してゐたとすれば、容易く說明せられると述べられた(「國語に於ける鼻母音」方言第二卷第一號四頁)。さうして、東北方言の如く、DGBの前の母音が明瞭に鼻音化するのが古い狀態を示し、高知方言の如く、鼻音化の程度も輕く範圍も狹いのは新しい狀態を傳へたものであつて、ロドリゲス等の記述によつて知られる室町末期の京都語はその中間の狀態にあつたのであらう。

子音と音節

【カ行音】 ガ行音の子音は近古を通じてgであつたらしい。これが、今日の東部方言のやうに、語中語尾に於て、鼻音の〔ŋ〕に發音されるやうになつたのは、gの前の母音が常に鼻音化してゐた影響であらう(吉利支丹教義の硏究三六頁)。

【サ行音】 吉利支丹は國語のサ・ソ・スをsa so suとça ço çuとの兩樣の綴で表してゐる。これに就いてロドリゲスが說明してゐるのによれば、日本語のサ・ソ・スは葡語西語の發音に於けるça ço çuに相當するのであつて、sa so suの如く柔い音でなく、それよりも幾分か强く發音すべきである。然し、ça ço çuを一層進めてさゝやくやうに發音すれば、別の音となるのであつたといふ(大文典五七丁表、小文典一二丁表)。これは、日本語のサ・ソ・スの子音の舌の位置が、歐洲語のsに比して、やゝ口蓋に近いことを指してゐるのであらう。從つて、今日のサ・ソ・スの發音と大體同じであつたと考へられる。

然るに、シとセとにはxi xeの文字を用ゐてゐる。一方またシャ行の音もxa xi xu xe xoと寫してゐるので、サ行のシとセはサ・ソ・スとは異なつた子音に發音せられてゐたことがわかる。そのxの發音について、ロドリゲスは次の如く

說明してゐる。xは拉丁の如くcsと發音すべきでもなく、歐洲のある地方に於けるが如く齒の間や喉で發音するのでもなく、舌を曲げるのでもなく、また西班牙人の發音とも異なつてゐて、葡語に於けるが如く、一つの子音と母音との結合した音節として明瞭に發音すべきであると述べてゐる（大文典五七丁裏小文典一一丁裏―一二丁表）。說明に明確でない所があるが、今日の葡語の發音と同じく、〔ʃ〕の音價を示してゐることが推定せられる。乃ち、シは現在の如く〔ʃi〕と發音してゐたのである。セも亦〔ʃe〕と發音したのであつて、たゞ關東方言ではseとなつてゐた（大文典一七〇丁裏）。

濁音のザ・ジ・ズ・ゾは今日の發音と違つてはゐなかつたが、ゼは清音のセに對應して〔ʒe〕と發音されてゐた。かくて、吉利支丹はザ行音をza ji zu je zoと書いてゐる。jはジャ行音にも用ゐたのであつて、希臘語の如く母音を伴つた音ではなく、葡語に於けると同じ發音であると、ロドリゲスは註してゐる（小文典一二丁表）。

現在も東北地方や出雲九州地方で、シェ・ジェをセ・ゼの代りに用ゐてゐるのは、室町時代に廣く行はれた發音が邊地に名殘を留めてゐるのであらう。

【タ行音】 タ行の清音は、古くta ti tu te toであつて、その子音はtで統一せられてゐた。チ・ツの音が今日のやうな發音になつたのは、近古の事である。チ・ツがti tuからchi tsuと變化した過程を證すべき資料は得難いが、室町時代の終にその變化の最後の段階にまで到達してゐた事は吉利支丹によつて敎へられるのである。

吉利支丹の羅馬字綴では、タ・テ・トにta te toをあて、チにchi、ツにtçu又はççuをあてた。ロドリゲス大文典（五五丁裏）に、日本語に缺けた音節として、ti di tu du se si ce ci ze zi及び葡語流に發音するva ve vi vo vuを數へてゐるので、チ・ツがti tuでなかつたことは明かである。さうして、chiはチャ・チェ・チョ・チュのcha che cho chuと共に、伊太利語のcia cii cio ciu

と同じく、葡語の Chito(下等の更紗) などのやうに發音すると、小文典(一二丁表)に說いてゐる。即ち〔tʃi〕と發音されてゐたのである。

ツを寫すのにtçu又はççuを用ゐたのは、tuとは異なつた特殊な音節であるから、特別な綴字を考案したのである。ツの發音がスといくらか關係あるので、スを寫すçuを基として、ççuとも書いたのであらう。これは耶蘇會士が早い頃に用ゐたのであつて、文祿慶長頃になるとtçuに改めたが、寫本類には後までもççuが散見する。tçuの發音に關しては、ロドリゲスが、tとçとが結合してゐるやうに發音するとも言ひ(大文典五八丁表)、無聲(ムータ)のTに始まりchuとは違つた一種の中間音であつて、伊太利語のciuに相當するとも說明してゐる(小文典一一丁裏)。乃ち、今日と同じやうな發音であつたのである。

濁音のヂ・ヅも古くはdi duであつたが、近古には、淸音に於けると同じ變化を受けた。吉利支丹はヂをgi、ヅをzzu又はdzuと書いた。giは伊太利語の綴を借りたのであつて、伊太利語でGiaponを發音するのと同じであり(大文典五七丁裏一七八丁表)、chiの濁音であるといふから(小文典一一丁裏)、現在の九州や土佐の方言にきかれる〔dʒi〕の發音と殆ど變りなかつたのであらう。

ヅにzzuをあてたのは、淸音のツにççuをあてたので、その濁音として、çをzに變へたまでゞある。ロドリゲスは、ツの音を寫すのにはtçuが適してゐるから、その濁音のヅはdzuと書くべきであるとて、彼自身はdzuを用ゐた。葡語等の綴字法から言つても、語頭に同じ子音を二つ重ねることはないからである(大文典五八丁表)。その音は、今日の九州や土佐の方言に存する〔dzu〕であつたに違ひない。

かくの如く、ヂ・ヅはdi duではなかつたが、今日の標準語の發音のやうに、ジ・ズと同じでもなかつた。一般にはジ・ズ・ヂ・ヅの發音を混同しなかつたのである。たゞ京都の地では、この區別を失ひかけてゐたのであつて、ヂ・ヅをジ・ズと發音するばかりでなく、逆にジ・ズの代りにヂ・ヅと發音することもあつた(大文典一七九丁裏)。京都に於てこの混亂を來したのは可成り早いやうである。北邊隨筆巻之三假名遣の條に引用した東野州常緣の消息には、拾遺集後撰集を書寫して「證本を寫し留校合度々の時にをおすつのかなまで本のことく直し秘藏仕候」とある。その「すつのかな」とは「ず」「づ」の假名の事であつて、常緣の頃には旣に紛れ易くなつてゐた事が知られる。應仁前後から混同する傾向が相當に強くあらはれたのであらう(「國語史上の一劃期」一四頁)。

室町時代の末に、京都では區別を立て難い迄になつてゐたとは言へ、他の地方では明瞭に發音し別けてゐたので、標準語としては混同することを認めなかつたやうである。耶蘇會士の手になるものは、辭書類は勿論、その他日本語で書かれた洋字國字の諸刊本では、正しく書き別けてゐる。謠曲の謠ひ方でもこの別を嚴重に守つたのであつて、元祿十四(一七〇一)年版謠開合假名遣や享保十二(一七二七)年版音曲玉淵集に、この點について說明を加へてゐるのは、元祿頃になると、全く識別せられなくなつたからである。

【ハ行音】 ハ行の子音が、古くPであつたのがFとなり更にHと變化したことは、國語音韻史上最も顯著な事實である。近古は大體F音の時代であつて、終頃にはH音もあらはれかけてゐたのである。

近古の初にF音であつた事を知るに足る資料には、治承五(一一八一)年に寂した東禪院心蓮の口傳を記した悉曇口傳(醍醐三寶院藏)がある。その中にハの音を說いて、唇の内分を上下合してアと呼んで終に之を開くとハの音となる

と言つてゐるが、マ行音は唇の外分を上下合せるやうに說いてゐるので、m音の場合よりも唇の內方を合せるといふハは、兩唇摩擦音のFに發音すべきことを說明してゐるのであると、橋本教授は解せられたのである(「波行子音の變遷について」岡倉先生記念論文集二〇一頁)。

永正十三(一五一六)年に成つた後奈良院御撰何曾の中に、

母には二たびあひたれども父には一度もあはず　くちびる

といふのがある。新村博士はこれを解して、ハハを發音するのには唇が二度會ふけれども、チチの發音には唇が一度も關係しないといふ意であるとて、ハ行音のF音であつた證左とせられた(「波行輕唇音沿革考」東亞語源誌三〇七頁)。萬曆十七(一五八九)年に倭寇を防いで功を建てた明の侯繼高の全浙兵制には日本風土記が附してある。さうして日本語を漢字で寫してゐるが、その漢字を見るに、同一語をf音の文字でも寫し、h音の文字でも寫してゐる。また元末明初の陶宗儀が著した書史會要に伊呂波歌をあげて、ハ行音を寫すのに、pfhの音を持つた字を併用してゐるのも、日本のハ行音が支那のpfh何れの音とも全く一致するものではないが、また何れとも似た性質を有してゐたからであらう。さうして又fからhに變化せんとしてゐた事を推知せしめるであらう。コリャドの文典(阪本四頁)には、

fの字は日本のある國々では、拉丁に於けるfの如くに發音されるが、他の國々ではhの如くに發音される。然し、そのhは完全なものでなく、fとhとの中間のもので、口と唇とを合せて閉ぢるが、しかしそれも十分にはしない。

と述べてゐるので、近世初頭にはFよりHへ移らんとする中間音が、ある地方にあらはれてゐた事がわかる。然し、かゝる音はまだ標準的な發音とは認められてゐなかつた。コリャドもハ行音を寫すのにfのみを用ゐ、hの文字は全

然使つてゐない。たゞ、感動詞には Ha, Hat などと、コリャドのみならず、耶蘇會士も書いてゐる。

ロドリゲスは發音に關して精密な觀察をなしてゐるのに、F音については、何等說く所がない。小文典(一〇丁裏)に、日本語には Ve Vi Vu と綴られる音節の發音が缺けてゐて、その代りに Be Bi Bu を持つてゐると述べてゐるので、バ行の子音は明かに齒唇音のVでなかつたのである。而してハ行の子音を寫すのに用ゐたfは、拉丁を始め歐洲語に於ては、Vに對する無聲音であつて、齒唇音に屬する。然るに、ロドリゲスがV音の有無について述べながらf音の事を注意しなかつたのは何故であるか。コリャドも、前述の如く、日本語のfは拉丁の發音と似てゐると言つてゐる。或は、歐洲語に於けるfを用ゐて寫し、又それを歐洲語風に發音しても、餘り奇異な感を懷かしめない程に、當時の日本語のハ行の子音は齒唇音のfと紛らはしい發音であつたのでもあらうか。

中古以來、語中語尾のハ行音は他の音に變化するのが普通であつたから、Fa Fi Fu Fe Fo と發音したのは、殆ど語頭にある場合に限ると言つてよい。ハは語頭以外でもFaと發音することがあつた。例へば「母」をFaFa といふのなどがそれであるが、室町時代には寧ろハワといふ方が多かつたやうである。ロドリゲスの大文典には「候はゞ」を Sorouaba, Sorofaba 「候はんにも」を Sorofannimo と書いてゐる(五三丁裏)。多くの場合に、語頭以外にあるハはワと發音され、ヒはイ、フはウ、ヘはye、ホはwoとなつたのである。

P音は、appare(天晴) ippa(言つぱ) yoppijte(能引いて) yoppitoi(夜一夜) などの促音か、pappato, poppoto, fipputto, pinpin, ponpon など擬聲語擬態語かにあらはれる。その外、パン(葡pão) パアテル(拉pater父) ペルサウナ(拉persona身位) など、外來語の中に用ゐられた。P音を寫す半濁音符は吉利支丹の工夫した所であつて、文祿頃

の耶蘇會刊行書から用例を見ることが出來る。

【ヤ行音】 ロドリゲスはヤ行音の ya ye yo yu の發音を說いて、葡語の Desmayo(氣絕) Atalaya(見張)また西語の Ayuda(援助)などに於けるが如くに、イプシロン(Y)を以て發音するのが正しいと述べてゐる(小文典一二丁表)。今日と同じく漸强重母音であつたのであらうが、子音的な響きが相當に加はつてゐたかも知れない。

ロドリゲスは、大文典に於て、五十音圖のア・ヤ・ワ三行のイ・ヰを寫すのに、何れも Y を以てした所もある(一七九丁表)が、またア・ワ二行にI、ヤ行にYをあて(五六丁表一七六丁表)、いろは歌を掲げては、いろの「い」をI、うゐの「ゐ」をYと寫してゐる(五五丁裏)。小文典では、ア・ワ二行に「い」の假名を用ゐ、ヤ行に「ゐ」を用ゐて、その發音は三行共にYで示してゐる(七丁裏)。ヤ行に殊更「ゐ」Yをあてようとしてゐるのである。

吉利支丹は、イの母音を寫すのにYI(i j)を書いてゐるが、iとjとの間には區別なく、iが二つ續く時にijと書くのである。それらとYとの間には大體の區別を設けてゐたのである。ロドリゲスの說明によれば、yxei(威勢) ycon(遺恨) guioy(御意) buy(武威) meiy(名醫) cǒy(高位) yru(居る)などの如く、他の文字の前にあつても後にあつても、特別の意味を持つて居り、一語をなしてゐるものにはYを用ゐる。又 uguysu(鶯) taguy(類) vǒguy(大食ひ)などの如く、語中にあつても語末にあつても、主として gu の音の次に來て、それだけで音節を構成する場合に、Yを書くのである(大文典五七丁裏)。後の場合は、gu 以外の音の次にあつて、例へば、ruy(類) xinruy(親類) canruy(感淚)などに於ても用ゐるが、何れも單獨に發音する場合である。これに對して、amai(甘い) xighei(繁い) vomoi(重い) ataraxij(新しい) furui(古い)など二重母音をなす場合には、i j を以て書くのである。さうして、mochij

（用ゐ）xij（强ひ）foxij（欲しい）などの·iは、biacuren（白蓮）gia（ぢや）fionna（ひよんな）daimiǒ（大名）miù（見う）などに於ける·iと同じ發音であると說いてゐる（小文典一〇丁表—裏）。

かゝる說明の如くであれば、Yは單獨に發音される母音のイであり、i·jは二重母音をなすものであつて、ijと書かれてゐる場合こそは、ヤ行音のイである筈である。然るに、大文典の五十音圖では、ア行ワ行にIをあてる事はあつても、ヤ行にIをあてることはなく、ヤ行のイは常にYを以てあらはしてゐるのである。小文典に於てはア・ヤ・ワ三行すべてYに改めたのは、個々獨立した母音としては何れも同じと觀たからであらうか。それにしても、單獨に明瞭に發音されるイが、本來ヤ行音に屬すべきものとして、他のヤ行音と同列に置かれるべき程に、單純母音ではなくなつてゐたか否かは疑ふ餘地があらう。

なほ、日葡辭書では、特にYを用ゐることをしないで、語頭に於てはIcon, Ixei, I,iru, itaとし、語中語尾に於ては、Bu-i, mei-i, V-icamuri（初冠）の如くするか、Tagvi, Vôgvi（大喰ひ）のやうに、viと書いて別々に發音すべきことを示してゐる。尤も、Ranguy（亂杙）の如き例外もないではない。

【ラ行音】 ラ行の子音は、今日一般に行はれてゐる發音と變りなかつたやうである。ロドリゲスの說く所によれば、日本語のはL音ではなくR音であるが、葡語でRoma, honra（名譽）を發音する時のやうな、Rを二つ重ねた强い音ではなく、葡語でもCeruleo（紺色の）farinha（粉）に於けるやうに、Rを一つ發音する輕いものであつたといふ。さうして、xinrǒ（辛勞）guanrai（元來）renren（戀々）の如く、RがNの後につゞく時、又はbotracu（沒落）などの如く、Tの後にある時には、口蓋に觸れて輕く發音したのであつた（大文典五五丁裏、五七丁裏、一七八丁表）。卽ち、卷

舌のRでもなく、舌を口蓋に強くあてて發音するのでもなかつた事がわかる。

【ワ行音】 吉利支丹は、ワをVa、ヲをVoと書いた。小文字ではｖｕ通用してゐたからva ua vo uoと兩樣に書かれてゐる。その發音に關するロドリゲスの說明に曰く、

Va Voの音節に於て、Vの文字は正しくは子音でない。從つて、我々のVaのやうに、唇を強く打つて發音してはならない。さうでなくて、子音と母音とのほゞ中間にあたる所の別の方法を以て、Vにいくらか觸れながら、A又はOに落着くやうに發音すべきである。(大文典五七丁裏)。

說明の不充分な所もあるけれども、漸强重母音に發音すべき事を言つたものと解せられる。然らば、今日の發音とほぼ同じであつたのである。

拗音

【カ行唇的拗音】 カ行唇的拗音のクヮ・クヰ・クヱは漢字音によつて輸入せられ、漢籍佛典を讀む上には長く保存したのであるが、國語化した言葉に於ては、中古以來直音に發音する傾向があつた。「顧」「國」の發音は元來クヮ・クヮクであるけれども、日本では初からコ・コクと直音にしか發音しなかつた。クヮは近古にも標準音として行はれ、クヰ・クヱは近古に消滅してキ・ケとなつた。

「蹶」の字音クヱツに發してゐると言はれるクヱルの語は、早く神代紀に見えてゐるが、降つて類聚名義抄にも「蹴」に化ル、「蹢」にクヱルと訓じ、伊呂波字類抄また「蹴」にクヱルと訓じてゐる。かゝる辭書に記されてゐるだけでは、未だ院政鎌倉時代に、この發音が行はれてゐたことを證するに足らないのであるけれども、後白河法皇御撰に係る梁塵秘抄卷二に收錄せられた童謠の中に「くゑさせてん」と出てゐるので、普通の言葉の中にあつても、クヱルと發音し

たのではないかとも考へられる。尤も、その發音が果して唇的拗音であつたか否かに就いては疑ひがないでもない。一方、この語は直音化して、ケルとなり、中古の落窪物語以來その用例に乏しくない。近古からはこのケルが一般に行はれるに至つたのである。

漢籍佛典に加へられた訓點や、漢籍佛典を訓讀するための辭書類には、近古にもなほクヰ・クヱと記したものを見るのであつて、佛典を讀誦するには後まで元の發音を保存したやうであるが、漢籍を訓讀するのに、どの程度まで正しく發音してゐたかといふ點になると明瞭でない。室町時代の日常の口語には行はれなくなつてゐたと觀て差支ないであらう。伊呂波字類抄では、クヰ・クヱの音に從つて、クの部に擧げてある語も、室町時代に出來た節用集になると、キ・ケの部に見出され、發音もキ・ケとなつてゐる。發音主義をとつてゐる耶蘇會版落葉集も節用集と同じである。倭玉篇の如き漢字をよむ爲の辭書に於ても、クヱ・クヰとよませた例を見る事が出來ない。漢籍の訓讀にも日本化した直音を用ゐるやうになつたのであらう。

クヮ・グヮは最も長く殘つた發音であつて、今日でも九州・四國・東北の諸地方や出雲には聞かれるのであるが、近古には、更に廣く一般に行はれてゐた。然し文明年間に桃源瑞仙が草した三體詩抄には、その頃、京都の下層社會の者がクヮをカとしてゐた事を述べてゐる。即ち曰く、

カハ直音、クワ、キヤハ拗音ナリ。直音ト云ハスグナゾ。拗音ト云ハソバヘユガウダヤウナゾ。サルホドニ下劣ノモノガ觀(カン)音ト云タリ、正月(ガチ)二月(ガチ)ト云ハ却テ直音ニカナウテヨイゾ。

かくの如く、一部には直音化することもあり、その方をよいとする者もないではなかつたが、標準的な發音はやはり

クヮ・グヮであつた。故に、辭書類にはこれを誤つてゐない。

吉利支丹はカ・ガを Ca Ga と寫し、クヮ・グヮを Qua, Gua と寫し分けた。

【ジャ行音とヂャ行音】 ジャ行音とヂャ行音との區別は、この時代まで存してゐた。吉利支丹の羅馬字綴では次の如く書き分けた。

ジャ行　Ja　Ju　Je　Jo

ヂャ行　Gia　Giu　—　Gio

指定助動詞の「ぢゃ」は、室町時代に發生したのであるが、この語の發音は一種特別なものであつたやうである。これは、「である」が「であ」となり、更に音變化を起したものであつて、一部には Gia とも發音したが、正しくは Dea でも Gia でもなく、語頭の音はGよりも寧ろDに始まり、口中で作られるある力を伴つて發音され、明瞭ではあるが然し一種の中間音であると、ロドリゲスの大文典（一五三丁裏一七八丁表）には說いてゐる。近世に及んで、一九の木曾街道續膝栗毛に美濃方言として用ゐ、谷川士淸の倭訓栞大綱に尾張の方言として錄せる「でや」は、室町時代のかゝる發音をある程度まで傳へたものであらう。

長音

【ア段イ段エ段】 ア段イ段エ段の長音は、この時代の普通の言葉の中にはあらはれなかつた。感動詞のハアを、羅馬字書きにしたものでは、hà と寫してゐるので、この場合にはハーと長めに發音してゐたのである。近畿地方では、今と同じく單音節語をすべて延ばして發音する傾向はあつたが、本より標準的な發音ではなかつた。今日、中國地方の方言で、助動詞の「まい」をマーと言ふのも、既に室町時代の末からあつたのである。ロドリゲスは中國方言の特徵の中に數へて、次の如く說いてゐる。

中國の者は、發音する際ひろがりを過度にする。即ち、口を過大に開いて、一種の高い響を與へる。例へば、narumai の代りに narumā といふ。

豐後にもかゝる發音は行はれてゐたのである(大文典一六九丁裏)

ii ei は二重母音に發音すると、ロドリゲスの說いてゐることは、前に述べた通りであつて、吉利支丹の羅馬字綴でも、すべて ij ei などゝ二字で表してゐるのであるから、まだイー・エーと長音に發音してはゐなかつたのであらう。

南蠻系の外來語の中には a e i の長音も含まれてゐたのであつて、それを假名で寫したものを見ると、

ハァテレ(葡Padre父)　パァテル(拉Pater父)　ミィサ(拉Missa法會)　ヒィリヨ(葡Filho男の子)

といふ例が、耶蘇會の初期刊行物の斷簡中に出てゐる。謠物等で音を延ばす場合を示す記法を應用したのであつて、夫々アー・イーと發音したのであらう。平假名で書いた例は、寫本刊本中に多く見出されるが、それには

ばあぱ(拉Papa　法王)　ちりんだあで(葡Trindade三位一體)

ひいです(拉Fides　信仰)　ばうちいすも(葡Bautismo洗禮)

の如く、片假名書きとは違つて、「あ」「い」の假名を小書してゐない。eの長音では、葡語の Propheta(豫言者)を、文祿初年の刊行と推定せられる「どちりいなきりしたん」及び一六〇〇(慶長五)年改訂版の同書に、「ぽろへゑた」「ぽろへえた」と書いた例が見られる。この語も、一五九九(慶長四)年刊行の「ぎやどぺかどる」では、多く「ぽろへた」とし、一ケ所だけ「ぽろへいた」と書いてゐる。この書き方のやうに、eの長音も、「い」の假名で示したのが普通である。例へば、次の如くである。

これいぢよ(葡Collegio學林)　　　　くはれいずま(葡Quaresma四旬齋)

一方には、かゝる長音を示す假名を全然附してない例も多く、「ぱあてれ」も伴天連の字をあてゝバテレンと言ふやうになつた如く、日本語化したものほど、本來の長音も短音に發音せられたやうである。それも畢竟 a e i の長音が日本語の中に存しなかつたからである。

【オ段】 オ段の長音には、開合の二種があり、室町時代にはこれを「開」「合」又は「ひろがり」「すばり」と言つてゐた。吉利支丹はその開音をǒ、合音をô と寫した。

ǒ ô の發音法については、ロドリゲスが大文典(一七五丁裏)にも説いてゐるが、こゝには小文典の説明を引かう。二重母音(ディトンゴ)のǒ ô û に終る音節は葡語に於けると同様に發音する。即ち、長音(ロンゴ)のǒ(大文典に「ひろがる」ǒといふ)は二つの oo を以て發音すると同じである。例へば、Minha avǒ(我が祖母) Capa de dǒ(朝服) Enxǒ(手斧) Pǒ(座)のやうに、口と唇とを開いて發音する。變長音(シルクンフレツクソ)のô(大文典に「すばる」ô といふ)は二つの母音 o u を以て發音すると同じである。即ち、葡語の Meu avô(我が祖父) Bôca(口) Môcho(木兎) Côrpo(身體)に於けるが如く、口を少しく閉ぢ、それと共に唇を圓めて發音する。(一二丁表)

これによつて大體の區別は知られる。開音のǒは〔ɔ:〕にあたり、合音のô は〔o:〕にあたる。

ǒは、ア段の音節がウの母音につゞく時、例へば、字音末尾のウ音、用言語尾のウ音便形、助動詞の「う」、又、字音末尾のフ、動詞語尾の「ふ」、その他ウと發音せられる語中語尾のフに接續した場合にあらはれる au の音が變化して出來たものである。即ち、au が ao となり、次に ao が融合して、a と o との中間音である開音の〔ɔ:〕となつたのである。

カウカウ(孝行)がcŏcŏ　チヤウ(町)がchŏ　マウス(申す)がmŏsu　カフ(買ふ)がcŏ　アカウ(赤う)がacŏ　アラウ(有らう)が arŏ となつた類である。

アウ(央)アフ(逢ふ)は、ワウ(王)などゝ同じく、吉利支丹本にはvŏと書いてゐる。落葉集でも押奥(アフアウ)には「わう」と發音を註してゐる。單獨に發音せられるオの音はすべてwoであつたからである。

クヮの拗短音は存しなかつたが、クワウから出た長音は、唇的拗音であつた。例へば・クワウミヤウ(光明)、クワウクワウ(廣々)を、吉利支丹は quŏmiŏ, quŏquŏ と寫してゐる。

マ行バ行四段活用動詞の連用形が撥音便となる事は中古からあり、近古に廣く行はれたのであるが、室町時代には更に所謂ウ音便をとつた。ウ音便とは言ふものゝ、n音がその前にある母音と融合して長音に發音せられたのである。その長音は三種に分れてゐて、その中anの融合したものはŏとなつた。助動詞の「む」はmu m nと變化して、次にuとなり、長音となつた。それと同じく、マ行バ行の動詞の場合には、mi bu がm n uの過程を經て、長音化したのであらう。例へば、yerŏda(選うだ) vogŏda (拜うだ) yŏda(止うだ、病うだ)。

合音のôは、オ段又はエ段の音節にu又はoの音がつゞき、或は又撥音がe又はoの音に續いて出來たのである。ooの過程を經たものは、主として、正しい假名遣で「おほ」と書かれるものに見られる。吉利支丹本によれば、「大方」「狼」「公」「仰す」などの「おほ」はvôと書いてある。しかし、この種の長音化は必ずしも規則的に行はれたのではなく、「多さ」「覆ふ」は vouosa, vouô と寫されて居り、その他「焔」「氷」「通り」「遠い」も長音とはならず、數の十も touo となつてゐる。

ouからǒとなつたのは、中間にooの階段を通つてゐるが、前者に比して優勢である。室町時代の末期には、例外を許さない一般的法則となつてゐた。

奉公(ほうこう) fǒcǒ　相應(さうおう) sǒuǒ　等(とう) tǒ　內證(ないしよう) naixǒ　廣う firǒ　良う yǒ　來う cǒ　思ふ vom、數ふ caz、

eoのǒと變化した經路に就いては、「吉利支丹教義の研究」(四七頁以下)に委しい說明がしてある。それによれば、eo ĕō ĭō yō のやうな順序を經たのであつて、室町時代の末には、大體に於て、その最後の段階にまで進んでゐたのである。例へば、「えう」「せう」「でう」「ねう」の如く、正しい假名遣でヱ段の假名を用ゐるものを、文祿元年版羅馬字本吉利支丹教義では、canyǒ(肝要) xǒxǒ(少々) giǒgiǒ(條々) bunhǒ(豐僥)など書いてゐて、「よう」「しよう」「ちよう」「にょう」など、オ段の假名を含んだ拗音と少しも區別してゐないので、共に最後の段階の〔oː〕に達してゐた事がわかるのである。然るに、「けう」「げふ」のやうなカ行音に限つて、qeǒqe(敎化) qeǒacu(凶惡) qeǒman(驕慢) sagueǒ(作業)と、もとのエ音を存してゐる、又一方には、「交會(ケウクワイ)」を qiǒquai と書いた例があり(原本の qiǒ は qiǒ の誤)、「業」を guiǒ と書いたものも他本に見られるのであるから、カ行音だけは、當時まだ大體にĕōの段階に留まつてゐたらしいのであるが、それにしても、ある場合には、ĭō乃至yōの段階まで進んでゐたものと考へられると、橋本敎授は推定せられた。

ロドリゲスは　chǒ, giǒ の發音に於ては、Cにいくらか觸れてTDを以て發音すべきであるとて、chǒ(蝶) giǒ(條) chǒzu(手水) chǒfǒ (重寶)は teǒ, deǒ, teǒzu, theǒfǒ, teǒfǒ といふのが日本語の正しい發音であると說明してゐる(大文典一七八丁表)。然らば、タ行音も標準的發音に於てはĕōの段階にあつたのであらう。

大文典に、下二段活用サ行變格活用動詞の未來の言ひ方を說き、aguеô(擧げう)の語を以て例示し、他の語の構成に就いては、連用形のteに終るものはteô又はchôに變へ、yeはyô、giはgiô、je jiはjô、xe xiはxôに變へると述べてゐる(七丁裏)。然るに、小文典に例語を集めて表示してゐるのには、curabeô(比べう) feô(經う) agheô(擧げう) todokeô(屆けう) motomeô(求めう) faneô(撥ねう) fanareô(離れう) atayeô(與へう) deô(出う) tateô(立てう) majeô(交ぜう) saxeô(さセう) mairaxeô(參らせう)と書いて、悉くeの字を加へてゐる(一九丁裏―二〇丁表)。その表の前に、日本語動詞の活用を理解するには、五音(ごいん)(五十音圖)と假名遣とを知らねばならぬと力說してゐるので、こゝにeを書いたのは、標準的發音によつたのであるにしても、假名遣に索かれた所があるのではないかと考へられる。

日葡辭書の卷頭に置かれた例言中にオ段拗長音に關する一ヶ條がある。それに曰く、

Fiŏrŏ(兵糧) Meŏji(名字)などのやうに、長い音調(アセント)を持つた語に於ては、初の音節を、時にはE、時にはIで書く。Fiŏ(表) Qiŏ(經)などのやうに短い音調を持つた語に於ても同樣である。これは何故かといふに、假名では、一方をFeu(へう)と書くからである。それだからと言つて、發音するのにIよりもEがすぐれてゐるといふ事はあり得ない。寧ろ、Eで書くことが出來るといふよりも、上衆(かみしゆう)が長い音調を持つた語をFiŏrŏ(兵糧) Fiŏgacu(兵學)などと發音するので、その發音法に從つたがよい。Fiŏ, Qiŏなどの如き、短い音調を有する語も亦Qeŏよりは Qiŏと言つて、Iに發音した方が勝つてゐる。然しながら、こゝには假名書きの方法に隨つて、Eで書くことも採用してゐるので、これらの語をば、差別なくEでもIでも書くことにする。

この說明によれば、上衆即ち上方の者は、オ段拗長音を、開音も合音もIの音を重く發音してゐたのである。從つて

iǒ iô と書けば、その發音には最も近かつた筈である。然るに日葡辭書には、iǒ eǒ eô iô を混用し、或は一語を兩樣に書き、或は一方の書き方のみを用ゐてゐる。これは、必ずしもその語の發音に基づいたのでもなく、假名の記法をも參照したからであると斷つてゐるけれども、開音がヱ段の假名を含む事は全然ないので、開音に eǒ と書いたのは記法の混亂を物語るものであらう。

マ行バ行四段活用動詞連用形の撥音便が、語幹のオ段エ段の音節につゞいてゐるものは、室町時代に合音の ô となつた。n 音が母音 o と近似の性質を持つてゐるので、oo eo と同樣な變化をしたものと思はれる。オ段に續くものは、yôda(讀うだ・呼うだ) tôda(飛うだ) yorocôda(喜うだ) のやうに直音となり、エ段に續くものは saqeôda (叫うだ) soneôda(嫉うだ)のやうに拗音となつた。テミズ(手水)がテウズとなつたのは中古のことであつて、近古には teôzu となつたのである。

以上述べたやうなオ段長音に於ける開合の別は、近古時代の終まで確實に守られてゐた。假名遣の上でも、それを混同することは殆どない。たゞ「う」と「ふ」との假名を誤るのは、中古以來の事であるから、言ふ迄もない。またオ段拗長音の合音は、オ段の音節から生じたものも、エ段の音節から生じたものも、その發音が略同じであつたので、その間では假名遣が亂れてゐる。落葉集は發音を基礎として排列したものであつて、長音の假名は「う」を以て統一し、「當(タウ)」「到(タウ)」「答(タフ)」「踏(タフ)」は「たう」、「東」「冬」は「とう」と書いて區別し、拗音は、「長」「頂」の「ちやう」に對して、「重(ちよう)」「朝(てう)」「鳥(てう)」何れも「てう」と書いて、開合を別つてゐる。小林好日氏の調査によれば、應永三十四(一四二七)年兩所十聽衆評定事書案(高野山文書)にも「訴訟(ソショウ)」を「そせう」と書いた例がある。これを以て觀れば、その頃には既に「しよう」と

「せう」とが同音又は甚だ近い音に發音せられることもあつたかと想はれる。また應永三十二年輌淵彦太郎玄狀案(高野山文書)には、合音の「條(デウ)」を「ちやう」と開音の假名遣を以て書いた例が見られる(「室町時代言語研究覺書」國文學踏査第二輯一〇頁)。開合を偶〻誤ることは可なり早くからあつたのかも知れない。然し、一般にこの別を失つたのは近世に入つてからの事である。即ち、元祿前後には、開音の〔ɔ:〕も〔o:〕になつてしまつたのである。

ロドリゲスは、同一語も意味の相違するのに從つて開合を異にすることがあると述べてゐる。例へば、「法」は佛教の教法又は宗派に關する意味の時には、meǒfôrenguequiǒ（妙法蓮華經） vǒbô(王法) xinbô(心法) buppô(佛法) xofô(諸法) Iofô(如法)のやうに、常に合音をとり、規則命令法則を意味する時には、reˈfô(例法) fǒxiqui (法式)のやうに開音をとる。「理を破る法はあれども法を破る理はなし」といふ時の「法」もfôである。また「方」は、方向を意味する時には、tôbǒ（東方） saifǒ(西方) xifǒfappǒ(四方八方)の如く開音であつて、yofô(四方)の如く平方を意味し、yacufô(藥方)の如く調劑を意味する時には合音であつたといふ(大文典一七八丁裏)。これは略事實にかなつた說明のやうである。饅頭屋本易林本その他の節用集を見ても、「法度」「法例」「法式」「方角」等は波の部に收め、「法師」「法語」「法流」「方藥」等は保の部に收めてある。日葡辭書に錄されてゐるのにもこの區別が認められる。然し又、一語一語について見れば、何れとも決し難いものもあつたやうである。

【ウ段】 ウ段の長音も近古にあつた。吉利支丹はこれをûと寫し、ロドリゲスも初はその書き方をしてゐるけれども、小文典を著した時にはûと書いた。大文典(一七五丁裏)に於ても、ûは唇を圓め口を閉ぢる點で、「すばる」ôに甚だよく似てゐて、九州などではôをûに發音し、これを「すばり過ぐる」と言ふのであつて、本來ûはôに屬すると

觀るべきものであると述べてゐるので、かゝる觀方からして、uの長音も亦合音の記號を加へることにしたのであらう。日本人は、これを「ひく」とか「長むる」とか言つて、ôとは區別してゐたのである。その發音法について、ロドリゲスは、二つのuが書いてあるやうに引延して發音すると言つてゐる(大文典一七五丁裏、小文典一二丁表)。

ウ段の長音は、「ツウ」(通)「ヌルウ」(縫う)「クウ」(食ふ)など、ウ段の音節にウの音が續いたものに生じた。マ行バ行の四段活用動詞の撥音便が語幹のウの音節に續いたものにもあらはれたが、室町時代の末にも撥音便をとる方が普通であつて、日葡辭書は撥音便の語形を擧げてゐる。「組む」などは cunda とのみしか言はなかつたけれども、「結ぶ」は musunda とも musûda とも言ひ、「進む」は susunda とも susûda とも言つたやうに、ある語は兩樣の言ひ方をしたのである(小文典二三丁裏)。

その外に、「イウ」(有)「リウ」(流)「アキウド」(商人)「ウツクシウ」(美しう)などに於けるiuの融合によつてウ段の拗長音を生じた。また、マ行バ行四段活用動詞の撥音便が語幹のイ段の音節につゞく時にも、najûda(馴染うだ) nijûda(滲うだ) xûda(染うだ)となつたが、ウ段の音節につゞく場合の不規則なのとは異なつて、この長音は規則的に行はれてゐた。

「キウ」「シウ」「リウ」などを、謡曲に於ては、拗長音にしないで、kiu, shiu, riu とi音を正しく發音するのが常であるから、室町時代の末には拗長音になつてゐたにしても、i音を今日よりも重く發音してゐたのではないかと橋本教授は推定せられた(吉利支丹教義の研究五三頁)。

入聲音

漢字音の四聲は、我が國に傳へられて、漢籍佛典を讀誦する際に正しく守られたのであるが、日本語になつて日常用ゐられたものに於ては、P音K音であるものは、日本語の音節構成法に從ひ、母音を伴つて開音節となり、入聲の性質を失つた。卽ち、K音はキ・クとなり、P音はフとなつたのである。然るに、T音は近古にも尙支那に於けると同樣に入聲に發音して、tu tsu の音とはならなかつた。

吉利支丹は、その入聲音をTを以て寫した。例へば、betmot(別物) fitjet(筆舌) fotnet(發熱) jitguet(日月)。このT音がchiの發音に變ずるのは中古以來の事であつて、近古末にも同一語で兩樣の讀方をしたものがある。日葡辭書の中から例を拾ふと、Bet, Bechi(別) Betdan, Bechidan(別段) Xǒguat, Xǒguachi(正月) Itdǒ, Ichidǒ(一道)等がある。假名で書く時には、chiにチを用ゐ、Tにツを用ゐた。Tを寫す特別の文字がなかつたからである(大文典五八丁表)。故に、バツと書いても bat とよむのであつて、かゝるツを「詰字(つめじ)」と呼んだのである(小文典九丁表)。

世阿彌應永三十四(一四二七)年の自筆と推定せられる「松浦の能」(觀世左近氏藏)に、「ジセッモハヤクヒコロヘテ」と「時節」の末音ツを小書して、これに半圓の符號を加へてある。謠曲の方では、かゝる場合の入聲音を「呑む」又は「含む」といふのであつて、音曲玉淵集卷一「つめ字よりうつりやうの事」の條に、ガ行ザ行ダ行バ行の濁音、ナ行マ行の鼻音が次に來る時には「上のツメ字を呑ム」と註してゐる。例へば、「雪月(セツゲツ)」「骨髓(コツズイ)」「越度(ヲツド)」「血判(ケツパン)」「出入(シユツニフ)」「發明(ハツメイ)」等に於ける中のツ字を指してゐるが、謠開合假名遣では「鼻へ入る」と言つてゐる。この發音は現在の謠ひ方にも傳へられてゐる。その音に就いて今日の學者の觀る所は必ずしも一致しない。石黑魯平氏は、先づ舌尖と齒莖の上との閉鎖をして、その閉鎖を破らないで、〔u〕を出さうと企てゝ息を鼻に通すのであるとて、〔tū〕の音字をあてられた(「謠曲(觀世梅

若流）の發音法に就いて」音聲の研究第Ⅰ輯二四頁）。佐伯功介氏は、舌を上に着けて密閉を作り、唇も同時に輕く閉ぢ、咽頭に於て鼻腔への密閉破裂を起すものであつて、その際のどびこと舌の後部とによつても口腔の方への密閉が作られ、のどびこの密閉がこの發音の本質に關係し、舌先の密閉は色附け的な變化に過ぎないとて、〔k̃〕又は〔kn〕の音字を以て示された（「謠の發音（寶生流）について（補ひ）」音聲の研究第Ⅱ輯四〇頁）。橋本進吉教授も、軟口蓋と咽頭との閉鎖によつて發せられる鼻的破裂音であると觀られた（吉利支丹教義の研究五七頁）。何れにしても、入聲のT音が次に來る有聲音又は鼻音との關係から變化した特殊な發音であつて、謠曲のみに止まらず、室町時代には普通の談話に於ても用ゐたのではないかと考へられる。

これは主として有聲音及び鼻音の前にある時に起る音變化であるが、また「藤橘四家」の如き無聲音の前でも、「菩薩」の如き語末でも、稀に起るといふことを石黑氏は指摘せられた。音曲玉淵集には、「訓のつ文字は專直に唱ふ又ツムルは有呑て移るはたま〳〵有也」とて、字音の入聲音以外にも呑んで謠ふ場合があるとて、「山賤」「初月」「千滿殿」「木津川」「おそれつへうそ」を例示してゐる（巻一、廿一丁裏）。

促　音

促音は既に中古に現れてゐる。物語類の用語の上には餘り見られないが、漢文を訓讀したものゝ中に、その例がある。石山寺藏「金剛般若集驗記」の加點の時は明確に知り得ないけれども、天長・承和（八二四―八四七）頃のものと觀られ、その中に「發」を「タテ」、「有」を「タモテ」と訓じてゐるのを、大矢透博士は促音便の例に擧げられた（假名遣及假名字體沿革史料第四面）。かくの如く、今日促音に發音する場合の假名を全然表記してゐない例は、その後の資料にも續いて見える。延慶本平家物語に於ても、「キツト」「サツト」「トツト」「ヒフツト」

など、擬聲擬態の語にはツ字を用ゐてゐるのに、所謂促音便の場合には、本來の音は勿論、促音であることを示す記號を加へた例は、全くないのである。ここに於て、山田博士は平曲の發音に徴して、「前の音を稍長く呼びて次の音にうつり行き、中間の音は實は微にして殆ど省かれたる如きすがたになりたりしものにあらざるか」との解釋を加へられた(平家物語の語法、下一七六六頁)。

延慶本平家物語で、促音便を全然表記しないもの丶大部分はラ行四段活用及びラ行變格活用であつて、タ行四段活用の例は僅に「モテ」の一語に過ぎない。「もて」のみは中古の物語類にも用ゐられ、その發音の如何に關らず、「もて」と書くのが記載上の習慣になつてゐる。ラ行音が鼻音に變化する時に、これを書き表さないのも、中古以來の習慣として、延慶本平家に於ても、稀にその例を見るのである。院政鎌倉時代には、タ行四段活用の促音便は表記しても、ラ行四段活用等の促音便は表記しない事が多いのであつて、延慶本平家では、その全然表記しない方針を取つたのでないとも言へない。たゞ、ある實際の音響を模した擬聲語や、音聲そのものによつて特殊の意味を表さうとした擬態語にあつては、その全語形を何れかの文字を用ゐて寫し出さねばならなかつたのである。

一方又他の資料によれば、促音便を色々な假名を用ゐて表してゐるのである。ツ字を用ゐたものには、長寛元(一一六三)年點大唐西域記、永萬元(一一六五)年點香藥鈔、寛喜三(一二三一)年點白氏文集に「欲」を「ホツ(ス)」とし、寛喜點文集には「尙」を「タツトフ」と訓じた例もある。ツ字の外には、ン字を用ゐた例も中古からあり、室町時代に及んでも、桃源和尙の史記抄に、「ワルクナンタホトニ」「紅藍ヲ取テモンテ」など書き、「チリチリニナンツタ時」「ツレテインツテ」など「ンツ」を以て寫した例さへある。親鸞聖人なども種々な記法を併用したらしく、吉澤博士の調査によ

れば、「ン」「ツ」の外に「チ」「フ」の假名を以て促音を寫してゐるのであるが、而もそれは親鸞のみに限つた事ではない(國語國文の研究所收「敎行信證の訓點は坂東語か」四〇四頁以下「本願寺本敎行信證點注の筆者に就いて」五〇九頁以下)。要するに、鎌倉時代には、促音を全然表記しなかつたり、表記したりして、表記するにしても、用ゐる文字が一定してゐなかつたのである。これは畢竟促音の本體が明確につかめなかつたからであらう。さうして、その發音法が今日と如何程相違してゐたかは、容易に斷言出來ない。

種々試みられた表記法の中では、ツ字をあてる方法が次第に勢力を得て、室町時代からは、大體これによつて統一された。ツ字を用ゐるのは、漢字音の入聲t音を中古以來ツで表してゐたが、その入聲音がカ・サ・タ・ハ行音の前にある時に促音となつたので、そのツ字を字音以外の場合にも應用したのであらう。世阿彌は入聲のツを小書してゐるが、促音の場合にも亦同じ書き方をしてゐる。

ムカシサテヒコトイッシ人キミノセンジニシタカイテフ子ノウエヨリカッハトミヲナケテチイロノソコニシツムトミエ□リ(松浦乃能)

吉利支丹の羅馬字綴では、caccacu(各々) yeccqui(悅喜) bucossa(無骨さ) taxxite(達して) motte(以て) tappai(答拜)の如く、次の文字と同一又は同音の文字を重ねて示した。室町時代の促音は、恐らく今日の發音と殆ど變りなかつたのであらう。

入聲音を含む字音語以外の促音便は鎌倉時代に最も優勢であつて、武士言葉に於て特に多く用ゐ、一般社會の言葉にも、その傾向は著しかつたやうであるが、室町時代に入ると、その勢力を著しく減じ、一部に固定して殘つただけ

である。ロドリゲスが、規則的な促音便として擧げてゐるのは、「引キ」「追ヒ」が接頭辭的に用ゐられて、「ヒッパル」「ヒッ込ム」「オッパナス」「オッ取ル」となるなどである（大文典一七七丁裏、小文典一一丁裏）。その外は、漢字の入聲音がカ・サ・タ・ハ行の音につゞく場合である。さうして、獨りTの入聲音のみでなく、開音節となつてゐる「チ」「ク」「フ」もすべて促音化した。例へば、數詞の「イチ」「シチ」「ハチ」「ロク」「ヒヤク」「ジフ」が助數詞に續く時にもあらはれたのである。

撥音

漢字音の三内鼻音m n ngの別は、漢籍佛典を讀む上に保有されたけれども、日本語に取入れたものでは、喉内のngが早くウとなり、更に室町時代に長音となつた。脣内のmが舌内のnとの區別を失ひ、大體nの一種に歸したのも中古にあり、近古には全然識別せられなかつた。さうして、室町時代に、m尾音の語が複合して連聲となる時にも、「感應」「探幽」が「カンノウ」「タンニユウ」となつてゐるので、「感」「探」をn尾音に發音してゐたことがわかる。音曲玉淵集にも、「陰陽」に「ヰンニヤウ」と註してゐる。「三」が、「三六十八」「三郎」にサブといひ、「三位」を「サンミ」といふ所などに本來の脣内音の面影を傳へてゐるのは珍しい例である。吉利支丹本では、勿論三内音を悉くn字で寫してゐる。

固有の日本語に於ても、マ行ラ行の音節が母音省略と同化により、所謂撥音便の現象を生じたのは、中古の事であるが、未だ顯著ではなかつた。それが、院政時代以後頓に勢力を加へ範圍も廣まつて來た。バ行の撥音便も、中古には確實な例證を得難いが、鎌倉時代には普通となつた。

延慶本平家物語は撥音を寫すのに、ム・ン兩方を用ゐてゐて、バ行マ行のバ・ミが撥音便となつたものは、ムのみ

で表してゐる。これを觀ると、ムの字はm音を寫してゐて、かゝる撥音便はm音の狀態にあつたのではないかとも想像せられる。然しながら、ナ行ラ行の撥音便にはン・ムを共に用ゐ、ナ行音の前にある時にもムを書いた方が多いのであるから、ンとムとの區別は認められない。從つて、バ行マ行の撥音便はm音であつたとのみは言へない。たゞ、マ行バ行パ行の音の前にある時は、何れの撥音もmに發音せられた事は、ロドリゲスも說いてゐる(大文典五八丁表一七八丁表、小文典一〇丁裏)。恐らく、近古の初めからその通りであつたらう。ガ行音の前にある撥音に就いては何等說いてゐないけれども、喉內音に同化せられなかつたとも考へ難い。

撥音便は鎌倉時代に於て最も盛に用ゐられ、「ゴザンナレ」「テンゲリ」などの言ひ方も軍記物に多く見える所である。「ゴザンナレ」は「ニコソアルナレ」の變化である。「テンゲリ」に關しては、山田博士が、「ニケリ」を「ンゲリ」と言つた音便があつて、「ンゲリ」を「ケリ」と同じと考へて「テケリ」を「テンゲリ」といふに至つたのではないかと述べられた(平家物語の語法、下一七五六頁)。「ニケリ」を「ンゲリ」と言つた實例が得られないので、その類推語形であるか否かは定め難い。「タダ」(唯)を「タンダ」、「ズハ」を「ズンバ」とする如く、單に挿入したものであるかも知れない。

鎌倉時代に榮えた撥音便も室町時代には衰へ、あるものはその代りにウ音便をとつて長音化する傾向があつた。

連聲　所謂連聲は、ア・ヤ・ワ三行の音が撥音や入聲音につゞく時にナ行マ行又はタ行の音に發音する事であつて、中古に於て漢語の複合語にあらはれ初めてゐたが、近古に入つて室町時代に至ると、漢語が「は」「を」などの助詞につゞく時にも、固有の日本語のみの連續する時にも現れた。ロドリゲス(大文典一七七丁裏、小文典一二丁表—裏)や玉淵集の說明によれば、撥音のN音を受ける場合に、母音のア・イ・ウはナ・ニ・ヌとなる。例へ

ば、御主・赦免ある・愼恚・建禮門院・おん入り候・寒雲・住むとやいはんうたかたの。ワ・ヲはナ・ノとなる。例へば、人間は・天皇・觀音・感應。ヤ・ユ・ヨはニャ・ニュ・ニョとなる。例へば、今夜・べけんや・因由・肝要・專要。エはすべてyeの音であつたからニェ nheとなつた。例へば、輪廻・繁榮・玄慧法印。「因緣」は「インネン」とのみ言ひ「インニェン」とは言はなかつた。

入聲のTに續く場合にはア行音がタ行音となる。例へば、叱咤・八音・遏雲・法緣・蓑笠翁・大念佛を申す。ヤ・ユ・ヨはチャ・チュ・チョとなる。例へば、攝陽郡談・出涌・物欲。エはテともなるが、yeの發音であるが爲に、「佛緣」の如くチェとも發音した。以上は謠曲の謠ひ方を說いた玉淵集に述べてゐるのに據つたのであるが、ロドリゲスは、「祕密あらば」「今日は」「大切は」など、ア・ワの音の變化する一部の例しか說いてゐない。これを以て觀れば、謠曲の謠ひ方の基づいてゐる室町中期の發音では、廣い範圍にわたつて行はれたのであるが、ロドリゲスの觀察した末期の發音では、前述の範圍に限られ、既に衰勢に向つてゐたのであらう。今日、連聲の發音が行はれてゐるのは九州方言であつて、九州方言に於ても、たゞ撥音につゞく場合に「郵便な來た」「本の讀む」などいふ外に、入聲音につゞく場合のものは全くきかれないやうである。撥音につゞく場合の連聲も、近世に降つては衰へてしまつたのである。

連聲は室町時代に殆ど規則的に行はれた發音法であるにも係らず、これを假名の上に示すことはしなかつた。吉利支丹が羅馬字で書いたものにも、大抵は書き表してゐない。日葡辭書を見ても、「安穩」を Annon 又は Amnon と標出してゐるのなどは例外であつて、大多數は、Sanyô(算用)の如くにのみ書いてゐる。「延引」を Yenin の形で擧げ、Yemin と書いてあるやうに讀むと註してゐるので、やはり連聲に發音すべきことを認めながら、假名遣通りの

形で登錄したのである。原則として表音主義をとつた吉利支丹が、連聲を發音通りに記さなかつたのは、主として日本人自身がこれを表記しなかつたといふ事に起因するであらう。

「合ふ」の語がiの音に續く時に、ヤ行音に變ずる事は今日普通なのであるが、室町時代にも行はれたのである。橋本教授は、室町時代の書寫と認められた周易抄(吉田子爵藏)の中から「相兼ヨリヤワイデハ」「ヨリヤウテ」「思イヤウタホトニ」「カタライヤウヅ」などの例を抄出せられた(吉利支丹敎義の研究六四頁)。吉利支丹の羅馬字綴でも、「アイ」を Yai と寫した例は見當らないが、連用形終止形には往々 y 字を加へてゐる。日葡辭書にも、Yuqiai, ǒ, ǒta(行き合ふ) Miai, ǒ, yǒta(見合ふ) Voqi ai, yǒ yǒta(起き合ふ)の如く、或は書き、或は書いてゐない。天草本平家物語には「出合ふ」を deyǒ と書いた所もあるので、eの音につゞく時にも音變化を起してゐたことが知られる。一五九三(文祿二)年天草版金句集の中に、「帷幄」をyyacu「一惡」を yehiacu とも yehiyacu とも書いてゐるので、「合ふ」の外にもア音をヤ行音に發音することがあつたやうである。

語頭音

「馬」「梅」は、中古以來多くは「むま」「むめ」と書かれ、その語頭音はmに發音されたのである。吉利支丹は、これをvで寫したけれども、その發音はvでないと、ロドリゲスは注意してゐる。即ち ma me mo の音節の前にあるvは、明瞭なv(ウ)に發音しないで、閉ぢた口の中で發音するのが勝つてゐて、日本人が假名で書くのに、「う」でなく「む」を用ゐるのも、かゝる發音を示す爲であり、「御馬」を vonma 「傳馬」をtenma と發音するのも、その理由に基づくと說いてゐる(大文典一七八丁表―裏)。mの前ばかりでなく、「むばら」(荊)「むべ」(宜)など、bの前に於ても、かくの如く發音せられた筈である。

第三章　語　法

名　詞

【複數の言ひ方】　名詞の複數を示すのには、その名詞を二つ重ねるものと、接辭を添へるものとの二方法を用ゐた。先づ、名詞を二つ重ねた言ひ方は、鎌倉時代に盛に用ゐられたのであつて、全體を總括して示すよりも、その一つ〳〵を枚擧して指す意味を持つてゐた。

浦々島々泊々ニ差タレドモ肝心モ身ニソワデ我子ノ行ヘゾ悲シカリケル（延慶本平家、六本）

右の如き例を見ても、單に多數を示してゐるとのみは言へない。分娩する事を「身々となる」と言つたのも、この意味に於て理解せられる。

室町時代に至ると、この方法は固定する傾向があり、鎌倉時代の如く、如何なる名詞でも自由に重ね用ゐるといふ事は見られなくなつた。さうして、前代に於て最も多く使はれた「人々」「國々」「寺々」「度々」「樣々」「處々」等の如き普通の言葉に限られたのであるが、既に文語的言ひ方となつてゐたので、室町末期には、高尙な言ひ方であるやうに感ぜられてゐた（大文典二丁表）。

複數を示す接辭として注意すべきは、「たち」「しゆう」「しゆ」「ばら」「ども」「ら」等の接尾辭であつて、尊敬又は輕蔑の意味をも伴つてゐる。

「たち」（達）　これは人に關する名詞にのみ添へ、可なり程度の高い尊敬の意を含んでゐる。例へば、「大將達」「北方達」「御子息達」「智者達」「龍王達」などは、延慶本平家物語の用例であるが、室町末期には、身分の低い者の間に

も往々用ゐて、「殿達」「善人達」「あの人たち」など言ひ、すべて敬意を持つてゐた（大文典一丁裏一六一丁表）。

「**しゆう**」「**しゆ**」（衆）この語は室町時代に用ゐられ始めたものゝやうである。ロドリゲスの説明によれば、「たち」よりも敬意が薄いけれども、人にのみ用ゐ、目上や同輩に對し、又は目下の者にも使つたのである。例へば、武士衆・都衆・地下衆・客衆（大文典一丁裏一六一丁表）。「衆」は「しゆう」とも言つたが、「しゆ」といふ方が多かつた。

「**ばら**」（原）「ばら」は中古以來用ゐて鎌倉時代にも及んでゐるが、室町時代には、特殊の語に限られ、一般の話言葉からは影を沒した。鎌倉時代の用法を延慶本平家物語に徴するに、敬意を拂ふ人に對して「宮原」「殿原」と言ふ外に、「下部ノ法師原」「賤キ小法師原」「下人冠者原」「乞食法師原」「奴原」など、卑める者に對しても用ゐてゐる。源氏物語玉葛卷にも「すやつばら」といふやうな例も見えるから、かく輕蔑する者に添へるのは中古にも溯り得るであらう。

「**ども**」（共）「ども」は人のみでなく、人以外にも、無生物にさへ添へる。人以外に用ゐた例を擧げると、「乘尻共」「天狗共」「馬牛共」「離レ島共」「弓箭太刀共」「釘共」「用途共」「饗應共」「不思議共」などあるが、人に用ゐる場合には、鎌倉時代にも、尊敬する者へ向つては加へてゐない。室町末期には卑める意を示すと觀られてゐる（大文典一丁裏一六一丁表）。延慶本平家物語に、

大將ヨリ始テ御子孫共マデ並居テ聞給ケリ（三本）

梶原平三景時此ノ御舟共ニ逆櫓ヲ立候バヤト申ケレバ（六本）

など、「子孫共」「舟共」に「御」を添へたのは、「子孫」「舟」に對する敬意を示したのではなく、大將とか舟の主とかを尊敬したからである。故に「共」が用ゐてあるのと矛盾しないのである。なほ、「ども」は同一物の多數であることを示

し、「など」はある一つの物を代表的に擧げ示してその他に種々異なつた物のあることを意味するのであつて、「ども」と同様に用ゐた例は、近古にはまだ現れてゐない。

「ら」（等） 「ら」は鎌倉時代には必ずしも卑める意を添へるものではなかつたやうであるが、既に「天狗メ等」といふ例も延慶本平家物語に見え、室町時代には「惡人ら」「百姓ら」など用ゐて、「ども」よりも輕蔑する意が强かつた。尤も、この相違は室町末期の話言葉の上にあらはれてゐるのであつて、文章語に於ても認められたといふのではない（大文典一丁裏一六二丁表）。

【敬讓の言ひ方】 1（接頭辭） **「ご」「ぎよ」「おん」「お」「み」**（御） 名詞について尊敬をあらはすのには、これらの接頭辭を最も多く用ゐた。これは尊敬せらるべき人を表す名詞に添へるばかりでなく、尊敬せられるべき人と種々の點で關係を有する事物を表す名詞にも添へるのである。後者の用法に於ける「御」が所有者を尊敬するのであることは、ロドリゲスも說き、「御法度」「御成敗」「御狀」などの「ご」は「公方の」又は「天下の」といふ意をあらはし、「御意（ぎよ）」は貴下の命令、「みことば」は彼卽ちキリストの言葉の意であると述べて、かゝる接辭は所有代名詞にあたると解してゐる（大文典九六丁表一五八丁裏）。更に又「御奉公申し上げたい」「おん無沙汰申すまい」「御談合（ごだんかふ）申し上げたく候（そろ）」「御見舞仕るべくそろ」など、所謂關係敬語の用例を擧げて、日本の學者達はこれを以て正しい用法に反したものであると言つてゐるが、かゝる「御」は「爲の」「に對し」などの意を含み、「御奉公」は「お爲の奉公」「御身樣（おんみさま）に對しての奉公」といふ意味を示すと述べてゐる（大文典一五九丁裏）。室町末期には、既にかゝる用法が可成り廣く行はれてゐたのである。

その外、當時の用法を、ロドリゲスの述べてゐる所によつて記せば次の通りである。「ご」も「ぎよ」も字音語に接續

するけれども、「ご」は一般に廣く用ゐ、「ぎよ」は特定の語に限られてゐて、「御意」「御劔」「御寢」「御感」「御札」「御簾」「御盃」等に於て、「ぎよ」を用ゐた。「おん」「お」「み」は固有語に接續するのであるが、「おん」は文章語か說教などの莊重な談話語かに用ゐ、「お」は日常の話の中に用ゐる。「おん」「お」が一般的なのに對して、「み」は特殊的であつて、文語にも口語にも用ゐるが、接續する語が限られて居る。然し、多くの場合、「み」のつくものには、「おん」「お」もつく。例へば「みて」(御手)「みあし」(御足)「みことば」(御言葉)「みでし」(御弟子)「みまへ」(御前)「みよ」(御代)などは、「おん」「お」を以て代へてもよいのである。例外としては、商店の意では「みくら」と言ひ、馬の鞍には「おんくら」「おくら」と言ふが如く、區別あるものもあつた(大文典一五八丁裏—九丁表)。

「尊」「貴」「芳」　これらの室町末期に於ける尊敬の度合は、「尊」が最も高く、次が「貴」であつて、「御」はそれよりも低く、「芳」は「御」よりも低かつた。

「尊」は、主として僧侶や剃髮した老人に對して、「尊老」「尊師」など用ゐ、時に俗人にも、「尊顏に能はず」「尊札に與る」「尊意を得」など言つた。「貴」は、本來俗人や剃髮してゐない者に對して、「貴面に能はず」とか「貴札」「貴翰」などいふのであるが、また僧侶に向つても「貴僧」などいふこともあつた。「芳」はもと「御」と同程度の敬意を有してゐた。故に「芳恩」と「御恩」、「芳惠」と「おんめぐみ」、「芳情(はうせい)」と「おんなさけ」は夫々同等の敬語であつたけれども、室町時代には、「芳」の敬意が輕くなつたので、書翰に於ても亦口語に於ても、「芳」の上に更に「御」を重ねて、

御芳札披見之處青陽遊宴殊珍重候(庭訓往來、上)

御芳情過分の至り。　御芳志辱けない。

など言ふに至つたのである(大文典一六〇丁表—裏)。

「しや」　輕蔑した意を示す接頭辭の「しや」は近古の初めから見えてゐて、今昔物語集にも「シヤ面(ツラ)」「シヤ尻」、宇治拾遺にも「しや首」「しや頭」など、用例は多い。主として、對手の身體の一部分を表す語に添へるが、又「シヤ冠」「シヤ乘物」など、その身に直接した物にも用ゐた。

しや、若き宮の、子の日にかゝる歌よむやうやはある(十訓抄、上)

の如く、感動詞にも用ゐた。史記抄などにもかゝる「シヤ」の用例があるけれども、室町時代には接頭辭としても、多くは用ゐなかつたやうである。

2〔**接尾辭**〕**「殿」「樣」「公」「老」**　鎌倉時代には、「殿」が普通に行はれてゐたが、室町時代には、「樣」が新にあらはれ、「殿」に代つて一般に用ゐられるに至つた。すべての敬語は、敬語となつた始めに敬意が強くて次第に弱くなるものであるから、室町時代には、「樣」が最も高い敬意を表してゐた。それに次ぐのが「公」であつた。「殿」や「老」はその下にあるが、殊に「老」は敬意が輕い。「老」は僧侶や剃髮した老人に用ゐ、一般には同輩の間か、身分の高い者から低い者に對する場合とかに、主として書翰の中に使つたのである。さうして、對手が俗人であれば、「老」の代りに「殿」を用ゐた(大文典一五九丁裏—一六〇丁表)。

その他、「御前」は「樣」と同程度の敬意をもつて女にのみ使はれ、「御」は女にも男にも使はれた(大文典一六〇丁裏)。また僧侶には「御房」を用ゐた。

「め」　輕蔑の接尾辭「め」は近古の初めから用ゐられ、殊に固有名詞の人名につけて、「西光め」「景時め」などいふ事

が多かつたやうであるが、「鬼神めらめ」(日蓮、法華證明鈔)の如く、廣くつけるやうになり、室町時代以來一層盛になつて、今日に及んだ。

代名詞

【人代名詞】 1(自稱) 近古を通じて最も普通に用ゐた自稱の代名詞は「われ」である。室町時代には、「われら」も「われ」と同義となり、謙遜の心持を表した上品な言葉とせられた。

室町時代からは、また「わたくし」と「それがし」とが、話言葉の中に多く使はれるやうになつた。「わたくし」(私)は公に對して自己一身に關することを意味する名詞として、又は「私に」といふ副詞として、古くから存するものであつて、室町時代にも、「自身で」の意に「私に」を用ゐて、「私に言はれた」「私にする」といふやうにも言つてゐた(大文典六七丁裏九六丁表)。然し、自稱の代名詞としての用例も、室町時代の初期から見えてゐる。即ち、義經記に

抑此山には鎌倉殿の御弟判官殿の渡らせ給ひ候由承て吉野の執行こそ罷向ひ候へ、わたくしらは何の遺恨候はれば、一先づ落ちさせ給ふべく候か。(卷五)

とあるのなどが早いであらう。「それがし」はもと不定稱であつたが、これが自稱にも用ゐられたのは鎌倉時代にはじまり、室町時代に入つてひろまつた。

「み」(身)「みども」(身共)「みどもら」も室町時代に用ゐた。「み」は多少高ぶつた心持を伴ひ、主として身分ある者が用ゐたが、「みども」「みどもら」は身分の高下に拘らず用ゐた(大文典六七丁裏)。「ども」を添へれば、卑下する意を表すからであらう。「わらは」(妾)は童の義から、女子が謙遜していふ自稱の代名詞となしたのであつて、「此の女子のいふやう、わらはは此の守の女にて侍りしが」(宇治拾遺、十三)などを始め、近古初期から見えてゐる。室町時代には、

「わがみ」(我身)「みづから」(自)を女が用ゐた(大文典六八丁表)。

「おのれ」の略體「おれ」を對稱に用ゐた例は記紀にも見えてゐるが、自稱に用ゐたものでは、

御前のおはしまして、いざ〳〵黒戸の道をおれら知らぬに教へよと仰せられて(讃岐典侍日記)

とあるのが古い所である。その後、降つて室町時代から一層盛になつた。安原貞室の片言卷三に曰く、

みづからのことを○をれといふはよしと云り○をのれといふ中略のこと葉成べし。(中略)扨此をれと云ふこと葉は。尊氏公の世中を心のまゝにしたまひつる比より別てはやり出侍りて。侍分の者ならでは。えいはざりしとかたれりし人侍りき。

即ち、武士言葉として流布したものであらう。同輩か下輩かに對する場合に用ゐたのであつて、この外にも、かゝる類の語は少くなかつた。

「此の方」「こなた」「こち」などは方向代名詞から轉用したものであつて、身分の高下を問はず、普通に用ゐたのであるが、特に初の二つは丁寧であつて、「こち」は略體であるだけに、丁寧さは劣つた(大文典六七丁裏)。

「朕」「まる」は、鎌倉時代以後近古を通じて、主上に限られてゐる。

漢語系統の卑下したものには、僧侶の「愚僧」があり、「愚老」も老人や剃髪者が用ゐ、「拙者」「愚拙」「拙夫」「拙子」などもあつたが、室町時代には、すべて主として文語に使はれ、口語の上では稀であつた(大文典六八丁裏)。

2(對稱) 近古に於ける普通の對稱代名詞は「なんぢ」(汝)である。その複數形は「なんぢら」か「なんだち」である。「なんぢら」は對者を見下し、「なんだち」は敬意を含んでゐたやうであるが、室町時代には、文語に於て、敬譲の意を含むことなく用ゐられた(大文典六八丁表)。

對者を尊敬した場合の代名詞には、「その方」「そなた」「こなた」が多く用ゐられ、文語や勿體ぶつた口語には「貴所」「貴殿」「貴邊」「貴方」「御邊」などが用ゐられ、更に丁寧にいふのには、「こなた樣」「貴殿樣」のやうに、「樣」を添へた。

そなたは躬よりも强うはない。それによつてそれがしは貴所な物とも思はぬ。(天草本伊曾保)

事物代名詞の「それ」を轉用し、「それに」とも言ふ事が、室町時代に行はれた。「あれ」「あれに」も亦同樣に對稱の代名詞とし、「それ」よりも用例が多い(室町時代の言語研究四〇頁)。

「こち」を自稱としたやうに、「そち」を對稱にもしたのであるが、「そち」は目下の者や子供に向つて用ゐた。「おのれ」の用法も亦「そち」と同じである(日葡辭書、大文典六八丁表)。

「われ」を對稱としたのは、

白河院(中略)仰事ありけるは、小一條院は世のをこの人にてありけるが、頼義を身を放たでもたりけるが、きはめてうるせくおぼゆる也。今はわれが侍ればとこそ忠盛朝臣には仰事有けれ。(古今著聞集、九)

などのやうに、鎌倉時代の事であるが、初めは親しみを表したものゝやうである。延慶本平家物語に、「わ殿原」「わぬし」「わ御使」「わ牛小舍人」「わ僧」など、「われ」の「わ」を接頭辭風に用ゐてゐるものは、對者に親しみを持つた場合である(平家物語の語法、上一六九頁)。然し、室町時代に至ると、身分の低い者と話す時に、侮蔑して言ふ場合にも用ゐるやうになつた(日葡辭書)。

「ねし」(主)「おねし」(御主)も室町時代に於ける對稱の代名詞であつたが、「ぬし」は目下に對し、「おぬし」は同輩に

對する語であつた(日葡辭書)。「おぬし」はまた「おのし」とも言つて、抄物には、妻が夫に向つてこの語を用ゐた例などがある。

3〔他稱〕 事物代名詞の「かれ」「あれ」「それ」「これ」を代用するのが普通であつた。室町時代には「あの」「その」「この」に「人」又は「者」を添へた言ひ方も多く行はれた。

輕蔑した場合の他稱には、「しやつ」「きやつ」が鎌倉時代から用ゐられ、室町時代には「あいつ」「こいつ」も用ゐられた。その他、史記抄には次の如き例がある。

カツガクセモノヂヤ(十)　雍歯ニ云ツケテ守ラセラレタレバ、後ニチヤツ爲魏守タホドニ、ツヨクニクマレタゾ(六)

4〔不定稱〕「たれ」を「だれ」といふ事は、室町末期に現れかけてゐたかと思はれる。

【事物代名詞】 近稱に「これ」、中稱に「それ」、遠稱に「あれ」を使つたが、室町時代には、「このやう」「そのやう」「あのやう」といふと同じ意味で、「これやう」「それやう」「あれやう」、「これつら」「それつら」「あれつら」、「これしき」「それしき」「あれしき」が用ゐられた。日蓮の法門可被申樣之事の中には「それてい」の語が見えてゐる。「それ」を名詞に直接する言ひ方は鎌倉時代の終頃からあつたのである。不定稱には「いづれ」「なに」があり、「いづれ」を「どれ」といふのは近古の初から見えてゐる。

熊野へまいるにはきぢといせぢとどれち(か)しどれとを(し)(梁塵秘抄、二)

「この」「その」「あの」と同列の不定稱に「どの」が室町時代にあらはれた。この時代に、不定稱は「ど」の音節を語頭に持つ傾向があつたので、それに索かれて出來た類推形であらう。

どの山などのはざまにかゝりてゆかんずるぞ（義經記、三）

「そんぢやう」 人や場所などを漠然と指す場合に、「そ」の系統の代名詞の上に、「そんぢやう」の語を冠することがあつた。

此嶺は本宮、彼は新宮、是はそんぢやう其王子彼王子など、王子々々の名を申て（覺一本別本平家、十）

人ノ前デ大人ヲホメテソンヂヤウソレハカカルヨイ人ヂヤト云ハ（史記抄、十）

六國皆秦ニ降參シテソンヂヤウソコヲ進ゼウト云ゾ（古文眞寳抄、八）

鎌倉時代の終か室町時代の初かに發生したものであらう。史記抄には、「ソンヂヤ」と書いた所があるので、終を拗短音に發音した事もあるのであらう。この語は「その」「それ」「そこ」と連合して、某の意を示すのであるが、「ソンヂヤウイツ何事カアランゾ」（莊子抄、人間世）の如く、直ちに不定の意を持つた語に添へた例もある。

この「そんぢやう」に就いて、谷川士清は倭訓栞に於て、「平家物語に見ゆ、それといふその義なるべし、何でふといふが如し」とて、「そんぢやと書はあしゝ」と言ひ、「そんでふその」の形を標出してゐる。言泉などもこれに從つてゐるけれども、室町時代には、皆「ぢやう」と書かれてゐて、開音であつたから、合音の「でふ」と同樣に解することには疑問がある。

【場所代名詞】 近稱に「こゝ」、中稱に「そこ」、遠稱に「あそこ」を用ゐ、「あそこ」を「あしこ」とも言つた。「あしこ」の用例も早くから見えてゐる。

あしこに立てるは何人ぞ（梁塵秘抄、二）　　落人トテアシココヽニ打散レテ（延慶本平家、三末）

不定稱には「いづく」「いづこ」の外に「どこ」の形があらはれた。その發生の經路は、イヅコのコの影響によつて、ヅがドとなり、次いでイが脱落したのであると推定せられるが、山田博士は、三巻本色葉字類抄に「於何」を「イトコニシテカ」と訓じ、建治本古文孝經(大原三千院藏)に「安」を「イトコソ」と訓じてある例を引いて、この推定を確實ならしめられた(平家物語の語法、下二〇一五頁)。「どこ」の用例も早くからあるのであつて、梁塵秘抄(二)に「ほとけはどこよりかいでたまふ」「釋迦の住所はどこ〳〵ぞ」など見えてゐる。室町時代になると、口語には大抵「どこ」のみを用ゐた。不定稱が語頭に「ど」をとるやうになつたのは、この語に始まる。

【方向代名詞】　近稱の「こち」、中稱の「そち」、遠稱の「あち」が多く用ゐられたが、「そち」は延慶本平家物語等には用例がない。室町時代には、「あち」を「あつち」とも言つた。「ら」を添へた形も、「こちら」といふのが室町時代にあらはれてゐる。

不定稱の「いづち」は、室町時代に「どち」となり、「どち」の方が多く用ゐられた。「どち」は方角ばかりでなく、「どれ」と同じく、あれかこれかと選びとる意をも示した。

中稱の「そなた」の外に「そかた」といふ語が、延慶本平家物語に見えてゐる。

　平家是ヲ見テ五百餘艘ノ船ヲ二百餘艘ソカタヘ指ウケ(四)

これが、「そなた」の原形であるか、「いづかた」などに類推して新しく作られたものであるかは、容易に斷定し難い。「いづこ」が「どこ」となり、「いづれ」が「どれ」となつたやうに、「いづかた」を「どかた」とも言つたやうである。

　ヤマザトハヨドコサヘツ、アケニケリドカタゾカネノヲトノスナルハ

山家冬夜ト云心ヲ經信卿ノ讀也。イヅカタト云ベキヲドカタトヨメルイカニ。(和歌童蒙抄、二)

數　詞

【定數詞】　日本の數詞には、固有語と漢語との兩系統があつて、固有語は漢語に壓倒せられて充分に發達しなかつたのであるが、漢語の數詞が勢力を逞くしたのは近古からであらう。一般に漢語の日本語への進出はこの時代から著しくなつたからである。

室町時代の漢語數詞の發音で、三が四に續く時には、「サンシ」を、「サウシ」と言つた。吉利支丹の羅馬字綴によれば、sõxijũ（三四十） sõxinen（三四年） sõximonme（三四匁目）などと寫されてゐる。たゞ九々の三四十二は sanxino jũni とよんだ。室町末期に於ける九々の唱へ方は、現在と多く變りはない。今日、一との掛を「インイチ」「インニ」など、すべて「イン」といふが、當時は一二・一五・一六だけに「イン」とし、一一は「イチイチ」、一三は「イッサン」一七は「イッシチ」などと呼んだ。八は fa（四八・五八） pa（八八） fachi（二八・五八・六八・七八） pachi（一八・三八）とやうに區々であつた（大文典二一六丁表—裏）。

固有語の數詞を連呼する場合には、

ヒト　フタ　ミ　ヨ　イツ　ム　ナ、　ヤ　コ、ノ　ト

といひ、今日の如く、二音節を以て統一するまでには至つてゐない。然し、日數を勘定するのには、

ヒトイ（又は）ヒヒトイ　フツカ　ミッカ　ヨッカ　イツカ　ムイカ　ナヌカ　ヤゥカ（yôca）
コ、ノカ　トゥカ（tôca）

と言つた。十は單獨には touo とのみ書かれてゐる。六は「ムツ」といひ促音にはなつてゐない（大文典二一四丁表）。

【不定數詞】 數量に關する疑問を示すのには、「いく」(幾)が多く用ゐられた。それに助數詞を伴ふのであるが、普通には、「いくら」「いくつ」「いくばく」等の形をとつてゐる。「なに」(何)も盛に用ゐ、ナンの發音となつてゐた。「ほど」に「いく」が接する時は「いかほど」となり、「なん」が續く時は「なんぼう」となつた。その語源の忘れられた室町末期には、更に又「ほど」を添へて「なんぼうほど」とも言ひ、「人數はなんぼう程あるぞ」「なんぼう程高いぞと言ふことはいまだ聞かぬ」などゝ用ゐた。「なん」が他の名詞に冠せられる時に、その間に「か」を挿入することがあるが、室町時代には、「なんが日」「なんが月」「なんが年」「なんが國」など、「ガ」と發音した。又「何時」は「いつ」と言つたが、「何時頃」は「いつつ頃」と促音にした(大文典六五丁裏一二四丁表)。

【助數詞】 助數詞の發達は著しいものがあり、漢語につくもの、固有語につくもの、何れも細かい區別を立てゝ使ひ分けられるに至つた。

長さの單位を示すのに鎌倉時代に用ゐた「段」が六間であることに就いては、山田博士が延慶本平家物語の用例に基づいて斷定せられた(平家物語の語法、上二六〇頁以下)。室町時代の「里」は所によつて同じくなかつた。都では三十六町を以て一里とし、これを上道と言つた。九州では、或は四十八町とし、或は五十町とし、水路には十八町とした。關東の一里は六町であつた(大文典二一九丁裏)。

重さの「斤」は、物によつて相違がある。茶の一斤は二〇〇匁、糸や木綿等は二五〇匁、實のある綿は五〇〇匁である。一般には一六〇匁を以て一斤とするのであつて、眞綿・藥・沈・麝香・龍腦等はこれによつた(大文典二一八丁裏)。

固有語の助數詞の室町時代に於ける用法について一言すれば、瓜類十箇に一頭、蓑に一首、鞍に一口、矢に一手、

刀に一腰(こし)など、人體の一部分を指す名詞を用ゐたものがあり、また鐙や魚に一懸(かけ)、甲に一刎(はね)、香に一炷(たき)、雲に一群(むれ)、袴や肩衣に一下(くだり)など丶言ひ、動詞から來たものもある(大文典二二六丁裏—二二八丁裏)。

體言の格　【主格】　主格は助詞をとらないこともあるが、多くの場合には助詞を伴ひ、近古からは、「の」よりも「が」が主格を示す助詞として優勢になつた。「の」は元來從屬句の主語か、獨立句に於ても咏歎的な叙述をなす際等に用ゐて、尋常の終止をなす述語に對する主語につく事はない。延慶本平家物語の用法も亦さうなつてゐる。同書には「が」も「の」と同じやうに用ゐてある。たゞ主格が人に關するものにつくとき、

田内左衞門成直ノ。オワスルトミ申ハ僻事カ(六本)

サレバコソ土佐房メガ。寄スルハ何事ノアランゾトテ少モサワガズ(六末)

の如く、主格に立つものに對して、「の」は敬し、「が」は卑しめるといふ相違があつた。室町時代になると「の」も「が」も尋常の叙述をなした單文にも用ゐたが、待遇上の相違は尙存したやうである。ロドリゲスの説明(大文典一丁表三八丁表、小文典一三丁表)によれば、「が」は自己か、身分の低い第三者かに用ゐ、「身共が」「あれが」と言つた。又卑下し輕蔑するのには、その意を示す接辭と共に用ゐて「身共らが」「次郎めが」「こいつめが」など丶も言つた。主人が地位のない從者と話すのには「が」を使つた。

蓑笠着た旅人が。二人づれで通る(伊吹の舞)

右は敬意を含んでゐない。これに對して、「の」は對者か第三者かに用ゐて、幾分敬意を表し、少くとも輕蔑する意を含んでゐなかつた。

諸事の次第をば義盛と武藏殿の御覽ぜられた（昌尊の舞）

室町末期に於ける「が」の勢力を示す一例として、天草本平家物語の譯文と百二十句本の原文とを對照して擧げよう。

おやのおとせばこもおとす、しうのおとせばらうどうもつゞく、あにがおとせばおとゝもおとす、むまには人、ひとにはむまおちかさなつて（百二十句本、七）

親が落せば子も落す、主が落せば郎黨も續く、兄が落せば弟も落す、馬には人、人には馬が落重なつて（天草本、三）

室町末期には、「が」を普通に用ゐ、特に主格に立つ人を尊敬する場合とか上品に言ふ場合とかに「の」を用ゐたのであらう。

「が」は主格を強く指す所から、願望を意味する述語に對する主語に用ゐるやうになつた。

酒ガホシクハ飮メ、琴ガヒキタクハヒケ（四河入海、十ノ二）

平家の由來が聞きたい程にあら〳〵略してお語りあれ（天草本平家、一）

かゝる場合に「酒ノ飮ミタキ時ユク也」（蒙求抄、十）の如く「の」を用ゐた例もあるが、普通ではない。

主格について「は」が上にある語の末音と融合することは、室町時代からあつた。

新茶のちやつぼよ、なふ、いれてののちはこちや（濃茶にかく）しらぬしらぬ（閑吟集）

わごれうおもへばあのゝ津よりきた物をなれふることはこりやなに事（同前）

【連體格】　この期に於ける連體格を示す助詞には、「の」と「が」とあつて、延慶本平家物語で「が」を用ゐてゐるのは、上にある名詞が殆ど全く人に關するものに限られてゐる。これは代名詞の場合にも見られる傾向である。

主格に於けるが如く、連體格に於ても、「の」と「が」との待遇上の相違はあつたのである。顯昭の古今集註卷四「萩が花散るらん小野の」の歌の條に、

ハギガハナハ萩ノ花也、ノトイフ言葉ヲガトヨメルコトアリ。

とて、類例を多數に列擧し、「アシノチルヲアシガチル」とよめる主格の場合をも一緒にして、

コレラ大旨ハケタムコトバナリ、シヅガナドハサグルコトバトオボヘタリ。

と言つてゐる。ロドリゲスの記述も亦室町末期に至るまで、かゝる識別の存したことを物語つてゐる。即ち、大文典(一丁裏三八丁裏)には、「の」は對者や尊ぶべき第三者につけ、「が」は自己や卑しむべき第三者につけ、又は對者を輕蔑する時につけるといひ、小文典(一三丁表)には、「の」はすべての人稱にわたり、「が」は身分の低い者か自稱につけると述べてゐる。延慶本平家物語の用例を見れば、自稱の代名詞はすべて「が」をとつて居り、對稱の代名詞に於てもロドリゲスの言ふが如き傾向を認め得る。例へば、

且ハ御邊ノ御心ニモ御推察候ヘ(二本)

不日汝ガ首ヲ刎ベケレドモ今度バカリハ宥ラルヽゾ(三本)

【補格】 他動詞の目的語を示すのに「を」「をば」を以てするのが普通であるが、「を」で動作の行はれる場所又は出發點を表すことも多かつた。さうして次の如き言ひ方も、室町末期の口語に行はれてゐた(大文典九七丁裏)。

この人をば家・町・國・知行・處をはらうた。　惡黨共を守護人より町をはらはれた。

頼朝おとなしやかに仰せらるゝやうは、定めて首をば小路を渡されうず(伊吹の舞)

通過する場所を示すのに、「を」の代りに、「より」「から」も用ゐた。

川をばどこからお渡りあつたか。　川を橋より渡つた。　川を橋から渡つた。
川を舟より渡つた。　川を舟から渡つた。　陸を歩うで參つた。　陸から參つた。

其の他にも色々な言ひ方があつた。

川を舟にて渡つた。　川を舟で渡つた。　徒歩から參つた。　かちで參つた。
徒歩路で參つた。　船路から參つた。　舟を乗つて參つた。　舟に乗つて參つた。

かく、「を」の代りに「より」「から」を用ゐるのは本來の正しい言ひ方でないと、ロドリゲスは言つてゐる(大文典一〇九丁表―裏)。然し、かゝる「より」「から」の用例は上古にあり、中古に主として「より」を用ゐたのであつて、近古にもなほその名殘を留めてゐたのであると觀るべきである。「より」よりも「から」を多く用ゐてゐるのは、「から」が優勢となつたが爲である。

「で」を「にて」と同じく用ゐるやうになつたのは、寛元四(一二四六)年書寫の法華經品釋に、

此條目出事デハ候ヘドモ自餘ノ佛土モ大旨ハカウコソハ說事デ候ヘ

とあるのなどによつて、鎌倉時代からである事を、山田博士は確められた(平家物語の語法、下二〇二八頁以下)。室町時代には、「を以て」といふ漢文の訓讀から出た言ひ方を「にて」「で」の代りに用ゐて、「これを以て御分別なされい」「御分別を以て定めさせられい」などと言つた。百二十句本平家物語(七)に「さしもふかきたに一つ平家のせい七まんよきにてぞむづみける」とあるのを、天草本では、

さしも深かつた谷一つを平家の人數七萬餘りを以て埋上げまらしたれば(三)

としてゐる例もある。

「に」は動作の歸着點を表し、「へ」は動作の方向を示して、互に區別せられたのであるが、「へ」が次第に「に」の地位をも侵すに至つた。既に延慶本平家物語に次の如き例が見られる。

河へ打入ル、事ハ畠山一番也、向ノ岸へ着事ハ武藏國ノ住人大楠彦次郎季次マ先也トゾ名乘ケル(五本)

君ノ西八條へ召籠ラレサセ給シ後ハ(五本)

更に對手を示す場合に用ゐた例もある。

此次第ヲ鎌倉殿へ申サデハイカニトテ使ヲ忩マヒラセケリ(六本)

降つて室町時代に至ると、動作の行はれる方向のみならず、歸着點や對者をも「へ」によつて表すやうになつた。尤も、それは京の事であつて、九州では却て方向を示すのに「に」を用ゐた。また關東では「さ」をもつて方向を示したので、「京へ筑紫に關東(又は坂東)さ」といふ諺が出來てゐた。三條西實隆は、その日記實隆公記明應五(一四九六)年正月九日の條に、宗祇の談として「京ニツクシヘ坂東サ」と錄し、次の如く說明を加へてゐる。

京ニハイヅクニユクナド云筑紫ニハイヅクヘユクト云坂東ニハイヅクサユクト云

京と筑紫とが他の所傳と相反してゐるのは思ひ違ひしたのであらう。ロドリゲスは大文典に二度この諺を引用してやや委しい解釋を施してゐる(一一〇丁表一七〇丁表)。それによれば、京では「へ」の外に「のかたへ」「の方へ」を使ひ、九州でも「のかたへ」「のはうへ」をも用ゐたが、その外に「の樣に」「の如く」「さま」(又は「さまへ」)「さな」を用ゐたの

である。「さな」は「さま」の音變化と解せられ、今日の九州方言に「さん」「さ」となつてゐる。關東の「さ」も亦「さま」の變化したものであらう。ロドリゲスは、また、「のやうに」「の如く」を、ある地方では「へ」の代りに用ゐて、「都のやうに上る」「關東の如く下る」などゝ言ふが、粗野な低級な言葉遣であると言つてゐる（大文典一二三丁裏）。天草本伊曾保物語に

あまたの廻船が東から西にゆくもあり、鷗の砂に印を刻むもあり。

とある初の「に」は筑紫言葉と見られる。コリャド編拉文日本文典（五八頁）に、九州方言とは明記しないで、或る者は「都のより上る」「都さな上る」「都の如く上る」ともいふが、よい言葉遣ではないと註してゐる。同文典の西文寫本（一三一頁）には、「都の如く」と並べて「都のやうに」をあげてゐるので、版本の「都のより」は「都のやうに」を誤つたものであらう。標準語的言ひ方も、寫本には、「都へ上る」「都を指いて上る」「都へ向けて上る」とあるのに、版本には「都にさいて參ろ」「都に向けて參ろ」とある。版本の如くば、寧ろ九州方言と見るべきである。

後ニハ富貴ニナラウ云テ（四河入海、九ノ三）　遠國デハ勝タウゾ思ヘドモ（史記抄、十二）

の如く、今日「安藝のとぬけ」といふ言葉によつて知られてゐる「と」を脫する言ひ方も抄物にある。

目的語を示す「を」が上に來る語の末音と融合する例も室町時代にあらはれてゐる。

所領ウ取ラセテブゲンシャニナサレイ（蒙求抄、三）　天子ニモノウ申ス時ニ（勅規桃源抄、一）

【呼格】　呼格は主として對稱の代名詞又は人を示す名詞を以て形作るのであるが、單獨にそれらの語のみである場合の外に、下に感動助詞を伴ひ、上に感動詞を置くこともある。下につける感動助詞は「や」「よ」の類で、時代的變遷

は殆どない。上に置く感動詞には次の如きものを用ゐた。

ヤヲノレラ、只今チト忍デアルカバヤト思ゾ（延慶本平家、三末）

ヤヽ平家ノ公達、聞給ヘ（同前、二中）

ロドリゲスは

ヤアかた〳〵、召しもないに推參して、武藏め怨むなというて（昌俊の舞）

などの「ヤア」を yá と寫してゐるので、長く延ばして發音してゐたことが知られる。又、天草版拉丁文典を始め、ロドリゲスやコリャドの文典また日葡辭書等は、「いかに」を呼格を構成する助辭として取扱つてゐる。即ち、「いかに」は、近古に最も普通に用ゐられた呼掛の語であつたのである。その外には、「なう」「なう〳〵」「まうし」「物申さう」「ものまう」「きかせらるゝか」等を用ゐた（大文典一三九丁裏）。

形容詞

【活用形】 1（終止形） 近古には、志久活用の終止形を、他の活用形が語幹に「し」を含んでゐるのに類推して、「しゝ」とすることがあつた。

秋ふかみ夜風はげしゝむべしこそよもの里人衣うつなれ（永長二、一〇九七年東塔東谷歌合）

君ノ顏色アシヽ、ヲソラクハ鬼神ノ爲ニヲカサレタル歟（續古事談、五）

見苦シヽ、トク〳〵罷出ヨト云（延慶本平家、一本）

それも戀しく又これもいとほしゝ（謠曲、唐船）

泣くはわれなみだのぬしはかなしゝぞ（閑吟集）

世間の聞えも恐ろしゝとあつて、急ぎ高雄へ送り奉られた。（天草本平家、四）

院政鎌倉時代には未だ多いとは言へないが、室町時代になると、各方面の文獻にその例を見出し得る。然しなほ「し」に終るものゝ方が多いやうである。近世に入ると、文語として「しゝ」を用ゐ、口語では特殊な場合に限られた。

連體形の「き」「しき」が音便によつて「い」「しい」となつたのは、中古に始まるが、この形が終止形に及んだのは遙かに後れたのであつて、鎌倉時代に於ける確實な用例はないやうである。室町時代に入ると、急に發展したものと見えて、抄物類では、連體形終止形何れも「い」「しい」となつて、こゝに兩活用形の形態上の區別が失はれた。

2（連用形）　連用形の「く」「しく」は、中古以來音便によつて「う」「しう」ともなつたが、近古にも、抄物では「く」「しく」と同等の勢力を持つてゐたらしく、用例が相半ばしてゐる（室町時代の言語研究一一二頁）。降つてこの時代の末に出た吉利支丹物では、助詞「て」に續くにも、中止するにも、修飾語となるにも、多くは音便形により長音となつてゐて、「く」の用例は甚しくその數を減じてゐる。卽ち連用形としてはオ段又はウ段の長音が本位となつてゐたのである。然しこれは近畿以西に於ける用法であつて、東部に於ては「く」を用ゐてゐた。これが當時にあつても著しい方言的特徴をなしてゐた事は、今日と同じい（大文典一七〇丁裏）。さうして、今日の東京語では、「ござる」に連る時にだけは「う」となるのであつて、室町末期にも、近畿語で「ござる」に續く際には「う」のみを用ゐてゐた事が、天草本平家物語の用例からは言へるやうである（天草本平家物語の語法二三頁）。然し、當時の關東方言では、この場合にも「く」をとつてゐたものらしい。ロドリゲスは關東に於ける普通の口語の用例として、「短くなす」「長く語る」「堅く言ひ渡す」を擧げ、それに續いて、「したくござる。（卽ち）したうござる」とやうに、都の言葉を以てわざ〳〵註釋を加へてゐるの

である(大文典一八九丁表)。

「よつぴいてひやうと放つ」といふが如き言ひ方は、鎌倉時代の軍記物に多いが、「能く」がこれとやゝ似た音變化をとる事は、室町時代にもあつたのであつて、抄物に次の如き例がある。

是ヲヨツヨムカヲ(顔)ヲ薦紳ト讀デハクセ事ゾ(史記抄、八)　文章ハヨツ似セヨセタゾ(同前、十六)

杜子美ガヨツ云カホデ(四河入海、七ノ二)

破障音や摩擦音に接續してゐるのでないから、普通の促音ではない。入聲音の如き特殊の發音をしたのでもあらうか。

【形容動詞】　所謂「なり」活用の連體形「なる」を「な」とした例は近古の初から見えてゐる。

しなだまもなかしなまひもまてしばしこまもひまなしかなもまたなし(藤原隆信朝臣集)

ふたつもじ牛のつのもじすぐなもじゆがみもじとぞ君はおぼゆる(徒然草)

鎌倉時代にはまだ「なる」が普通であつて、「な」の用例は稀であるが、室町時代からは、「な」が勢力を増して「なる」に代るに至つた。終止形の「なり」も室町時代から「な」となつた。例へば、

清淨ナト云フ名ヲ取タゾ(蒙求抄、六)

定めて樣をかへ形をやつさうずるもふびんな、又いとけない者共が歎かうずる事もむざんな。(天草本平家、四)

所謂「かり」活用も近古に用ゐられたが、普通に終止した終止形は殆ど見られない。未然形・連用形・連體形の用例が多い。室町時代に、連用形を「官次ガイヤシカリタゾ」(蒙求抄、七)としたのは例外であつて、大抵促音便をとるのである。それにしても、「て」に續くことは甚だ珍しい。抄物にはなほ次の如き例がある。

毘陵ニ隱居シテ家貧カッテイクラノ辛苦ヲシテ有タレドモ（三體詩絶句抄、五）

酢ヤ醢ナンドノ如キモノモ盡テナカッテアッシゾ（四河入海、二十ノ四）

所謂「たり」活用は、室町時代に文語的のものには用ゐられたけれども、口語ではその勢力を失つた。天草本平家物語を見れば、「何たる宿業か」など、そのまゝ用ゐたものもあるが、その他の場合は、多く次のやうに改めてゐる。

きたにはせいさんがゞとしてまつふく風もさく〳〵たりみなみはさうかいまん〳〵としてきしうつなみもはう〳〵たり（百二十句本、十）

北には青山峨々として、松吹く風も颯々とし、南は蒼海が漫々として、岸を打つ波も茫々とあつた。（天草、本四）

動　詞

【活用形】 1（終止形） 動詞の終止形も連體形と同じ形をとるやうになつた。中古の物語には、會話の終を連體形で結んで餘情を含めた言ひ方をしてゐる例が多く見られるが、地の文に於て係結の關係なく連體形止めにした例は、院政期に入つて現れた。

高サ百丈許ハアラムト見ユル浪立テ來ル（今昔物語集、二十六）

必ズ此ノ狗ノ爲ニ被咋殺ナムトスル（同前）

これは動詞系の活用をなす助動詞に就いても同じである。

姨母ヲ迎ヘ將來タリケル然テ本ノ如クゾ養ケル（今昔物語集、三十）

終止形が連體形に同化されて行くのに、文の終に立つと、助詞「と」「など」に連なると、助動詞に續くとによつて、如何なる遲早があるかは、委しい調査を待たねばならないが、延慶本平家物語にあらはれてゐる所を見ると、「と」

「なむど」に接する場合の例が遙に多く、動詞のみで終止して文を終る場合の例が僅にあり、助動詞に連なる場合の例は一つもないやうである。この事實によつて、ある程度迄は一般の傾向を推測する事が出來るであらう。

助動詞に連なる場合に、連體形の終止形に代ることが遲れてゐたといふことは容易に考へられる。何となれば、特定の助動詞と動詞の終止形との連接關係は容易に動かないものであつて、この場合も、接續關係の動搖によつて、終止形に接續してゐたものが連體形に接續するやうになつたのではなく、連體形が終止形の位置を奪ふやうになつた活用語全般の傾向に從つたものであるからである。從つて、連體形が終止形を全く同化してしまつた室町時代に於ても、たゞ助動詞につゞく時には、往々もとの終止形が保存されることがあつた。

2〔連用形〕　中古に於て、主として四段活用動詞の連用形にあらはれた音便現象は、近古に至つてその傾向を一層強め、近世に入ればまた次第に衰退に向つた。

イ音便。中古に於けるイ音便はカ行サ行に早くあらはれ、近古に入つても、この兩行のイ音便が最も勢力を得た。ガ行のイ音便は、中古にも存したが、極めて稀であつて、鎌倉時代にも尙多くはない。室町時代になつて、カ行サ行及びガ行の四段活用動詞の連用形は、話言葉に於て、「い」の語尾をとるのが本體となつた。さうして、それは多く「て」「た」に接續する場合の事であるが、その他にも、「搔き」「突き」等が接頭辭的に動詞と複合する場合に「カイ伏シテ」「ツイ立テ」などとなる例は平家物語等に見え、「橋ハヒイツ」「ヌイヅキツ」「サイツサ、レツ」など、「つ」に接する時や、「ナ泣イソ」「ナ驚カイソ」などの場合にも音便形をとる言ひ方が抄物や吉利支丹物にある。サ行の連用形は、その後また原形に復し、イ音便をとるのは一部の方言に止まるやうになつた。

撥音便。撥音便は中古の文學語には見られないで、民謠や漢籍の訓讀等の中にその用例を拾ひ得るのであるが、近古に入つては、文學的作品にも普通に用ゐられるに至つた。この音便はマ行四段活用の連用形「ミ」が母音を失つて獨立の鼻音となる場合に早くあらはれたものゝ如く、今昔物語集には、「悲ンデ」「惜ムデ」「恡ムデ」などの例はあるが、バ行の撥音便の例は見られないやうである。尤も、三善爲康が天仁二(一一〇九)年に撰した童蒙頌韻(慶長四年板)には、「ノンデ」「フンデ」「クンデ」等と共に、「トンデ」「ヨンデ」「アソンデ」等の訓が出てゐる。鎌倉時代からは何れも同樣に撥音便をとつたが、室町時代には撥音便がやゝ衰へて、長音に發音する傾向があつた。然し、同一書に於て同一語を撥音と長音の兩樣に書いた例も少くないのであつて、日葡辭書に、連用形の「た」をとつた形を過去形として標してゐるのにも、必ずしも一定してはゐない。

ナ行變格活用の「死ぬ」「往ぬ」の連用形が撥音便をとるやうになつたのはやゝ後れてゐる。假名論語(元弘三、一三三三年康蓮校)に「死而後已不亦遠乎」(泰伯篇)を、「しんでのちにやむ又とをからずや」としてゐるのなどが古い例であつて、室町時代から多くなり、日葡辭書では、「シンダ」「インダ」の形を過去形に擧げてゐる。

ウ音便。ハ行四段活用動詞の連用形は、中古以來ウ音便をとつたが、近古に長音となつた。さうして、連用形の原形が「習ひ」の如くaiに終るものは開音のオ段長音となり、「思ひ」の如くoiに終るものは合音のオ段長音となり、「狂ひ」の如くuiに終るものはウ段長音となつた。連用形が「て」「た」に續く場合のみでなく、終止形連體形に於ても、かかる長音に發音してゐたのである。マ行バ行四段活用動詞の連用形が、撥音便から長音に變じたものはオ段の合音に屬する。永萬元(一一六五)年點香藥鈔に「呼」を「ヨフテ」と訓じたのや、梁塵秘抄に「好み給ふ」を「このうたう」と書い

であるのなどは、長音を寫したものか否か明瞭でない。所謂ウ音便が一般に長音となつた正確な時期は分らないが、大體室町時代の初であらう。

促音便。ハ行及びラ行四段活用動詞の音便形が東西兩方言で相違してゐるといふ事實は、既に室町時代或は更に溯つた時代から存する所である。即ち、ロドリゲス大文典方言の章に、「拂ふ」「買ふ」等を、都では farŏte 又は faraite cŏte といふのに對して、關東では faratte, catte といひ、「張る」「借る」を、都では fatte, catte といふのに對して、關東では farite, carite と言ふと說いてゐる（一七〇丁裏）。抄物にも、「借ツタ」はあるが「買ツタ」は見當らない。ロドリゲスは「拂ツテ」「買ツテ」の如き「ヒ」の促音便を文語の言ひ方と呼んでゐるのであるが、これは鎌倉時代にも京都語には多くあらはれなかつたやうである。延慶本平家物語にも、「追ヒ」を接頭辭的に用ゐた「オツスガヒ」「オツツメテ」の外には見出されない。從つて、室町時代の文語にあつても、ハ行の促音便は普通ではなかつた。戰記物以下に多いのはタ行ラ行の促音便である。

3〔命令形〕 室町時代に、四段ナ變ラ變以外の活用に屬する動詞の命令形が、「よ」の語尾の外に「い」をもとるやうになつた。然しながら、それは下二段カ變サ變の動詞に限つてゐて、上下一段と上二段の動詞が「い」の語尾をとつた例は見られないやうである（室町時代の言語研究七六頁、天草本平家物語の語法一一頁）。ロドリゲスの文典では、下二段活用を以て第一種活用とし、その命令形は「擧げよ」「擧げい」の如く、「よ」と共に「い」もとることを明かにしてゐる（大文典一三丁表、小文典一九丁裏―二〇丁表）。上下一段と上二段も亦この第一種活用に入れてゐるが、その命令形は「浴びよ」「延びよ」「落ちよ」「恥ぢよ」「强ひよ」「着よ」「居よ」の形を擧げて、「い」をとる言ひ方をば出してゐない（小文

典二二丁裏—二三丁表)。又、一五九四(文祿三)年天草版拉丁文典に於て拉丁動詞の活用に日本語をあてはめた所を見るに、Doce に voxiyei(敎えい)としながら(三〇丁表)、Es には iyo(居よ)としてゐる(一三丁表)。卽ち、「い」の語尾をとつたのは、下二段カ變サ變だけであつて、その外には未だ及んでゐなかつたものゝやうである。

孟子抄(二)に「呉れい」を「クレヘ」と書いた例がある。今日の方言では廣く行はれてゐるけれども、室町末期に至る迄には一般に認められた言ひ方ではなかつた。又、同じく孟子抄(一)に、「死ニ殉ヘイト遺言シタ」と四段活用動詞に「い」を添へたものがある。恐らく、下二段活用他動詞の「從ふ」への類推違であらう。後に述べるやうに、四段活用に「い」を加へて命令の意を示す事もあつたが、その場合には未然形に添へて「殉ハイ」となるべきであり、且又かゝる言ひ方は對手に向つて直接言ふ時に限られてゐた。

東國に於ては、上古以來「ろ」を用ゐてゐた。文永弘安(一二六四—一二八七)頃の著と言はれる塵嚢(十)にも「阪東ノ人ノコトバノスヱニロノ字ヲツクル事アリ、ナニセロカセロト云フ」と述べてゐる。天正日記には、「肴クレロト申シ遣ハス」「メシツレクレロト申テ」などの用例がある。ロドリゲスは、東國方言の「ろ」には言及してゐないが、肥前肥後筑前で「見ろ」「せろ」「擧げろ」「着ろ」「浴びろ」などと「ろ」を使ふことを指摘してゐる(大文典一七〇丁表)。今日でも、九州のこの地域には殘つてゐる言ひ方である。近古に、東國と九州とに同じやうな古い言ひ方が存してゐたといふ事に就いては、上古の名殘が邊地に見られるのであるとする所謂方言周圏論からの觀察も加へられるであらう。新村博士は、寧ろ東國方言が九州に傳へられたのであつて、その經路として、防人に東國人を置いたのを初め、鎌倉時代にも東國の豪族を鎭西の守護に任じた事などを數へてゐられる(「東國方言沿革考」東方言語史叢考三一三頁以下)。

【活用の變化】 連體形が終止形を同化した結果として、ラ行變格活用は四段活用に攝せられ、カ變サ變は文語とは異なつた變格活用をとるやうになつた。その外の注意すべき活用の變化に就いて次に述べよう。

1〔二段活用の一段化〕 二段活用の一段活用に變化した新語形は院政期以後の諸文獻に求めることが出來る。「かき寄せる筆」(梁塵秘抄)・「見えるか」(木工權頭爲忠朝臣家百首)、「隔てる心」(建仁三年仙洞五十首)、「さびる浦」(山家集)など、歌謠は勿論、和歌の中にも用ゐ、辭書類にも載錄されてゐる。例へば、「更」「渝」を「カヘル」とよんだ例は、類聚名義抄を始として伊呂波字類抄・字鏡集・節用集・運歩色葉集に見られる。辭書に於ても、この一語に限るのではないし、和歌にも用ゐられてゐるのであるから、二段活用の一段化は可なりに行はれてゐた事が想像せられる。

然しながら、標準語としては、室町時代の末に至るまで、二段活用が守られてゐた。たゞ室町時代の二段活用は終止形が連體形と同形である點が文語と異なる。ロドリゲスの文典は當時の標準語に於ける口語法を說いたのであるから、一段活用を殆ど認めてゐない。さうして、下二段活用を下一段活用に、「あげる」「求める」「はねる」「屆ける」「與へる」「まぜる」「見せる」「へる」など言ふことは、關東地方に普通であつて、京都でも一部の人々が口にするけれども、一般には稀にしか使はず(大文典六丁裏)、また上二段活用を上一段活用に「浴びる」「强ひる」などとも言ふが、用ゐられることが少い(小文典二三丁表)と、簡單に觸れてゐるに過ぎない。

標準語の中に最も早くその地位を占めたのは「へる」(經・綜)である。ロドリゲスの文典でも「へる」のみは「ふる」と共に擧げて居り(大文典一〇二丁裏、小文典一九丁裏)、日葡辭書にも「ふる」「へる」を並べて標出し、吉利支丹本も原則として標準語を用ゐながら、口語本は勿論のこと、文語本にさへ「へる」が散見してゐる。口語法別記(三四頁)によれ

ば、既に藤原清輔の和歌初學抄に「糸へる」とした例がある。二段活用の一段化は、下二段活用の「ふる」が「へる」となつたのなどが、その魁をなすのでもあらう。

かゝる變化は、關東方言に早く現れたのであつて、室町末期に至ると、關東では一段活用によるのが普通となつてゐた（小文典二〇丁裏）。天正十八（一五九〇）年の天正日記や降つて元和八（一六二二）年の三河物語など東國方言を含む資料に、一段活用の例が多いのも斯の事實を反映してゐるのである（國語史上の一劃期二六頁）。

2（ア行ハ行ワ行二段活用の變動）「心得る」「教へる」「植ゑる」など、ア行ハ行ワ行の下二段活用が一段活用となつたものは、今日の標準語で發音上皆ア行に屬する。然し九州地方ではこれらを「心ゆる」「教ゆる」「植ゆる」とヤ行下二段に活用させてゐる。かゝる九州方言こそ室町時代の言ひ方を傳へたものである。

かゝる活用の語尾を吉利支丹の羅馬字で寫したものでは、yo, yuru と書いてゐるので、その發音が明確であるが、假名書きでは寫し方が、一定してゐない。音訓の發音を嚴密に區別して排列してゐる落葉集も、附屬的に加へられた音訓の假名遣に至ると、完全に統一せられてゐるとも言へないところがあつて、「餓」「飢」に「うゆる」と書きながら、「植」に「うふる」、「種」に「うゆる」と訓じてゐる。又「斷」に「たふる」、「懺」に「くふる」とした例もあるので、かゝる「ふ」はユと讀むべきであらう。

然し、すべての場合に「ユル」とのみ讀むべきであるとは斷言出來ない。ロドリゲスによれば、ア段の音節に續くものは、オ段の長音にも發音することがあつたのである。例へば、atŏru（與ふる） totonŏru（整ふる） sonŏru（備ふる） vttŏru（訴ふる） cuvŏru（加ふる） corŏru（怺ふる）など、主としてハ行下二段活用に屬するものであるが、その外にも

「あらゆる」を arŏru といひ、「聞ゆる」の如くオ段の音節に續くものも quicŏru といつた。かくして、ハ行下二段活用の終止形は四つあつた。卽ち atŏ, atŏru, atayuru, atayeru (與ふ・與ふる・與ゆる・與へる)と、四通りの言ひ方が行はれてゐたのであるが、長音に發音するのは、特殊な場合であつて、格言等の文語や重々しい言葉遣にのみ限られてゐた(大文典七丁表、小文典二一丁表)。從つて、ハ行下二段活用の動詞の語尾を「フル」「ウル」など書いたものは、長音を寫してゐるかも知れないが、その他の下二段活用の動詞に於ては、大抵は「ユル」とよんでよいであらう。

抄物でも、多くは「ユル」と書いてあるが、また「ウル」或は「フル」としたものもある。論語抄に、「ヲシユ」(敎)とも「ヲシウ」ともあり、四河入海に「カズユル」とも「カズウル」ともあり、中華若木詩抄に「ウユル」とも「種フル」ともあるなど、同一語を同一書で色々に書いてゐる。その用例を統計的に見るならば、元來「フル」「ウル」とあるべき語尾を「ユル」としたものが遙に多いのである(室町時代の言語研究六二頁)。故に、抄物に於ても、大體は「ユル」の發音を寫してゐると觀て大過ないであらう。

然し、ア行ワ行は本よりのこと、ハ行の「ふ」「ふる」も、鎌倉時代には「ウ」「ウル」と發音してゐたのである。その時には、ヤ行の「ゆ」「ゆる」まで「ウ」「ウル」と發音することもあつたやうである。

彼等は野子のほうるなり日蓮が一門は師子の吼なり(日蓮、聖人御難事)

東大寺興福寺を燒し清盛入道は現身に其身もうる病をうけにき(日蓮、神國王書)

平家ヨモスガラ山ヲコウルト承ル(延慶本平家、三末)

コノ兒ハキヨクサカフル事モコソアレ(同、三本)

かくの如く鎌倉時代の終り頃には「ウル」が最も優勢であつたのに、室町時代になつて、一部には長音化するものもあつたが、全體としては「ユル」によつて統一せられたのである。それは室町時代に、ア行の「心え」、ハ行の「教へ」、ワ行の「植ゑ」を何れもヤ行の「見え」などゝ同じく、その語尾をyeと發音してゐたので、未然形或は命令形殊に連用形がyeである類推から、終止形連體形もヤ行音に「ユ」と發音するに至つたのであらうと、橋本進吉教授から承つた。兎に角、ハ行下二段活用などが「ユル」の語尾をとるやうになると、上二段上一段のものまでこの傾向に從ふことがあつたのである。ロドリゲスの小文典の上二段及び上一段活用を示した條に、「强ユル」「用ユル」の形を擧げ、「强イル」「用イル」は稀に言ふと註してゐる(三三丁表)。尤も、日葡辭書には、これらの語を Xij, iru, ita. Mochij, iru, ita とのみ標出してゐる。

用言の法

【敬譲法】　1〔形容詞の敬語法〕　尊敬の意を示す接頭辭「御」はもと名詞にのみ冠したのであるが、近古から形容詞にもつけた例がある。然し初は如何なる形容詞にも接續するといふのではなく、中古の用法と同じく、名詞と複合したものに於て、その名詞に直接してゐるのである。延慶本平家物語の例を見るに、多くは「心」と複合したものであつて、「御心苦ク」「御心スゴク」「御心ツヨク」「御心許ナク」「御心弱ク」などがあり、その他にも「御後クラク」「御人ワロク」などゝ用ゐたものがある。これらに就いて山田博士は次のやうに説明してゐられる。卽ち、「御心」「御後」等と形容詞との合成語として成立したものが、「心苦シ」「後クラシ」などいふ名詞を戴いた形容詞に、その名詞にのみかゝる精神で「御」を冠するやうになつたのであつて、その時期は延慶本平家物語の頃であらう。更に轉じて、「御」が如何なる形容詞にも接するに至つたのであつて、それを式に示すと次の樣になる。

（御＋名詞）＋形容詞＝御＋（名詞＋形容詞）＝御＋形容詞

その第二の形式と見得る明かな例は

冷泉院ノ御物狂ハシクマシマシ花山ノ法皇ノ御位ヲサラセ給ヒ三條院ノ御目ノクラクオハシマシ、モ之方民部卿ノ怨靈ノ祟リトコソ承レ（一末）

である。この場合には、單に「物」にだけ「御」が冠せられてゐるとは考へられないからである。且又、「御」を伴つた形容詞は悉く連用形のみしか用ゐられてゐないのであつて、この點からも、「御」は形式上名詞に接續しながら、意義上ではその勢力を隱然下の述語にも及ぼしてゐると認むべきであるといふのである（平家物語の語法、下二〇一八―九頁）。

延慶本平家物語には、山田博士の所謂第三の形式即ち形容詞に直に「御」を冠したものは見られないが、その後の諸本になると、それが現れてゐる。例へば、二代后の條「思ひきや」の歌の前文が、延慶本には、

先帝ノ昔ノ御面影思召出サセ給テ御心所セキヲカクゾ思食ツヾケサセ給ケル

とある所が、後のものには次のやうになつてゐる。

先帝の昔もや御戀しくおぼし召されけん（覺一本別本）

さすが先帝の御面影御戀しうやおもひまゐらつさせ給ひけむかうぞ遊ばされける（八坂本）

室町時代にはこゝまで進んでゐた。然し、「お懷しう存ずる」「おゆかしう存ずる」「おん嬉しく存じそろ」などと用ゐたものは、室町末期に於ても、正しい用法とは考られてゐなかつた（大文典一五九丁裏）。

2（動詞助動詞の敬語法） 動詞の「なる」「あり」を用ゐて、尊敬をあらはす方法が、近古には盛に行はれた。「なる」

「あり」そのものには尊敬の意を含んでゐないけれども、これが動作を意味する漢語の名詞か用言の連用形かを承けることによつて敬意を表すのである。「御寝モ打解ケナラザリシカバ」（延慶本平家、二本）「御出家ナドヤ有ラムズラム」（同、一本）の如く、名詞との間に他の語を挿むこともあり、上に敬語の接頭辭を冠することもある。室町時代になると、他の語の挿入することは殆どない。敬語の接頭辭は、固有語には「お」「おん」、漢語には「ご」「ぎよ」をつけるのに、「ご用ゐあるまじい」（天草本平家、四）「ご許されあれかし」（同前）の如く、固有語にも「ご」をつけた例が室町末期にある。敬語の接頭辭をとつたものはそれだけ敬語が高いのであるが、室町末期に於けるその使ひ分けを、ロドリゲスは次のやうに述べてゐる。「お」を伴つたものは、同輩と面談し又は多少目下に當る者と話す時とか或はその場にゐない目上の者に就いて話す時とかに使ひ、「お」を伴はないものは、主人が敬意を持つてゐる召使に對するとか親が成人した子供に對するとか全く未知の人に對するとかした場合等に使つた（大文典一六二丁表）。

「なる」よりも「あり」を用ゐる方が多いのであつて、その「あり」「ある」は、室町時代に、先行の音と融合して拗音となり、或は融合しないで「やる」と發音したやうである。吉利支丹本に於ても、その發音をそのまゝ書き寫したものは少いが、天草本伊曾保物語には vocacuxare（お隠しやれ） vosoyeyaranu（お添へやらぬ）等と書いてゐる。和泉流狂言稽古本にも、

　酒なお飲みやらうとまたお飲みやゐまいとそなたの勝手にめされ」お尋ねあれ」お待ちやれ」お歸りやれ（以上、萱聟）

など、拗音に發音すべきことを示してゐる。

二つの動詞の熟合したものに接する場合には、天草本平家物語に、「思ひおいりあつた」「をめきお叫びある」などと

「お」を中間に入れた例が見えてゐる。これらは文語の原文に「思ひ入れ給ふ」「をめき叫び給ふ」とあるものである。

鎌倉時代には「御幸をなし奉る」といふやうに、動詞「なす」も用ゐてゐたが、室町時代には、「なす」に敬語の助動詞を加へた「なさるゝ」を用ゐて、「おひんなされい」「おん計らひなされい」「御見物なさるゝ」「御元服なされた」といひ、口語に於ては甚だ高い敬意を示した（大文典一六三丁表）。

「候」も亦「ある」などの代りに用ゐられてゐる。

大將軍ニ中候御後ヲ御覽候ヘ今ハナニヲ御戰候ヤラムト申タリケレバ（延慶本平家、五本）

身ガ弟子デサフモノヲ將ニ御ナシサフヘ（史記抄、十二）

この場合には、上に「御」を冠するのが常であり、「候」自身が丁寧の意を示してゐるから、「ある」などを用ゐたよりも一層鄭重な言ひ方であつたらうと思はれる。

これらの言ひ方に於て、「ある」「なる」等はもと動詞であつて、その上に來る動詞の連用形は體言の性質を有するのであるが、室町時代には、その兩者の間に他の語の介入を許さず、相接續した全體が述語をなしてゐるので、湯澤氏は、「敬意を表すべき者の動作を云ふ動詞の連用形につけて用いる助動詞」と見られた（室町時代の言語研究一三六—七頁）。「候」が「ある」「なる」等と同様に用ゐられてゐることも、かゝる見解を助けるものであらう。

3（敬譲の動詞助動詞）　「**あそばす**」「**めす**」「**きこしめす**」　前代以來敬語として用ゐられたこれらの語は、近古にも略同様の意義用法を持つてゐた。「めす」は室町時代にも「何事を召すぞ」「茶をめす」「小袖を召す」「舟にめす」など色々な動作に用ゐたが、又敬語助動詞を伴つた「めさるゝ」を一語の如くに使ふことが多かつた。例へば、

小宮ヲモ大宮ヲモ一體ニメサレテ隔ヲバシメサル丶ナ我ガ耳目ノ如ニメサレヨ（古文眞寶抄、八）

「きこしめす」も飲食することなどに言ひ、同意義で「こしめす」とも言つたが、たゞ「きこしめす」に比べると敬意が薄い（大文典一六五丁表）。日葡辭書にも「こしめす」の語を錄してかゝる解釋を施してゐるが、例文は擧げてない。

「おはす」「わす」　「おはす」は居る・來る・往くなどの意味を持つた敬語であつて、中古以來大體に於てサ行變格に活用した。元來サ行變格活用はサ行四段活用とサ行下二段活用との中間にあつてその何れとも關聯してゐる。「おはす」もサ行變格活用に屬しながら、多少動搖し、時には四段活用にひかれ、時には下二段活用にひかれる事があつて、近古には四段活用への類推が往々にして現れてゐる。例へば、延慶本平家物語にも、未然形に「御サズ」（三本）、連用形に「ヲワシ、手合ニ」（六本）、連體形に「思ヲハス事有テ」（二中）などの用例が見られる。かく、四段活用への類推が著しくなつたのは、「おはす」と同語源であつて意義用法も亦これと等しい「おはします」が、四段活用であつたからであらう。室町時代の口語には「おはす」を用ゐなくなつた。故に天草本平家物語では、原文に「おはす」とあるのを「ござる」「まゐる」その他の敬語で言ひかへてゐる。

「わす」は鎌倉時代に「おはす」の上略によつて出來た語であるが、平家物語では、特に木曾育ちの義仲が田舍言葉を寫すのに使つてゐる。室町時代には、この語を下二段活用に用ゐたらしく、連用形に「ワセタ時」（蒙求抄、四）とやうに言つてゐる。さうして、來るといふ意に限定され、餘り身分の高くない中位の者に對して用ゐた（大文典一六四丁裏）。

「候ふ」「そろ」「さう」　「候ふ」は本來目上の人の許に伺候することを意味する語であるが、轉じて謙語となり、更に丁寧語の動詞として又助動詞として用ゐられた。助動詞の「候ふ」は「侍り」に代つて勢力を増して行き、近古の口語で

は次第に「候ふ」が專用せられるに至つた。その經路を詳述せられた吉澤義則博士の「語脈より觀たる日本文學」（新潮社版日本文學講座及び國語說鈴所收）に引用してある西光消息を見ると、

又おぼしめしはからふ事や候とてきかせまいらせ候に候かされていそぎおほせたぶべく候又まいり候ひて申候べく候。

の如く、消息文では「候」を盛に用ゐてゐる。かくして、貴嶺問答に「候字事。此字多者劣事云々」と注意するまでになつた。鎌倉時代にこの語を如何に發音してゐたかは明かでない。延慶本平家物語には「サフラウ」といふ假名書きもあるが、多くは漢字で「候」とのみ書いてある。塵嚢（十）に「候ノ字ヲサブラフト讀ム」と註してゐるのも、原義に於ける讀方を示したものであつて、助動詞の場合にもかくのみ發音すべきであると言ふのではない。

幸若舞や謠曲の會話の中には「候」を用ゐてゐるが、室町末期になると、既に一般の口語界からは姿を沒した。たゞ老人が尊敬すべき人に使を遣はす時の傳言とか又さういふ人と勿體ぶつて話す時とかに、この語を口にした。然し、それも誰しもが使ふといふのではなく、何處でも聞かれるといふのではなかつた（大文典一六四丁表）。ロドリゲスも、「候」を口語の「でござる」に相當する文語の存在動詞として取扱つてゐる。文語の中でも殊に消息に用ゐ、所謂候文なるものが消息文として固定してしまつたのである。

室町時代には、正しくは sǒrǒ（サウラウ）と發音したやうであるが、多くは soro（ソロ）と短く言つたらしく、ロドリゲスの文典ではこの兩語形を並べ擧げた所が多い。

これらの語が名詞を承けて指定の助動詞となる場合には、「に」「にて」「で」を伴ふのが普通である。かゝる助詞を伴はないで「ざふらふ」 zǒrǒ となることもある。「理りざふらふ」「御奉加どもざふらふや」（八島の舞）などその例で

ある。これは、「サンザフラウ」(世阿彌自筆松浦乃能)の如く、先行の「に」が撥音便となつた影響によつて語頭の「さ」が濁音となつたのを、「にさふらふ」の代りに用ゐるやうになつたものであらう。saburô(サブラウ)も室町末期には女の書き物にだけ用ゐられた(大文典五二丁裏一六四丁表)。

「さう」といふ形も鎌倉時代に出來たらしく、

内府四方ヲ見マハシテイシゲニサウ御氣色共カナトテヘシロセラレケリ(延慶本平家、一末)

などと見え、室町時代にも抄物に多い。「さう」であるからして、「誰カイラシミサゾ」(勅規桃源鈔、二)「今御トヲリサカト云テ」(史記抄、十)の如く、「さ」とのみも言つた。然るに又

ヤアヲウチテソウ者ニツレテ行テソウシ其處ハヨク知テサウト云ゾ(史記抄、八)

など、「そう」とも書かれてゐる。ロドリゲスの文典でも、sǒ と開音にしたものもないではないが、多くの場合、sô と合音にしてゐる。次第に合音に發音するやうになつたのかも知れない。

ロドリゲスは、「さう」「ざふらふ」に語形變化がないと述べてゐる(大文典四六丁表)。抄物に於ける「さう」は命令形が「用心ヲメサレサウヘ」(史記抄、十)の如く「さうへ」となつてゐる。已然形も亦恐らく「さうへ」であつたらうと考へられるが、用例は見當らない。

「御座ある」「ござる」　「おはす」に「御」をあて、「ます」に「座」をあて、從つて「おはします」に「御座」をあてることは古くから行はれてゐた。尤も「御座」の二字は「おはす」とか「おます」とかにもあてたのであつて、必ずしも一定してゐたとは言へないけれども、延慶本平家物語では「御座」を「おはします」にのみ用ゐてゐる(平家物語の語法、上七二六頁)。

同書でその「御座」を音讀した證跡は見られないけれども、その字面によつて音讀し、こゝに「ござ」なる語を生じたのである。

揚御座間幷左右二間御簾（吾妻鏡、四十二）

三ケ日迄なり給はで胸の上に御座有ける嚴重ふしぎなりける事也（古今著聞集、二）

とあるのなどは、「おましのま」「おはしたり」「おはしましたり」などとよんだのではないかとの疑もあるが、室町時代には「御座なくて」（太平記、二）「御座をなされ」（謠曲、大原御幸）などの例があるので、「ござある」といふ言ひ方の出來てゐた事は疑ない。

「ござある」から「ござる」となつたが、抄物では「御座ある」を普通に用ゐ、「ござる」は未だ少い。吉利支丹物になると、殆ど「ござる」のみである。

「御座ある」「ござる」は貴人のおはしますことをいふのから轉じて、「ある」の丁寧語に用ゐ、更に助詞「に」「にて」「で」を伴つたりして、丁寧の助動詞となり、室町末期には盛に用ゐられた。

陛下ハ聖徳御座アッテシカモ漢ノ中興王デ御座アルト云（蒙求抄、四）

ヲソバニ人ガナウテ一人御寢アッテ御座有タ時ゾ（同、五）

上様（かみさま）は棄てさせられてこの分にござると云うたれども（天草本伊曾保）

風は止うでござれども沖は仍强うござらう（天草本平家、四）

ロドリゲスは「これは見事でから眞（しん）にござる」といふ例文を殘してゐる（大文典一四〇丁表）。

打消にラ行四段活用によつて「ござらぬ」といふのは、原義に用ゐた場合のみであつて、その他丁寧語として用ゐた場合には「ござない」或は「ござるまい」である。ロドリゲスの大文典でも、肯定の存在動詞として「でござる」の活用を示し、それに對する否定の活用はたゞ「ない」の語を以てしてゐる(三丁裏以下)。この事實について、春日教授は「これは一般に事物の有無卽ち存在すると否とがアル・ナイで表はされてゐるので、これを丁寧にいふ時に只ゴザを接頭語的にゴザアル・ゴザナイといふのであるが、それを貴人のイマスとイマサヌとには用ひないで、別にゴザル・ゴザラヌといふのである」と說かれた(國語史上の一劃期三五頁)。

「御入りある」「おりやる」 「お入りある」は室町時代の口語に於て、來る意の敬語に用ゐ、更に、有る・居るの意にも用ゐ、語形も變化して「仁愛ノ心ガヲリヤツテ」(蒙求抄、六)の如く「おりやる」となつた。吉利支丹は羅馬字で voriaru と書いてゐるので、ヲリャルと發音したのであらう。ヲリヤルと發音したのであるならば voriyaru と書いた筈である。打消は「おりない」といつた。

ソノ人ハコヽニモヲリナイ程ニ(三體詩絶句鈔、三)

なんぼうぬるい事ではおりないか(天草本平家、三)

「御出である」「おぢやる」 「お出である」も亦「お入りある」と同じ意義用法を以て用ゐられ、「おぢやる」の語形をとるやうになつた。抄物にはまだ新語形を見ない。和泉流狂言稽古本に、

なう／＼栗田口あれへお出(デ)やれ(栗田口)　　あすは早々とりにお出やれ(地藏舞)

とある所等は、狂言記で「おぢやる」となつてゐる。狂言本來の發音は勿論「オデヤレ」であらう。ロドリゲスの文典に

は yogiaru の形を擧げ、「ござる」「おりやる」と共に口語にのみ用ゐられる事を說いてゐる(大文典一六五丁表)。

吉利支丹物にも用例はさして多くはないか、單に敬語としてのみでなく、丁寧語として用ゐ、また「て」「で」を伴つて助動詞ともなつてゐる。

言とふ人もなうておぢやらうずる(天草本平家、一)　辭儀法をも知つたものでおぢやつたか(同、三)

「**おしやる**」　言ふの敬語「おしやる」は室町時代に用ゐられ始めた。

カウ思召テコソヲシヤッツラウト云レタ處デ王ノマヅサウヂヤト云レタ(孟子抄、一)

世間せばい事をおしやるよ(笈探の舞)

狂言記にこの語が多く見えるのは近世に入つたからの言ひ方によつた所が多いであらう。

大言海に「おしやる」を「仰せらるゝ」の約と解したのは從ひ難い。既にロドリゲスも「仰せある」の變化と見て、「おん入りある」より「おりやる」、「おん出である」より「おぢやる」となつたのと共に、中略であると說いてゐる(大文典一六八丁裏)。この解釋は當時日本人の試みた所を承けたものと思はれ、大體當を得てゐるといふべきである。

「**參らす**」「**まらする**」　「參らす」を進上する意の謙語に使つたのは中古に始まり、近古には、その意義にも用ゐ、また動詞の連用形につく助動詞としても用ゐるやうになつた。

マシテカヽル賢主ニ後レマヒラセ御座ス御心中コソ推量マヒラスレ(延慶本平家、三本)

室町時代に降つて、抄物にもかゝる謙讓助動詞の用例を見るのであるが、更に丁寧助動詞として自由に用ゐられた。さうして「まゐらする」は語形が短縮して活用も變化した。抄物には「マイスル」の形も見えるが、多くは「まらする」と

した。「參らす」は下二段活用であつて、「まらする」も抄物では「ナシマラセタ」「殺サセマラセタ」(蒙求抄)の如く連用形が「まらせ」となつてゐるけれども、吉利支丹物では、すべて「まらし」となつてゐてサ變の活用によつてゐる。

鞍馬の坊主共、これはなほ都が近うてわるいというて、奥へ入れまらしたれども、比叡の山からやがてこれなきゝつけて、比叡の山へなしまゐらせた(天草本平家、三)

「まゐらせ」を「まゐらし」とした例さへ見える。

由ない人をこの六七年手馴れまゐらした事よ(天草本平家、二)

ロドリゲスの説明によれば、「まらする」を殊に盛に用ゐたのは京都であつて、目下の者が目上の者に向つて話す時とか、貴人の前で話す時とかには、この語を用ゐた。一層丁寧に言ふのには「御諚の如く申しつけまらしてござる」とやうに「ござる」を添へた。又「まらする」は「ある」「給ふ」以外のすべての動詞助動詞の連用形に接續するのであつて、「上げられまらする」「ござりまらする」などと敬讓語をも承けた(大文典一六三丁表)。

殿上人達が一同にまた忠盛のことを帝王へ訴へられまらした(天草本平家、一)

右の文では、話者の動作者に對する敬語である「られ」に純然たる丁寧語の「まらし」をつゞけたのである。然し、

なんとして君をば捨てまらせられうぞ(天草本平家、四)

となると、「られ」は前文と同じく話者の動作者に對する敬語であるが、「まらせ」は動作者の動作を受ける人に對する謙語である。

「まらする」から「まつす」といふ過程を經て今日の「ます」が出來たのは、近世に入つてから後の事であると言はれて

ゐる(國語史上の一劃期四二頁)。然し、ロドリゲス大文典に「まらする」の用法を説いた條(一六七丁裏)に、

有馬修理申しまするは、先日つた御懇ろの御使かたじけなうござる。

といふ文例をあげてゐる。原本では「申しま」と「するは」との間で行が改まつてゐるので、「ら」を誤脱したのではないかとの疑も抱かれる。若しも、誤脱でないならば、「まする」はこの頃に發生してゐたと見られるであらう。

「奉る」　助動詞の「奉る」は、室町末期に至ると、說教とか莊重な話振をする場合とかの外には餘り用ゐられなかつた。日常の會話で慇懃を極めた言ひ方をする時に「奉りまらする」と言つた(大文典一六三丁裏)。

内々申し上ぐる如く必ず御光儀待ち奉りまらせうず(黑船物語)

「申す」　謙語の助動詞「申す」は鎌倉時代に盛に用ゐられ、室町時代にも及んで居り、消息語としては「申しそろ」が常用された。尤も女子の消息では「參らせそろ」を常套語とした。室町末期の口語に「申す」を用ゐたのは、關東地方や九州の肥前肥後薩摩日向等であつて、京都の「まらする」に當るのである(大文典一六三丁裏)。

「致す」「仕る」「賜はる」「承る」　室町末期には、「致す」も「仕る」も普通に用ゐたが、消息でも談話でも「致す」の方を多く使つた。「仕る」は「致す」に比して謙遜の度合が强かつたのである(大文典一六六丁裏)。「受ける」意の「賜はる」は口語で tamôru と發音し、「聞く」意の「承る」も vqetamôru と發音した。

「る」「らる」　「る」「らる」は「ある」を用ゐる言ひ方と共に近古に於ける最も普通の敬語助動詞であつた。これらより一段高い敬意を表すのには、「す」「さす」を添へた「せらるゝ」「させらるゝ」が室町時代に多く用ゐられた。「なさるる」も「ある」よりは敬意の高い言ひ方として「せらるゝ」等と同樣に用ゐた。「死ねた」は「死なれた」と同じく、可能

のみならず尊敬の意味にも使つた(大文典一六七丁裏)。

「しも」「さしも」「しむ」「さしむ」　室町時代の敬語助動詞に「しも」「さしも」「しむ」「さしむ」といふのがあつて、抄物に多數の用例を殘してゐる。各活用形は必ずしも一定してゐないで、種々併用せられてゐる。未然形には「イカシマワバ」(四河入海、一ノ三)・「談シサシマバ」(四河入海、十五ノ一)・「知ラシモヌゾ」(史記抄、十一)・「イラシムウズ」(四河入海、十五ノ四)などあり、連用形には「死ナシマウタ」「勝タシモウタ」(以上史記抄、十一)・「ナラシモタ」(史記抄、七)・「イラシムテ」(三體詩絶句抄、四)などあり、終止形連體形には「イサシモゾ」(史記抄、四)・「イワシモウゾ」(中華若木詩抄、上)・「思ハシム事」(蒙求抄、六)などあり、命令形には「カウサシメトサシメ」(史記抄、十)・「モテナサシマヘ」(四河入海、二ノ三)などあり、已然形は用例が見出されてゐない。

動詞への接續は未然形からするのであつて、四段活用及びナ變活用に「しも」「しむ」がつき、それ以外の活用に「さしも」「さしむ」がつくのであるが、往々例外がある。例へば、「歌ハサシムナ」(三體詩絶句抄、四)と四段活用に「さしむ」をつゞけ、「生ジサシモタゾ」(史記抄、七)と連用形につゞけた例がある。

湯澤氏は、この語の本源が、敬語の「す」「さす」に「たまふ」のついた「せたまふ」「させたまふ」にあると解釋せられた。即ち、史記抄に「用ゐさせ給はゞ」といふのを「用サシタマウバ」(十五)とした例があるので、「せたまは」が「したまう」となり、次に「た」の音を失つて「しまう」となり、或は更に語末の長音を短くして、「しも」又は「しま」といふ未然形が先づ出來たが、末音が「む」となつてゐるのは、當時「見たうもない」が「見たむない」「見ともない」「見とむない」など變化してゐるのと同じ音變化であつて、「しめ」は「しまへ」から出たと觀られたのである(國語と國文學第六卷第

九號所載「足利期の敬語助動詞シモシムに就いて」)。

室町末期になると、助動詞としての働を失つたらしく、命令形の「しめ」「さしめ」の外は用例なく、而も敬意は殆ど失はれてゐる。

「ます」　四段に活用する敬語助動詞「ます」は室町時代になると、單獨にも用ゐたが、多くは「我レハ誰レホドノ天子ゾト問シマス」(蒙求抄、二)「年ゴロモ相好モヨク似サシマシタ」(四河入海、二十二ノ一)の如く、「す」「さす」と連ね用ゐ、而も「ます」は連用形に續く助動詞であり、「す」「さす」の連用形は「せ」「させ」であるのに、「します」「さします」となつてゐる。「せます」「させます」の用例が、抄物にあるかないかは定かでないが、ロドリゲスの言ふ所によれば、都に於て「るゝ」「らるゝ」を用ゐると同程度の敬意を示して、「書かせます」「申させます」「死なせまつた」「上げさせまつた」などと言ひ、九州ではそれを「習はせめす」「讀ませめいた」又は、「讀ませまつた」「上げさせめす」と言つた(大文典一四丁表七〇丁表一六五丁裏)。さうして、ロドリゲスも他の所では「死なしまつた」が「死なれた」と同義に使はれることを言つてゐる(大文典一六七丁裏)。故に、必ずしも「せ」「させ」のみに續いてゐたのでもないやうである。コリャドの日本文典にも、この語を他の敬讓助動詞と共に擧げて說き、拉文版本(四〇頁)には「せます」「させます」のみを出してゐるが、西文寫本(八四頁)には「させます」「さします」兩方を出して「上げさします」との例を示してゐる。四段活用動詞につゞいた例には「せます」とのみ書いてゐるけれども、「します」とも言つたのであらう。

【命令法】　1(命令)　命令の言ひ方は敬卑の度合に應じて色々あつた。ロドリゲス大文典命令法の條(一三丁表―一四丁裏)に說く所によつて、主として室町末期の用法を述べて見よう。

全く敬意を含まない言ひ方は、動詞の命令形そのまゝを使つた「上げい」「上げよ」「讀め」などである。これは身分の低い者例へば下人(げにん)・下(しも)の者・男・小者(こもの)・仲間などに向つて用ゐた。かゝる言葉遣をしてよい身分の者であるかどうかを聞くのに、「この人はたうせいかうせいの通りか」といつた。これと殆ど同じやうな言ひ方は、動詞の未然形に「しめ」「さしめ」を添へて「讀ましめ」「定めさしめ」などといふものである。狂言等にその用例は多い。敬語の助動詞「しむ」「さしむ」の名殘と考へられるが、ロドリゲスは召使に向つて用ゐて適當で、輕蔑した言ひ方であるとしてゐる。

幾分か敬意を添へるのには、「い」「さい」を動詞の未然形に加へた。

　十七八ははや川のあゆそろ、よせて〳〵せきよせて、さぐらいなふ、お手でさぐらいなふ(室町時代小歌集)

　なみさひそ(な見さいそ)〳〵、人のすいする、なみさひそ(閑吟集)

「い」は四段ナ變に、「さい」はその他の活用に接するのであるが、四段等が「い」をとることは普通でなかつたものか、小文典では二段一段の動詞が「さい」をとる例のみを擧げてゐる(二〇丁裏二五丁裏)。四段に「さい」をつけた次の例は、「はなさい」とあるのに牽かれたのでもあらうか。

　そとかくれてはしてきた、まづはなさいなふ、はないてものないわさいなふ(室町時代小歌集)

ロドリゲスは、親が子に向ひ、主人が下男下女等に向つて使ふのであつて、かゝる言ひ方をすべきかと聞くのに「たうさいかうさい程にか」と言つたと說いてゐる。

「い」「さい」よりも敬意をこめた言ひ方は、「せます」「させます」を用ゐたものである。「たうさせませかうさせませの衆か」といつて、この助動詞を使つて話すべき程度の人かと聞いてゐた。特に京都で用ゐた助動詞であつて、「る

る」「らるゝ」とほぼ同程度の尊敬をあらはしてゐるが、「るゝ」「らるゝ」の方がいくらか敬意が重かつた。

「せらるゝ」「させらるゝ」を用ゐたものは一段と敬意が加はるのであつて、「この人はたうさせられいかうさせられいの人體（じんたい）か」と言へば、この人には「上げさせられい」「讀ませられい」などの言葉遣をすべきであるかといふ意味である。「ある」「なさる」を用ゐた言ひ方もこれと似た尊敬をあらはした。

未來の言ひ方をすれば、命令形をそのまゝ使ふよりも丁寧である。

以上述べた事を「上ぐる」の語に就いて順次に示すと次のやうになる。

一、上げい・上げよ　二、上げさしめ　三、上げさい　四、上げさせませ　五、上げられい　六、お上げあれ
七、お上げあらう　八、上げさせられい　九、お上げなされい　十、お上げなされう

同義の敬語動詞を色々と持つてゐる語の一例をあげると、

一、來い　二、いらい　三、おりやれ　四、おぢやれ　五、ござれ　六、ござらう　七、おいでなされい
八、おいでなされう

その他丁寧な言ひ方としては、謙語の動詞を用ゐる。例へば、「書いて下されよ」「參つてたまうれ」「人に遣はいてたもるな」などがそれである。「して呉れい」「書いてくれい」「人に云うて呉るゝな」などは、やゝくだけた言ひ方である。

2〔禁止〕　禁止の意をあらはす助詞の「な」は、動詞及び動詞的活用をなす助動詞の終止形につき、終止形と連體形とが同形となつてからは、「上ぐるな」「着するな」と言つた。サ變の動詞と使役の助動詞とには「斬りばしすな」「天邊（てへん）

を射さすな」の如く文語的言ひ方が多く用ゐられた。又、下二段活用を承ける場合には、「我ガ子孫ニバシ知ラセナゾ」（史記抄、十三）「カマイテ吹入レナ」（三體詩絶句抄、三）「かまへて念佛を怠らせられな」（天草本平家、二）の如くにも續けた。その活用形は、「なーそ」を用ゐる場合と關聯して考へるに、連用形と見てよいやうである。ロドリゲスも、「上げな」「着せな」「召されな」等の例を出して、下品な言ひ方であるとて斥けてゐる（大文典二六丁表）。

「なーそ」は、近古の終に至るまで口語の上に生きてゐた。室町時代には四段活用の動詞や形容動詞が挿まれると、「な讀うぞ」「な汚いそ」「な習うそ」「な斬つそ」「な拜みあつそ」「な深かつそ」など、その連用形は音便によつて變るのが普通であつた。カ變サ變の動詞は未然形をとるのであるが、室町時代にはサ變が「なしそ」と連用形をとつた例が多い。一般の用法に類推したのであらう。

この言ひ方で禁止の意は「な」にあるけれども、「そ」のみを用ゐた例は近古にぼつ〳〵見える。

室町末期に「上げと」「讀うど」「習うと」といふ禁止の言ひ方があつた（大文典二六丁表）。恐らく、「なーそ」の「そ」のみを用ゐたものが音變化によつて「と」となつたのであらう。四段活用動詞の場合に音便をとつてゐるので、さう解せられる。「そ」のみを用ゐた文獻上の例は乏しいが、實際のくだけた會話では決して珍しくなかつたのであらう。

3〔願望〕　願望を表すのには、動詞の命令形に「かし」「がな」を添へる。「がな」は名詞にもつく。この場合には、中古以來、「人傳ならで言ふ由もがな」の如く「もがな」と「も」を伴つて用ゐたが、室町時代には、「がな」を名詞に直接した。

かごがな〳〵うき名もらさぬかごがなふ（閑吟集）　　セメテ京一ノ便宜ガナト思フテ（三體詩絶句鈔、二）

自ら希求するのには、「たい」のみでなく、「讀みたい事ぢや」「見たいものぢや」などの言ひ方が多く行はれた。

4〔放任〕 放任を示すには、動詞の命令形そのまゝか、命令形に「かし」を添へたものを以てした。

その外、室町時代には色々な言ひ方があつた。「にてもあれ」「でもあれ」も多く用ゐてゐるが、抄物には「でまれ」「でまり」とした例がある。

凡人情ト云モノハ其善心デマレ惡心デマレ發スルトキニハ（四河入海、三ノ二）

當世ノイカナ宿學デマリナンデマリ云イマクルホドニ（史記抄、十）

「までよ」「まゝ」「まゝよ」も用ゐた。

面打ならば面打であらうまでよ（狂言、文山賊）

世間ハナントムツカシカラウトナニトアラウトマヽヨ（四河入海、九ノ三）

あげうとまゝあげまいとまゝいろはぬ。

【條件法】 1〔順説〕 助詞「ば」が動詞形容詞助動詞の未然形に接して順説の假定的條件を表すことは近古を通じて見られる。その「ば」がウ段の音節に續く時にはワの發音となつたやうである。抄物にも「ヤスクワ」「ナラズワ」の如く「ワ」の字を書いて居るものがあり、吉利支丹の羅馬字書ではすべて va ua としてゐる。かゝる場合にも鼻音を挿入すると「さなくんば」「せずんば」のやうに濁音に發音した。「ずは」は「ざ」ともなつた。

見めもよひがかたちもよいが人だにふらざなよからう（閑吟集）

室町時代には「ならば」「たらば」が接續助詞として用ゐられるやうになつた。

鳴クマジイナラバサテヨ鳴ナラバ人ヲ驚ホドノ事ガアラウゾ(史記抄、十六)

わが死んだならばこの笛をかまへて御棺に入れい(天草本平家、二)

我等が所へおいでなされたらば面目を施しまらせうず(イルマン・パウロ)

「ならば」「たらば」を「なら」「たら」とのみ言ふことも既にあらはれてゐる。

徐州前住守傅欽之トノ、時ナラ坐客ディラシム舒堯文トノ幸ニ此ニワタルガ(四河入海、七ノ一)

いとおしいといふたらかなはふず事か明日は又讃岐へくだる人を(閑吟集)

「苦しからざる儀に於ては申し上げうず」などといふ「に於ては」も、「ならば」と同一に考へられてゐた(大文典一一九丁裏)。「には」も用ゐたが、それを更に强めて言ふときには「参らうにこそ懇には申さうずれ」など「にこそ」とした(大文典一九丁表)。

室町末期の標準語で「見ば」「見たらば」「せば」「したらば」「讀まば」「讀うだらば」といふのを、肥前では、「みうば」「見てあらうば」「せうば」「してあらうば」「讀まうば」「讀うであらうば」などと言つた(小文典二二丁表)。近世に降つて元祿文學等にあらはれる「うば」と關係があるのではなからうか。

順說の確定的條件を示すのに、「ば」を已然形に接する方法は本より行はれてゐた。室町時代に「ならば」が獨立した接續助詞となつたやうに、「なれば」も獨立せんとする傾向があつた。然しその用法が限られ、「ぞ」によつて構成される疑問又は反語の句を承けた場合に使はれてゐる。

昭儀ハ何程ノ位ゾナレバ大納言ホドノ位ゾ(蒙求抄、五)

嶮しい所どもを歩かせらるゝ事をばいつ習はせられうぞなれば御足から流るゝ血は砂を染めて(天草本平家、三)

「たれば」の變形した「たりや」の用例もある。

見ずはたゞよからう見たりやこそ物を思へたゞ(閑吟集)

鎌倉時代には「間」を接續助詞として盛に用ゐたが、室町時代の末になると消息の候文等に限られるやうになつた。故に、天草本平家物語を見ると、原文に「間」を用ゐてある所を言ひ代へてゐる。例へば、「面魂にてある間」を「面魂であつたによつて」とし、「承候あひだ」を「傳へ聞いてござる程に」とし、「通らんとする間」を「通らうとする所で」としてゐる。「所で」は順說のみならず、逆說にも、また單なる並列にも用ゐたが、室町時代に多く用ゐたのは順說の場合である。

ロドリゲス大文典の條件法を構成する助辭を說いた所に、過去形の「あげた」未來形の「あげうずる」につゞく助辭として、「きざみ」「時節」「時分」「つがひに」「に」「には」と並べて「さかいに」を擧げてゐる。さうして、これらを用ゐた文は直說法にも接續法にも解せられると言つてゐる(二六丁表)。卽ち、「さかい」は「きざみ」等と共に名詞とも觀られ、「さかいに」で接續助詞とも觀られる狀態にあつたのである。「さかい」を名詞とするのは「堺」(さかひ)と解してゐたのであらう。當時はこの語の語源が明瞭にわかつてゐたと思はれる。同文典には又否定動詞の條件法未來の條に「あげまいに」と「あげまいさかいに」とを擧げて、上げないだらうからといふ意であることを葡語で註してゐる(二六丁裏)。これによつて、今日近畿方言にある「さかいに」が接續助詞となつたのはこの頃であることを知るのである。

「で」も亦「所で」「程に」等と同じく接續助詞となり、「お叱りあつたでわづらうた」の如く使つた(大文典一五三丁裏)。

「から」が接續助詞に用ゐられ始めたのも室町末期のやうである。

　歐陽ヲ居士ト云フハ佛法ヲ信タカラ云ト云(蒙求抄、五)

　濫ヲハジメトヨムハ濫觴ト云カラシテゾ(史記抄、十一)

かゝる「から」「からして」に就いて、湯澤氏は、動作の出所を示したものであつて、直ちに故にと譯するにはまだ距離がある樣に思はれると言はれた(室町時代の言語研究二六五頁)。ロドリゲスは、「から」の一用法として故にの意を表すことを述べて、「御存じないからさやうに仰せらるゝ」などの例を示してゐる(大文典一五四丁裏)。

2〔逆說〕　逆說の假定に「とも」、確定に「ども」を使ふことは言ふまでもない。なほ、「とも」を「あつたとも」「言ふとも」「參らうとも」と用ゐて、「確にあつた」「必ず言ふ」「間違ひなく參らう」の意を反語的に強く言ひ表すことは、室町末期からあり、この場合には普通と異なつたアクセントを以て發音した(大文典一八丁裏)。

「とて」「とても」も用ゐ、「ても」の用例も室町時代に增してゐる。

　神仙ナンドハ吳音ニ讀デモ不苦ゾ(蒙求抄、九)

　ドコノ官ニナツテモ只故ノアルヤウニシタゾ(史記抄、十二)

「けれども」を「ども」「と雖も」「と申せども」と同じく背戾の確定的條件を示すのに使ふやうになつたのは室町時代である。さうして、特に注意すべきことは、室町時代に於ける「けれども」が多くは「まい」「まじい」に接續してゐる事である。湯澤氏はこの點に着目して、「けれども」の接續に就いて解釋を試みられた。その說によると、「まじ」の已然形に「ども」のついた「まじけれども」を終止形の「まじ」に「けれども」の接續したものと考へ、一方「まじ」を「まい」と

言つてゐたので、「まいけれども」とし、更に連體形の「まじい」は終止形ともなつたので、

此時ハ范雎ト云マジイケレドモ後世カラカウカイタゾ（史記抄、十一）

犬は乘てまじいけれども上様（かみさま）はすてさせられてこの分にござる（天草本伊曾保）

と言ふやうになつた。かくて、「まい」「まじい」は終止形であると同時に連體形であるから、「久キケレドモ」（四河入海、廿一ノ一）と、形容詞の連體形につゞけた例さへ見えるのである。然し、普通には終止形に接續するものと考へたので、先づ「白いけれども」「新しいけれども」と一般の形容詞に及ぼし、更に發展して、「行くけれども」「見たけれども」と動詞助動詞にもつくやうになつたのである（室町時代の言語研究二一四—五頁）。

「なれども」も疑問反語推量等を表す句に續けて用ゐられてゐる。

其ワザコソアラウズラウナレドモ此ニ齊之贅壻也ト云タハ（史記抄、十六）

いとけない心に何事なか聞きわきまへられうぞなれどもうちうなづかるれば（天草本平家、一）

中古以來の「が」「に」「を」は何れも行はれたが、「が」の勢力が強まり、「を」は衰へて行つた。室町末期に於ける「を」は用法が限定せられ、「うずるを」と用ゐて何々すべきであるがの意を示してゐる。

すなはち御目にかゝらうずるを只今却てその座の妨げと存ずる故にわざと罷り出でぬ（醫者物語）

消息の候文には「處」を逆説の接續助詞に用ゐてゐるが、平家物語等には殆ど見られない。消息語として發達したのでもあらう。「間」と同じく、男言系統の消息に於て、初は「（候）之間」「（候）之處」と用ゐてゐたのが、動詞助動詞に直接するやうになつたのである。「候處」といふ言ひ方の現れたのは、「候間」より後れて室町時代に降るやうである。

助　動　詞

【指定の助動詞】　室町時代に於て、助詞「で」の次に「ある」「ゐる」「をる」その他敬譲の動詞の連續したものは指定の助動詞として用ゐられた。

呉代ノ音ガ流布シタデアラウゾ（史記抄、九）　居士（中略）藝アツテ隱者デイタ者ヲバ云フベキゾ（蒙求抄、五）

前代ノ者ガ盗人デヲルナンド、云テ（勅規桃源鈔、三）

その中「である」が最も多く用ゐられ、その末音が落ちて「であ」ともなつた。

皆知つた事であ。　凡人よりも重罪に附せうずることであ（天草本伊曾保）

か丶る例文の「であ」は羅馬字で dea と記されてゐるけれども、dea と gia との中間に發音せられるべきであつて、gia ともなることはロドリゲスの說いてゐる所である（大文典一五三丁裏）。假名で「ぢや」と記した例は抄物等から見えてゐる。さうして、「ぢや」は普通に終止形に使ふのであるが、連體形にも時に「伯父ぢや人」或は「サタラナ相通ヂヤイハレ」（史記抄）とやうに用ゐた。ロドリゲスは dea, dearu に相當する語形として gia, giaru をあげてゐる（大文典一七八丁表）。「ぢやる」の形もあつたのである。

たゞ人にはなるまじ物ぢや、なれての後にはなるるるるるるるが大事ぢやる物（閑吟集）

「ぢや」は「トヂヤカウヂヤト云ゾ」（史記抄、四）「奥州の嗣信ぢやは忠信ぢやは辨慶ぢやはなどといふ者共」（天草本平家、四）など、並列するにも用ゐ、又「辛亥ヤラウヂヤゾ」（史記抄、二）、「入れまらせうずるぢや」（天草本平家、四）など、述語に立てる用言にも添へた。

西部方言の「ぢや」に對する東部方言の「だ」も室町時代にあらはれてゐる。大體には西部方言を以て書かれてゐる湯

山千句や葛藤集の如き抄物の中に、「猛虎ダ」などと散見するのであつて、それは關東出身の筆記者が自己の方言を混じたからであると、小林好日氏は解せられた（室町時代言語研究叢書一九頁）。

【打消の助動詞】「**ぬ**」「**なんだ**」「**いで**」「ず」は、中古に、終止形が「ず」連體形が「ぬ」であるが、近古に、連體形が終止形の位置を奪つてからは、文語的言ひ方をする場合に「ず」を用ゐる外は、終止形も「ぬ」となつた。

ソモ渚ヘイヅル道ノ案内ヲシラヌ（延慶本平家、五本）

などは早い用例であつて、室町時代の中期から終止形は「ぬ」になつてしまつた。

「ぬ」の過去「なんだ」は室町時代にあらはれた。この「なんだ」の成立に關して、湯澤氏は、抄物に「行カナンダレバ」（蒙求抄、六）「云ハナンダルモノゾ」（史記抄、四）「ミヘツミヘナンヅシテ」（四河入海、九ノ一）「殺サナンデ候ゾ」（蒙求抄、一）などと用ゐられてゐるのによつて、「なん」が打消の意を持ち、連用形として「た」なる過去助動詞に接續したものであると說かれた（室町時代の言語研究二〇六頁）。遡つて、延慶本平家物語に、

一日ニ二度參ズル日ハ候シカドモ不參ノ日ハ候ワナムシニ今日都ヲ罷出デ候テ（三末）

と、「なむし」によつて打消を表してゐるので、その「し」は過去助動詞「き」の連體形であつて、「なんだ」はこの系統をひくものであらうと、山田博士は推定せられた（平家物語の語法、下一二一六頁）。また、新村博士は、萬葉集の東歌防人歌に見える「なふ」から出て、「行かなつた」「讀まなつた」と言つたものが、室町時代に促音を撥音化する傾向があつたのに牽かれて、「行かなんだ」などとしたのではないかとて、東國方言に由來するものとせられた（「天平時代の國語」東亞語原誌三四五頁）。

過去の打消の連用形には、「ずして」と續いた言ひ方も用ゐるが、「いで」といふ形が現れた。梁塵秘抄神社歌の中に「かたびらにしりをだにかゝいで」とあるのを最古の用例に數へられてゐるけれども、幸若舞曲に「知らいで」(富樫)「臆せいで」(和田義盛)などとあるのを以て確實な用例の早いものと見るべく、「いで」が一般に勢力を得たのは室町時代からである。

大槻博士は「いで」の成立を說いて、「ぬ」の「い」と變つたものか、又は文語に「見ずて」「受けずて」「讀まずて」を約めて「見で」「受けで」「讀まで」とも云ふのを延べたのであらうかとせられた(口語法別記二四五頁)。史記抄(九)に「王ノ我ヲイカントモエセイ事ヲ云タテ、末ニ是無奈我何トシタゾ」とある「エセイ事」が、「えせぬ事」の意であれば、「んで」が「いで」となつたとの推定も有力となるであらう。然し又、延音の類例も古來少くない。たゞ近畿地方に行はれる延音は、古今を通じて單音節語に限られて居る。さうして、この場合はイの音があらはれてゐるのであるから、上一段活用の單音節語が「で」に續く場合に「見いで」「射いで」「着いで」などと言つたのが他にも及んだと解すべきであらうか。それにしても、エの音に終る二段活用などはよいとして、アの音に終る四段活用などにも適用するに至つたと見ることには可成り困難があるが。大槻博士の提示された二案の中では、後者に可能性が多いやうに考へられる。

「ざる」「ざつた」　「ず」と「あり」との融合した「ざり」は中古に盛に用ゐられ、近古にも傳へられたが、室町時代の口語では、中國及び豐後筑前その他九州地方に用ゐられて、それより東の方では行はれなくなつた。さうして、その終止形は「ざる」となり、過去には「參らざつた」「せざつた」「上げさつてござる」など「ざつた」を用ゐた(大文典二五丁裏一五六丁表一六九丁裏、小文典三二丁裏)。

「ない」　今日見るが如き西部方言の「ぬ」と東部方言の「ない」との對立は、室町末期に明かに存してゐた。ロドリゲスは、「あげない」「讀まない」「習はない」「申さない」などを關東方言の例にあげ、その「ない」は「ござない」「おりない」「おんない」といふ場合の「無い」とは成立を異にすると說いてゐる（大文典一五六丁表一七〇丁裏）。關東方言の「ない」が上古の「なふ」の後身であることは疑ふべくもない。その變化過程に就いて、橋本教授は

ナフの連體形のナヘは後にはその發音がナエとなつたと考へられ、更に後には連體形のナエが終止形の代りにも用ゐられたらうと思はれるが、このナエは、形容詞の「無し」の口語の連體及び終止のナイと音が極めて近い上に、その意味も相類してゐる爲に、遂に之と混同してナイの形となり、活用も之に準じて形容詞的になつたものと考へられる。

と述べられた（岩波講座「國語學概論」上五一頁）。

勾㒵字ハ下ニ注アレドモ勾ノ義ハ貞實ニシナイトシタゾ（史記抄、九）

などは文獻に載つた用例の早いものであらう。近世に入つて東國方言を用ゐた書物にはぽつ〳〵見えてゐる。ロドリゲスは、イルマン養方軒パウロの物語に「あげないでごげる」「申さないでござる」「あげなんだる」など普通には殆ど用ゐない言ひ方を屢用ゐてゐると述べてゐる（大文典二六丁表）。パウロの生國は若狹なので、當時この方面は「ないで」を使ふ地方に屬したのでもあらうか。今日とは異なつてゐるのであるし、「あげなんだる」と言ふのと共に疑問となる記述である。

「まじい」「まい」　推量的打消の「まじ」の連體形「まじき」は鎌倉時代に「まじい」ともなり、室町時代からは「まじい」を終止形にも用ゐた。

これより越中へ御下向はなか〱叶ひ候まじい、それな如何にと申すに(幸若、笈探)

室町時代からは又「まい」が「まじい」と同義で終止連體形に於て併用せられ、後に「まい」によつて統一せられた。「まい」の由來に關しては、口語法別記に、「まじ」は「こよひをばすぐすまじ物をと思ひける」(義經記、四)と連體形にも用ゐたので、その「まじ」が「まい」となつて終止形をも兼ねたと見てある(二五六頁)のに從ふべきであらう。ロドリゲスが文語動詞の活用を示した中にも、「あぐまじきよし」「あぐまじきため」「あげまじきもの」と共に、「あぐまじものを」「あげまじものを」「あぐまじ事」「あげまじ事」とあるので(大文典四三丁裏)、室町時代に「まじ」を連體形にも用ゐてゐたことが知られる。

文語の「まじ」は動詞助動詞の終止形につくのであるが、「せまじきこと」(宇治拾遺、一)「みまじきと思へども」(後鳥羽院御百首)の如く、未然形からも接續するやうになつた。室町時代に至つてこの傾向は甚しくなつた。四段活用は終止形につゞくのが普通であるが、それでも「聽かまい」「降らさまい」「知らまい」などの例が抄物にはある。ナ變は「死ぬまい」とのみ言つてゐる。四段ナ變以外は未然形につく方が多かつた。然し、「求めまじい」「求めまい」「立てまい」「せまい」などといふのは、訛りとして上品な言葉遣には避けられたやうである(小文典二二丁表二三丁表)。

【時の助動詞】 1(過去と完了) **「つ」「ぬ」** 完了の助動詞の「つ」と「ぬ」とは中古に大いに行はれたが、近古に入つて次第に勢を失ひ、室町時代には、「ぬ」をば「をはんぬ」とよんで、打消の「ぬ」を「不のぬ」といふのと區別して、文語的言ひ方をする場合にのみ用ゐてゐた。「つ」は「ぬ」に比して口語の上に長く生き延びた。然し、この助動詞本來の意義用法を全體的に保持する事は出來ないで、次第に縮少して行つた。「つる」「つれ」は終止連體形已然形に用ゐられ

て完了又は過去の意を示し或は叙述を確めてゐる。「つ」は特殊な用法を持つてゐた。例へば、

甲斐信濃の源氏共は案内は知つつ、富士の腰から搦手にまはる事もござらうず。(天草本平家、二)

か丶る「つ」はいくらか接續のはたらきをなしてゐるであらう。又動作を並列するのにも使ふ。

目をすがめつ目影をさいて延びつ屈うつみる間に沖より涼しき嵐吹き來る(黒船物語)

あさましうあわて騷いだ事共を思ひ出して語りだし泣いつ笑うつせられた(天草本平家、四)

か丶る言ひ方は「ぬ」にもあるのであつて、後の例文は百二十句本平家物語(十)では「なきぬわらひぬせられけり」となつてゐる。

「たり」「た」　「たり」の終止形連體形を「た」とした例は、藤原爲忠朝臣集の歸雁の歌に「時きぬとふる里さして歸る雁こそきたみちへまたむかふなり」と、「來た」に「北」をかけたのなどが古い。延慶本平家物語にも「殺シ奉リタト申ス」(二末)とあり、終止形連體形に「た」を用ゐる傾向はその後次第に強まつた。室町時代中期以後は、この「た」が他の助動詞に代つて過去を示すやうになつた。かくして、文語の「たり」のつかない形容動詞にも「ナカツタゾ」(蒙求抄、五)「おびた丶しかつたと申す」(天草本平家、四)などとつけた。尤も、「た」は過去のみに用ゐたのではない。ロドリゲスも、現在にいふ事があるとて、「知つた」「存じた」「かしこまつた」「見上げた」「似やうた」「すぐれた」等を擧げてゐる(大文典一一丁裏)。これらは繼續態存在態に使つたものを指してゐるであらう。繼續態存在態には「てある」「てゐる」「てをる」といふ言ひ方も用ゐた。さうして「つ」「ぬ」「たり」「けり」の本來の意義を示すやうになつた。例へば、天草本平家物語に「小枝といふ笛もまだお腰にさ丶せられてあつたを見て」(一〇)は文語文の「さ丶れたる」(四)を、

「さてこそ我主の行方とも知つてあつたれ」(一)は「しりてけれ」(三)とあるを口譯したのである。

「き」「けり」　鎌倉時代には過去の助動詞に「けり」を多く用ゐた。殊に詠嘆の意をこめた「てけり」はテンゲリと發音して軍記物を特色づける語の一つとなつてゐる。「き」の連體形「し」を以て文を終止することは中古に萌し、近古には廣く行はれた。室町時代になると、「き」も「けり」も次第に「た」に勢力を奪はれた。故に、

ほうぢうと申もの御むかへにまいりて候と人ないれていはせければはゝ御ぜんたゞわれなさきにうしなへとてぞなかれける。此三とせはたかくだにもわらはざりし人々のこゑをあげてさけび給ひける。

と、百二十句本平家物語(十二)にあるのを、天草本(四)では次のやうに改めてゐる。

北條と申す者お迎ひに參つてござると人を入れて云はせたれば母御前たゞわれを先に失へと泣かせられた。この三年は高うさへ笑はなんだ人々が聲をあげて叫ばれた。

抄物に、

通鑑ハアマリ繁多ナホドニ節略シテセウトバシ思タケルカゾ(史記抄、二)

文武ノ興リハ太伯ガ讓タシニヨルコトゾ(同、十九)

と、「たし」「たける」を「し」「ける」と同様に用ゐてゐるのは、「た」の勢力増大の一過程を物語るものでもあらう。

2(未來)　推量の助動詞「む」は、時の未來をも表すに至り、それと共に語形も「う」に變つた。「む」が母音を失つてmとなりnとなつたのは中古にあり、その鼻音が近古に「う」と變化した。康治元(一一四二)年の奥書を有する西念の極樂願往生歌に「ウシヤウシイトヘヤイトヘカリソメノカリノヤドリヲイツカワカレウ」と冠脚の文字を整へる爲に用

ゐたのが古い例であつて、鎌倉時代中期以後になると「往生せう」(法然上人行狀畫圖、廿六)「チキフ」「切ラレウ」(延慶本平家、二末)など、その例が乏しくない。「むとす」は既に中古に「んず」となつてゐたが、近古には單なる未來をあらはして盛に用ゐられ、形も「助ウズルゾ」「スマセウズレ」(延慶本平家、五本)のやうに變化した。

かゝる「う」は初め母音のウに發音したのであらうが、室町時代には前に來る母音と融合して長音となつた。四段活用ナ行變格活用ではauから開音のǒとなり、カ行變格活用ではouから合音のôとなり、サ行變格活用下二段活用ではeuから合音のオ段拗長音となり、上二段活用上一段活用ではiuからウ段拗長音となつた。即ち、イの音に終る上二段及び上一段活用に於てのみウ段の長音であつて、その他はすべてオ段の長音であつたのであるが、室町末期になると、上二段及び上一段活用もオ段の拗長音をとるに至つた。それを吉利支丹の羅馬字綴で次のやうに寫してゐる。

miô(見う)　meô(見う)　cocoromiô(試めう)　vramiô(恨めう)　ſagiôzuru(恥でうずる)　voreô(下れう)　deqeô(出來う)

ſorobeôzu(亡べうず)　mochiyôzuru(用ようずる)　vochôzuru(落てうずる)

閑吟集には「爲よう」「爲ようずらう」と書いた例があるが、一方には「爲う」と書いた例もあるので、何れも「シヨウ」とよむべきものであらう。四河入海(十二ノ一)に「山中ニヲル人ノミヨウ晝デハナイゾ」とある「ミヨウ」も亦「ミヨウ」即ち羅馬字でmiôなどと書かれてゐる發音を寫したものであらう。さうすると、上一段活用から「う」につゞく時にオ段の長音となることは天文の初年頃にも稀に現れてゐたのであらう。

吉利支丹本に、その發音を寫してiôとeôとの兩様に書いたのも、必ずしも發音上の區別を示してゐるのでないといふ事は、既に音韻の章に述べた所である。然し下二段活用では、eôとのみ書いてiôと書くことはないのであるから、

上二段及び上一段活用にあつては、eŏとのみ寫されるのと全く同じ發音ではなく、多少動搖してゐたか、或は中間的な發音であつたのでもあらう。ロドリゲスは、大文典に於て、未然形がgi(ヂ)に終るものは未來形がgiŏ(ヂョウ)となり、jo, ji(ジェ・ジ)に終るものはjŏ(ジョウ)となるなどと、上二段活用も下二段活用と同形の未來形をとるやうに說いてゐる(七丁裏)。然るに、小文典に至つては、上二段及び上一段の活用を說明して、未來形はiにŭ, ŭzu, ŭzuruを添へるとて、

yŭ(居う)　kiŭ(着う)　niŭ(似う)　miŭ(見う)　vramiŭ(怨みう)　fagiŭ(恥ぢう)　dekiŭ(出來う)　mochiyŭ(用ゐう)　vochiŭ(落ちう)

などと例示してゐる(二二丁裏—二三丁表)。大文典の所說と異なるのみならず、吉利支丹本の實例にも反してゐる。小文典は規範的立場を嚴守してやゝ概念的に流れた點があるので、これも本來の言ひ方を以て正しいとして、當時普通に行はれてゐるものに就いて敢て觸れなかつたのではなからうか。何れにしても、上二段及び上一段の未來形がオ段拗長音をとつたのは吉利支丹本に限らなかつたのである。和泉流狂言稽古本にも「過げうぞよ」(寢音曲)「樣子をみようと存ずる」(隱狸)とやうに、オ段拗長音に發音すべきことを敎へてゐる。今日の方言でも、愛知縣や近畿四國の諸所にこの樣な言ひ方が殘つてゐるのである。

かゝる言ひ方をなした所から「よう」の新語形を生じたのではないかと考へられる。さうして、上一段活用の「ゐる」の語に先づあらはれたものらしい。天草本平家物語(一)に「其儀ならば北面の輩箭をも一つ射ようずる」(iyôzuru)とあり、天草版拉丁文典に存在動詞sumの活用を示して日本語の「である」「ゐる」をあてた所にも、直說法未來及び

命令法現在に「ゐようず」(iyôzu)、可能法現在に「ゐようか」(iyôca)など、すべて「ゐよう」の形を出してゐる(一三丁表—一七丁裏)。帝國圖書館藏寫本詠歌之大概に「かたいとをこなたかなたによりかけて」の歌を註する條に「こなたもかなたもあはひでは何に玉のをにしてかけていようぞとの心也」とあるのが、日本側の文獻に見える「よう」の例としては早いものである。狂言稽古本にも「己に負けてゐやうか」(水掛聟)「待つて居やうと存ずる」(隱狸)とのみあつて、拗音に發音すべき記號の傍線を加へてない。他の拗音に言ふべき場合にも記號を脱した所がないでもないが、稽古本二十五册を通覽して見出し得たかの二例は何れもかくの如くなつてゐる。「よう」と「やう」との開合の別は亂れてゐるが、この點は稽古本に考慮してゐないのであるから、「よう」の用例に擧げてよいであらう。かくして、「よう」は先づ「ゐる」(居・射)の語に於て發生して、他の上一段活用の語に及び、上二段活用や下二段活用にも適用せられるに至つたものと思はれる。「ゐよう」以外の例が見當らないのを見れば、他の語に及んだのは近世に入つてからの事であらう。尤も、それは京都語に就いての事であつて、東部方言に於ては早かつたに違ひない。

なほ關東方言としては、「參り申すべい」「あぐべい」「習ふべい」など「べい」を盛に用ゐ、尾張から東へかけては「うず」の原形「んず」を使つて「參らんず」「あげんず」「せんず」などと言つてゐた(大文典一一丁裏一七〇丁裏)。

【推量の助動詞】「む」「う」が推量を意味して用ゐられた事は勿論であるが、室町時代に推量の助動詞として勢力を得たのは「らむ」、その新語形の「らう」であつた。室町末期に於て、「らう」を特に盛に使つたのは九州地方であつた(大文典二〇丁表四一丁裏一七〇丁表)。「らう」は動詞助動詞の終止形に接續し、語形の變化がなかつた。「つらう」は過去の推量、「うずらう」は未來の推量を示すが、又疑問の語と共に用ゐて事の不明な意や疑を存する意を表す場合が

「うずらう」に於て殊に多かつた。この時に「つら」「うずら」とした例が抄物に見える。

信陵君ヤナンドハ北面シテコウズラ今ハ對合ニ迎ントスルゾ（史記抄、十一）

臨罪トキニ不知法シテカシツラト云（四河入海、十三ノ四）

「にやあらん」も熟合して、「我子ニテオワシマセバニヤラム人ニ勝レテイミジクミヘ給フ」（延慶本平家、二本）の如く「にやらん」となり、更に「何ナル目ヲ見ルベキニテ候ヤラン」（延慶本平家、一末）の如く「やらん」となり、又「多いやらう少いやらうをば知候はず」（覺一本別本平家、四）の如く「やらう」となつて、すべて推量を示し又不確實さを表した。「やらう」に類推して「からう」といふ言ひ方も四河入海に「山カラウ雲カラウト思テ」（十二ノ一）と見えてゐる。

「べし」も亦用ゐた。上一段活用動詞について「見べし」などゝいふ事は中古以來往々あるのであるが、室町時代には「見るべし」といふよりも多く用ゐられた。下二段活用動詞について「コヽロヱベシ」「梅チウエベシ」など、連用形を承けることも抄物には例が多い。

完了の助動詞「つ」を伴つた「つべし」は室町時代に「つべい」又は「つべしい」の形で「此様ナ事ハ小人ノ小智ナ者ノ云イツベシイ事ゾ」（古文眞寶抄、七）「季倫ハ豪傑ナル程ニ泣ツベシウハナイゾ」（四河入海、八ノ三）などといひ、又「物ヲカエシツベイ者ニナラデハ不借」（史記抄、十八）などゝ可能の意を示したりした。「つべう」「つべい」と共に「つべしう」「つべしい」なる形の行はれたのは、文語の「つべし」が慣用的語句として固定してしまつたので、これを語幹として「う」「い」の語尾をつけたのであらうと、湯澤氏は說かれた（室町時代の言語研究二一一頁）。この特殊な語形は室町末期の一般の口語には餘り用ゐられなかつたものゝやうである。

【受身の助動詞】受身の助動詞は可能の意も表すが、その時には、中古に於けると同様に、「祈ドモ祈ラレズ祝ドモ祝ハレヌ我身也」（延慶本平家、三末）「大ナル物ハナニカ擧ラレウゾ」（史記抄、五）の如く、事實不可能の意を云すのが常である。さうして、「サフハ讀マレヌゾ」（史記抄、三）など、四段活用についた「れ」は上に來る音と融合して、「此ヲ中トハヨメヌゾ」（史記抄、十五）のやうにエ段の音となることがあつた。その形は肯定にも用ゐられ、こゝに可能を意味する下一段活用の動詞が現れたのであるが、それは獨り可能のみでなく、「此序ハ近頃見出セタゾ」（古文眞寶抄、一）と受身にも用ゐ、また「皆カウヨメ候ガ師古ハ此ノ義ヲキラウタゾ」（蒙求抄、一）など尊敬にも用ゐた。

「らる」が下二段活用動詞につくとき、「忘れらる」が「忘らる」となるなどは中古の和歌にも例が少くなく、近古に普通の事であるが、サ行變格活用動詞に接して「復せらるゝ」が「復さるゝ」とやうになつたのは、室町時代にあるらしく、抄物等からその用例が見え始めてゐる。サ行變格活用には、未然形の外に「サテモ文忠ノ膝上ニ置テ愛シラレシモノカ」（四河入海、二十二ノ一）の如く、連用形からも續いた。

【使役の助動詞】「す」「さす」は下二段活用の形式によるのであるが、連用形を「し」「さし」とすることが鎌倉時代から始まり、沙石集にも「コヽラアツマリヒサメキテヲガマントイヘバイデ、ヲガマシケリ」（四）と見え、室町時代に降るとその用例が多い。室町時代には、この助動詞がサ行變格活用に接續するのに、未然形について「せさする」となることは少く、多くは「さする」の形をとつた。「さする」の用例は宇津保物語や枕草紙の流布本などにも見えてゐるけれども、室町時代の義經記や曾我物語等からその數を増した。殊に二字の漢語からなるサ行變格活用動詞に於て顯著である。又、「らるゝ」がサ變の連用形につくやうに、「さする」も亦、「反シサセヌホドニ」（史記抄、七）「捨身の行を

修しさせられうずるには」(天草本平家、四)と、連用形につくことがあつた。

「す」「さす」は尊敬の意を表すのにも用ゐたが、その際には必ず他の尊敬の助動詞を伴つてゐて、單獨に用ゐることはなかつた。院政鎌倉時代の武士言葉に、受身の意を「す」「さす」を用ゐて表した事は、軍記物によつて、よく知られてゐる通りである。

「しむ」は上古に榮え、中古には漢文の訓讀に傳はり、近古にはその系統をひく文獻に散見してゐる。儒者や僧侶の言葉には用ゐられたかも知れないが、一般の口語の上では早くから姿を沒したやうである。

【比況の助動詞】「ごとし」は近古に於て助動詞としての活動が衰へ、末期には「ごとく」の形のみが用ゐられた。鎌倉時代にも「元ノ如クニ成セタマフ」(延慶本平家、一本)「草ノ風ニ靡ガ如クナリキ」(同、一末)「時政宗遠貫平如キノヲトナ共」(同、二末)と、「如く」「如き」が「に」「なり」「の」を伴つて修飾語をつくる傾向が現れてゐるが、その傾向は室町時代に降つて一層甚しくなり、「如きの」も「如くの」となつて、「前の如くの客衆達もあり」(黒船物語)などと言つた。天草本平家物語では、原文の「ごとし」を「ごとくにござる」などゝ改めてゐる。

「如し」がかゝる變化をなしたに就いては、この語と同義に用ゐられた「やう」の類推が與つて力あるであらう。「やう」は「さま」にあてた漢字の「樣」を音讀して出來た語であつて、「やうに」「やうなり」「やうの」などが用ゐられ、室町時代には「如く」よりも優勢に向つた。

助詞

助詞は、助動詞と同じく、近古に於て大きな變動をなし、語數の上では大體に於て中古よりも減少する傾向を辿つた。こゝには、既に言及した以外の注意すべき助詞に就いて簡單に述べよう。

「だに」「すら」「さへ」　中古には、この三つの助詞の中「だに」と「さへ」とが物語類に盛に用ゐられた。「すら」は上古に榮えて、中古の和歌に傳はり、漢文の訓讀に殘つた。歌語以外には主としては儒者や僧侶の間に保存せられたのであつて、近古に至ると、それらの人々の手になる文學的作品には「すら」が見えてゐる。「すら」は「そら」ともなり、寧ろ「そら」の方が多く用ゐられた。今昔物語集(廿六)では「人ノ見ル時ソラ己ガ見ユレ」の如く修飾語にもついてゐるが、圖書寮藏寫本寶物集では、「カイコ一ヲソラコロスベカラズ」と、目的語についたものは一つだけで、その他の數例は、「東方朔と申仙人ソラ西王母之桃ヲバ盜メル事三度ナリ」とやうに、主語についてゐる。延慶本平家物語でも、目的語についたのは「名字ヲスラ聞事ナカリキ」(二本)の一例に止まり、殆ど全部が主語についてゐて、「すら」は二ヶ所に見えるのみで、大抵は「そら」が用ゐてある(平家物語の語法、下一五六〇頁)。此の如く、「すら」「そら」の用法が限定せられて行くにつれ次第に滅亡に向つたのである。

「だに」と「すら」とは一端を擧げて他を類推せしめる事に於て相似てゐて、たゞ「だに」は極端の場合を提示するものであるから、「すら」の示す場合をも包含するに至つたのであるが、室町時代に入ると、「だに」と「さへ」との混同も生じた。さうして、一般には「さへ」が優勢となつて、「すら」「だに」に代用せられる傾向を持つてゐた。ロドリゲスは、「さへ」「すら」「だに」に何等の區別を立てず、主として「さへ」に就いて說明してゐるのであつて、これらの語は二つの事柄を比較する場合に用ゐる副詞又は條件的接續詞であるとて、その用法を精敍してゐる(大文典一一八丁表―一一九丁裏)。既にあるもの、上に更に添はる意を示す「さへ」の本義が忘れられて、寧ろ「すら」「だに」に代用して、條件法に立てる句の中に用ゐることが最も多かつたからである。

日本の諸宗の中には禪宗を第一と云ふさへ此の如くあれば、この後何を賴みまらせうぞ(豐後物語)

こゝもとの渡海にさへ何とも迷惑致すやうにござる程に、なか〳〵黒船などに乘ることなるまい(物語)

かうして居るさへ腹の立つに、わが眼の前で別の妻などを持たせてはあられうものか(天草本伊曾保)

「だにも」は「だも」の形でも用ゐられたが、ロドリゲスは、「だし」「だしも」が「すら」「だに」「だも」と同一の意義用法を持つてゐたとて、

女房侍多かつたれども、物をさへとりしたためず、門をだしもおしも立てず。この「だし」は「さへ」と同じい。平家、一、四章

と例文をあげて註してゐる(大文典一一九丁裏)。この文は天草本平家物語に屬するが、同本では「だしも」でなく「だに」とあり、もとの文語文でも「物をだに取したゝめず門をだに推もたてず」となつてゐる。「だしも」としたのはロドリゲスのしわざであらう。「だし」「だしも」が如何なる範圍に於て用ゐられたのか、他に用例を見出し兼ねるので、明瞭でないが、「ばし」の類推語形のやうに思はれる。

「ばし」　近古語の特色をなす助詞に「ばし」がある。更級日記に「心もしらぬ人をやどしたてまつりてかまはしもひきぬかれなば」とある「かまはしも」を「釜ばしも」とよんで、「ばし」の文獻に現れた最初とせられてゐる。「ばし」は「をばしも」の省略形と見られるけれども、更級日記の場合は「はーしも」と解する說が穩當であらう(宮田和一郞氏「更級日記評釋」三二一頁)。

「ばし」は「をば」から出てゐる爲に、延慶本平家物語でも、大部分は目的語についてゐるが、「ばし」は既に格を示すのではなく、修飾添意の助詞となつてゐるので、目的格以外にもついた。然し、これが用ゐられる場合は限られてゐ

て、先づ第一に疑問推量を表す句中に用ゐ、「小督ガュクヘバシヤ知タル」(延慶本平家、二本)「身バシ投ニ出ニケルヤラム」(同、六末)「網をばし引くか」(謠曲、藍染川)「何とした次第でばしござるぞ」(天草本伊曾保)などゝ言つた。次には禁止を表す句中に用ゐて「无禮バシ仕ルナ」(延慶本平家、五本)「かやうに申すとばし思ひ給ふな」(曾我物語)「文王ヲ釣タヤウニバシアルナ」(中華若木詩抄、中)「御心にばし違ふな」(天草本平家、一)などと言つた。その外「闕所バシモアラバ」(沙石集、三)「志ヲバシ得ラレタラバ」(史記抄、四)など、假設の條件を示す句中に用ゐた例が稀にあるが、第一の用法から派生したものである。

「ぞ」「ぞ」は句中にあつて係の助詞に立つよりも、文末にあつて所謂終助詞となる傾向があつた。文末に用ゐた「ぞ」は、指定と疑問とを表し、指定の意を示すものは、用言の連體形をうけるか體言をうけるかした。抄物で口語の解釋に「父ノ兄ヲバ伯父ト云ゾ」「甘泉ハ山名ゾ」などゝいふのも指定の意を表すのに基づいてゐるであらうが、既に中古から漢文解釋の一形式として存した所である。

疑問の意を示すものは、「イカニ己程ノヤツハ入道ヲバ傾ケムトハスルゾ」(延慶本平家。一末)「ナントテ比興ナ事ヲイワシモゾ」(史記抄、十七)「して合戰はどこであつたぞ」(天草本平家、三)など、疑問の代名詞か副詞かに應じてゐる。この「ぞ」が「誰(たれ)」につゞく時には「たれぞ」といひ、「た」につゞく時には「たそ」と淸む。然し室町末期にはこの區別も亂れたらしく、天草本平家物語等には「たそ」「たぞ」兩樣に書いてある。反語の場合にも用ゐ、「夜更けてたれかは尋ねうぞ」(天草本平家、二)「何ぞ運のつきた平氏に同心して運の開く源氏に背かうぞ」(同、三)などと言つた。終の文の如く「何か」を「何ぞ」といひ、又「ドコゾニアリゾスルラウ」(蒙求抄、六)「隴西ゾナンドアチコチ邊郡太守ニシゲウナツ

タゾ」(史記抄、十四)など、「ぞ」を疑問助詞「か」「や」と同じやうに用ゐるに至つたのである。

室町時代には、用言の終止形と連體形とが同形となつたので、「ぞ」に對する特別の結が意識せられなくなつた爲に、文語文に於ても終止形をとつて、「コレゾ士ト云ベシ」(論語鈔、子路)としたやうな例が見られる。

「こそ」 「こそ」に對して已然形を以て結ぶ法則は、室町時代になると、や丶亂れたけれども、大體に於ては、近古末に至るまで係の助詞としての力を持續してゐたと言つてよい。

主語に「こそ」を加へる時に、體言に「よ」を添へて述語を構成することが近古に多かつた。例へば「ワ殿原コソ現ノ人ヨ」(延慶本平家、二末)「これこそ其よと云ひもあへず」(天草本平家、一)などゝいふが、「こそ」の代りに「ぞ」を用ゐて、「コレゾ此入道ガ相傳ノ主ヨ」(延慶本平家、二末)といふことも稀にあつた。

「にこそあるなれ」が鎌倉時代に「ござんなれ」と熟合し、室町時代になつても多少用ゐられてゐるが、末期には殆ど言はなかつたものと見え、「さらばよきかたきござんなれ」といふ百二十句本平家(九)の文は、天草本に於て「さらばよいかたきぞ」(四)と改められ、同じく「かはしりにげんじどもおほくうかべて候とかや申されしござんなれ」(十一)なる原文は口譯本で「河尻に源氏共が多う浮かうでゐまらするとやら申されてござる」(四)と言ひかへられてゐる。

用言の未然形に「ばこそ」を加へて下を略した反語的言ひ方は、宇津保物語にも「里に住めどもあこより外に見え通ふ人のあらばこそ」(俊蔭)と見えてゐるが、近古には盛に用ゐた。その外に、室町時代には「てこそ」を連用形につけて「たべられてこそ」といふやうにも言つた。

ロドリゲスによれば、問に對して確答するのに、「こそ」を用ゐて次の如くに言つた。即ち、「これを見たか」の問に

答へて、「見てこそござれ」とも言ふが、「こそ、見申してござれ」とも言つた。或は又「參つてこそござされ」を「こそ、參つたれ」とも言ひ、時には、たゞ「こそ」とだけ答へる事もあつたのである(大文典一一六丁表)。

第四章　結　語

近古には、漢文漢語を崇拜する思想が強く流れてゐたので、漢語の借用が活潑に行はれた。その漢語の發音は多く日本化したものであつたが、「猶豫」「宗派」「獨歩」「雜談」「歡喜踊躍」「逢著」等今日と異なるものが甚だ多い。平民佛教の隆昌は佛教語を流布せしめ、「南無三寶」が感動詞として日常用ゐられるに至つたことは、佛教語が如何に民衆の生活に食ひ入つてゐたかをよく物語つてゐる。鎌倉時代以來彼我禪僧の往來によつて宋元の音が傳へられ、室町時代には明音も齎されて、これらを唐音とよんで、我が國語の中に取り入れたものも、「普請」「看經」「行在」「杜撰」「剽輕」「饅頭」など少くない。

單に支那語をそのまゝ輸入したのみでなく、固有の日本語も漢字によつて書き、その當字を音讀して和製の字音語を製出した。「をこ」から「尾籠」、「ではる」から「出張」、「かたりあふ」から「談合」、「おはしまし候」から「御座候」をつくつたなどそれである。「世ヲ御憚リ有リ」「公ニナリタイト思イアルカ」「鎌倉へお入りあつた」などの言ひ方が現れ、「に於ては」「ときんば」(則)等が盛に用ゐられたのも、漢文訓讀の影響と見做される。その他漢文の訓讀から出た特殊な語法言葉遣が、この時代から一般化して普通に行はれるやうになつた事は看過出來ない。これらは畢竟儒者や僧侶が智識階級の地位に立つて、前代からの支那崇拜漢語尊重の念を一層助長せしめたからである。

然し、その反面には日本語尊重の氣運が動いてゐた。「善惡」(必ず)「治定」(必ず)「如法」(宛も)「端的」(直に)の如き漢語が副詞にまで侵入せる時、「はたと」「むずと」「きと」「しやくと」「きよと」などこそ和語の本體であるとて、「眞名ノ文字ニハセラレヌコトバノムゲニタヾ事ナルヤウナルコトバコソ日本國ノコトバノ本體ナルベケレ」と喝破したのは慈鎭和尚であつた(愚管抄附錄)。

慈鎭が「無下ニ輕々ナル言葉」を用ゐて愚管抄を書いたのも、泰時が貞永式目の文句を平易にしたのも、眞名を知らぬ庶民に理解せしめようと志したからである。抑近古は武家によつて代表せられる庶民階級の勃興した時代である。院政時代以來田舍武士の京都への進出と權力の增大とは自然京都語に影響を與へたに相違ない。平家物語に於て「物ナムド云タル詞ツキノ頑ナル堅固ノ田舍人ニテ淺猿クヲカシカリケリ」と評せられた義仲等の言葉の中に當時の新しい言葉遣を殊更に用ゐてゐるのも、その間の消息を物語るものがあるであらう。武家は公卿の生活を憧れ、京都語に魅力を覺え、公卿は武士を東鳥と侮り、關東語を「えびすことば」と貶してゐる間は、さして大いなる影響も現れなかつたであらうが、關東人に於て、「ことばつき音なんども京なめり(訛)にな」ることを極端に嫌つて「言をば但いなかことばにてあるべし」(日蓮、法門可被申樣之事)との自覺が高まり、京都に於ても、尊氏が征夷大將軍に任ぜられる頃は、「公家の人々いつしか云ひも習はぬ坂東聲をつかひ、着もなれぬ折烏帽子に額を顯して武家の人に紛れんと」するやうになると(太平記、廿一「天下時勢粧の事」)、關東の武士言葉は京都語に直接間接の影響を及ぼさずには措かない。自稱代名詞の「おれ」の流行は尊氏が世の中を專にした頃に始まるといふのも、その一例に過ぎなからう。その後も京都の地は屢兵亂の巷と化したのであるから、京都語は動搖せざるを得ない。信長秀吉の上洛からは尾張方言の感化も免れな

かつたであらう（東雅總論）。武士の擡頭、關東語の西漸のみが、近古に於ける京都語の變遷を生ぜしめた直接の原因ではないかも知れない。然しながら、重要な役割を演じてゐることは想像するに難くない。少くとも、その事を無視しては近古語の正當な理解は得られないであらう。

貴族の支配した時代に繁雜な然し微妙な言語、優長な表現が發達し、武士の跋扈した時代に單純な然し雄勁な言語、簡潔な表現が流行するのは自然の勢である。即ち、日本語は中古から近古に入つて、簡單化する傾向を現出したのである。中古語を特色づける多數の助詞助動詞は、この時變動を受けることが最も大きかつた。例へば、時の過去や完了を示す助動詞は淘汰せられて「たり」の系統をひく「た」のみとなり、助詞の「だに」「すら」「さへ」は區別を失つて「さへ」に壓倒せられるに至つた。すべて大まかな考へ方をし慌しい生活をなす時、微妙な差異を能く識別する事は望まれない。類推作用による單一化は愈機能を發揮するわけである。活用語は連體形が終止形を同化して語形變化を減少し、動詞の活用は四段活用と一段活用との二大型式に整理せられる傾向を現して來た。語形の短縮も種々な方面に認められる。係結の如き非論理的な贅物は次第に勢が衰へた。

さればとて、國語の精密な表現が出來なくなつたとのみも斷定出來ない。古語の衰退に代る新語の發生、殊には表現形式の變化を考慮に入れねばならない。概して言へば、總合的表現から分析的表現へと推移した。助詞助動詞は減じたけれども、副詞等によつて補はれたものが少くないのである。

斯の事實に對して、イェスペルセン流の言語史觀を以てするならば、日本語が進歩への一路を躍進したのであるとも言はれるであらう。然し、前代への文化を追慕して「何事も古き世のみぞしたはしき、今やうはむげにいやしくこ

そなりゆくめれ」と觀じた當代の人は、「車もたげよ」「火かゝげよ」との昔言葉を、今樣に「もてあげよ」「かきあげよ」と言ふのを聞いてさへ、歎がはしい限りであつたらしい(徒然草)。世上は愈亂れ言葉も亦下剋上する現狀を目前にしては、因襲の世界に立籠つた者でなくとも、之を放任するに忍びないものがあつたに違ひない。かくして、國語の規範意識が近古末に勃然として起つて來たのである。それが、人國記に於ける諸州語の批判となり、ロドリゲスの日本文典に反映し、降つては貞室の片言を出現せしめたのである。

追記　簡約にと志して筆を執つたのであるが、書き上げて見ると、豫定の紙數を甚だしく超過したので、更に筆を加へて壓縮にこれ努めた。それが爲に、往々理解し難い所を生じたやうである。讀者の寛恕を乞ふ次第である。

昭和九年四月十日印刷
昭和九年四月十五日發行

國語科學講座
（第八回配本）

東京市神田區錦町一丁目十番地
編輯兼發行者　株式會社　明治書院
代表者　三樹退三

東京市神田區三崎町二丁目一番地
印刷者　細谷祐三

發行所　東京市神田錦町一丁目　株式會社　明治書院